

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その七)

鈴木 満 訳・注

*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』(一八五三)(略称をDSBとする)の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig. Verlag von Georg Wigand. 1853. Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとウィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』(略称をDSとする)を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München. Winkler Verlag. 1981. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版(略称をGLとする)も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol. 1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここには記さず、本文に注番号を附し、「DS***に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があるうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といった高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

『ドイツ伝説集』 試訳(その一)	一	六〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号一七〜二三五ページ、平成二十四年十一月
『ドイツ伝説集』 試訳(その二)	六一	九〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号四六三〜二三五ページ、平成二十五年二月
『ドイツ伝説集』 試訳(その三)	九一	一三四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号七五〜一七六ページ、平成二十五年三月
『ドイツ伝説集』 試訳(その四)	一三五	一八四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号一五七〜二八五ページ、平成二十五年十一月
『ドイツ伝説集』 試訳(その五)	一八五	二二五	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号九五〜一八〇ページ、平成二十六年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その六)	二二六	二八八	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号二〇九〜三三〇ページ、平成二十六年十月

*本分載試訳（その七）の伝説

- 二八九 鉄山アイゼンズベルクの話 Vom Eisenberg.
二九〇 ヴェッター城 Welterburg.
二九一 シェルビルギント Schellpyrmt. *DS109 Hessental.
二九二 九柱ネンネン戯の黄金ゴウゴンの柱 Der goldene Kegel.
二九三 五本の柏エヒヒの下ノに出る物の怪 Spuk unter den fünf Eichen.
二九四 ハーメルンの子キムタたゞ Die Kinder von Hameln. *DS245 Die Kinder zu Hameln.
二九五 聖ゼンクトウイトゥスの贈り物 St. Viti Gaben.
二九六 天使エンジェルと百合リリ Engel und Lilien. *DS264 Die Lilie Kloster zu Colvey.
二九七 ヴィルヘルクの乙女 Das Fräulein von Willberg. *DS159. Die Nußkerne. / *DS315 Das Fräulein vom Willberg.
二九八 池から出て来た馬 Gaul aus dem Pfuhl.
二九九 巨人たち Die Hünen.
三〇〇 アーメルンアメルン族 Amelungen.
三〇一 小人ツワエルクの揺り籠 Die Zwergen-Wiege.
三〇二 許嫁ブラウジンの石 Der Brautstein.
三〇三 泣き女 Die Wehklage.
三〇四 塩メルトの牝猪 Die Salz-Sau.

- 三〇五 剥ぎだしの鏡 Der nackte Spiegel.
- 三〇六 ブレーメンのローラント Bremer Roland.
- 三〇七 神の戦 Gottes Krieg.
- 三〇八 七つの足跡 Die sieben Trappen.
- 三〇九 薔薇の雪 Hildeschnee.
- 三一〇 帽子小人 Hütchen. *DS75 Hütchen.
- 三一 一 イルメン柱 Irmensäule.
- 三一 二 ハイムリヒ獅子公の語 Von Heinrich dem Löwen. *DS526 Heinrich der Löwe.
- 三一 三 死んだ許嫁 Die todtē Braut.
- 三一 四 コールベックの踊り手たち Die Tänzer von Kolbeck. *DS232 Die Bauern zu Kolbeck.
- 三一 五 クレップル Die Kröppel. *DS154 Der Zug der Zwerge über den Berg / *DS155 Die Zwerg bei Dardesheim. / *DS156 Schmied Riechert.
- 三一 六 焔に包かれた伯爵 Der Graf im Feuer.
- 三一 七 ハツケルンブルクマナーター・ケーザル Der Hackelberg und die Tut-Osel. *DS311 Des Hackelberg Traum. / *DS312 Die Tut-Osel.
- 三一 八 底無じ Das Grundlos.
- 三一 九 巨人の血 Hünenblut. *DS326 Das Hünenblut.
- 三一 〇 人狼の石 Wärfwolfstein. *DS215 Der Werwolfstein.

- 三三一一 クロップペンシユネットの蓄へ Der Croppenstädter Vorrath. *DS583 Der Kroppenstedter Vorrat.
- 三三一二 クヴェードル Quedi. *DS488 Quedi, das Hündlein.
- 三三二三 エルフフユングフアー Die Erbjungfer. *DS60 Die Erbjungfer.
- 三三二四 マクデブルクの建設 Magdeburgs Erbaung.
- 三三二五 戦争の前兆 Kriegs-Vorzeichen. *DS145. Verkündigung des Verderbens.
- 三三二六 魔術の目眩ままく Zauberverblendung.
- 三三二七 カピストラヌスの最上な梨 Capistranus Cardinalsbirne.
- 三三二八 ヴォルミーアシユテットの石 Wohnirstätts Name.
- 三三二九 イーゼルン・シユニック Isern-Schibbe.
- 三三三〇 ソリス・ヴェルテ Solis-welte.
- 三三三一 杖に詰まったドウカーテン金貨 Stock voll Dukaten.
- 三三三二 テツツェルと騎士 Tetzzel und der Ritter.
- 三三三三 月の中の糸紡ぎ女 Die Spinnerin im Mond.
- 三三三四 アーレントゼー Arendsee. *DS112 Arendsee.
- 三三三五 教母ムッターエメレンツィア Mutter Emerentia.
- 三三三六 オスターブルクの災厄 Osterburger Pech.
- 三三三七 赤ローテい浅瀬 Die rothe Furth.
- 三三三八 同時に二人の妻 Zwei Frauen zugleich.

三三九 乙女ローレンツ Jungfrau Lorenz.

二八九 鉄山アイゼンベルクの話

ヴァルデック領には高山(1)が聳そびえていて、その頂きには城があった。山も城も同じ名で鉄アイゼンベルクの山である。この山は鉄鉱石を豊富に内蔵、城には遠い昔英雄しきヴァルデック伯爵家が君臨していた。この高貴な一族の多くがこの城で生まれ落ちたのである。もっともアイゼンベルクは鉄のみならず黄金も産出、山中では長い間並並ならぬ生産量の黄金採掘場が稼動していた。しかしその後城は廢墟はいきよと化し、かつての榮華は今いずこ、採掘場は放棄された。

ある日のこと、一人の羊飼いが人気のない山の高みで羊群の番をしていた。真昼時、体を休めよう、と接骨木けつこくの樹の下で横になったが、目を覚ますと辺りはもう薄暗くなり始めていた。羊たちはおとなしく周りに寝そべっていたが、群れを先導する牡羊おが見当たらなかつた。するとこの牡羊が哀れっぽくめええと啼なくのが聞こえたので、忠実な獣の声のする方へ向かつた。するとなんと、古城の崩れた穴蔵の丸天井からきらきらする光が漏れ、地下室に牡羊が立っており、その傍そばに古いターラー銀貨をぎっしり盛つた大鍋おなべがあるではないか。羊飼いはすぐさま穴蔵へ下り、鷲掴わしづかみにして隠カケしカケという隠カケしカケ、それから被かぶつていた帽子に銀貨を詰め込んだ。それから牡羊を優しくこづいて「おめえつてやつはまあ、とんでもねえど畜生だあよう」と声を掛けた。——こう口に出した途端、穴蔵の上の開口部に髪ひげも真まつ白しろで、血のように赤い縞の入った白い長上衣を着込んだ老人が立ちはだかり、白銀しろがねの角笛を口に当てると、なんとも激しい音色で吹き鳴らしたので、木木は突風に遭あつたようにどうどうとざわめき、穴蔵は轟とん轟とんと鳴りどよもし、大地は震動した。この恐ろしい響きに羊飼いは目も眩くらみ耳も聞こえなくなり、取った金

を悉く投げ出し、途方もない怯懦恐怖に包まれ、失神して老人の足元にくずおれた。そうして長いこと倒れているが、意識を取り戻すと真つ昼間で、地面の上にいた。持ち物は傍に散らばっており、羊の群れも同じく傍に寝そべっていた。失くなった物は何もなかった。ただし例の金、例の穴蔵、例の鍋は影も形も見えず、穴蔵への崩れ落ちた入口さえ消え失せていた。

二九〇 ヴェッター城

ヴァルデック領にはあの古きヴェッター城も聳えている。この城のかなりの部分は残っていて、まだ人の住める状態である。ヴェッターブルクはかつてヴァルデック伯フィリップ二世の居城であり、伯爵はマインツ大司教アルブレヒト——鉄の手の騎士ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンと私闘状態にあった——と同盟を結んでいた。そこでゲッツは、ヴァルデック伯を引つ攫おう、と思いつき、手の者を従えて幾つもの地方を抜けヴェッターブルクに近づき、城からダールハイム〔修道院〕に通じる道の傍に潜んだ。ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンがそうやって待ち伏せしていると、たまたま羊飼いが一人羊群の番をしているのが目に入った。するとなんと——突然森の中から五頭の狼が跳び出して、群れに襲い掛かったのである。この光景を見聞きして——ゲッツ自身の語るところによれば——彼の荒くれたドイツ騎士魂は歓喜し、彼は狼どもの幸運、それから自らの幸運をも祈って「首尾良くやれい、仲間たち。首尾良くやれい、いずれにおいてもな」と狼に向かって叫んだ。こうした吉兆が示された時、ヴァルデック伯フィリップがヴェッターブルクから下りて来たので、ゲッツはパーダーボルンの地で伯爵を襲撃、捕虜にし、それからまずケルン大司教領、次いで伯爵自身の所領、それからヘッセン方伯爵領、そこから

更にヘルスフェルト大司教領、そこからフルダ、ヘンネベルク伯爵領、更にザクセンの邦とヴェルツブルク大司教領とバンベルクを通り、ニュルンベルク辺境伯爵領とバイエルン領プファルツに入り、とうとうヴァルデック伯の拉致連行先である場所、すなわち、神に愛でられしシュヴァーベンシュヴァーベンの邦にある自城に辿り着いた。さてここに落ち着いたゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンは、遠征に起因する多額の経費および捕虜に掛かった飲食宿泊代を計算。「伯爵殿がこれを償還なされば、再び解き放つて進ぜよう。さよう、旅費はただ百グルデンでようござる、して、これに加えて更に八千グルデン頂戴いたせば」——ヴァルデック伯フィリップ二世を自由の身にする、と言ったもの。伯爵の忠実な同盟者マインツ大司教アルブレヒトは伯爵釈放のため鏹一文出さうとしなかったし、さりとしてゲッツ攻略の軍を催すことなど思いも寄らなかつた。そこで虜囚は己が白髪を一房切り取り、子息——同名フィリップ——に手紙を書き、身代金を届けてくれるよう、切切と訴えた。子息は金を支払い、老父を迎え取りにコーブルク——ゲッツはそこまで捕虜を護送させた——まで出向いて、父君を涙ながらに抱き締めた。伯爵は二十週間に及ぶ拘留後も捕らわれた時と同じ上衣を着ていたが、有為転変は世の習い、幸運は移ろうもの、雨降つて地固まり、悲しみあれば飲び来る、等等といった金言で子息を慰めた。

ヴェッターブルクを訪れた旅人はここからヴェストファーレンの赤き大地の美しい一部を展望することができ。この地ではかつて聖なる結社が峻烈な判決を下し、執行した。特に知られているのは往昔の結社法廷の町フォルクマールゼンである。ここの郊外の「葦原に皇帝秘密裁判の畏敬すべき王立法廷」が設置され「真正なる秘密陪席判事らと聖なる秘密檢察官八人」が裁きの座に着いたものである。こうしたなんともぞつとする話は騎士道小説『クルト・フォン・デア・ヴェッターブルクあるいは目に見えぬ上長たち』で読むことができる。もつとも、何もかも本当というわけではない。なにしろフォン・デア・ヴェッターブルクと名乗った、もしくは書かれた騎士

は存在したことがないのだから。この城の古い穴蔵には結社裁判官を主題にした情緒たっぷりな言い伝えなどなくて、^{フランシス}火酒の樽の嗜好をした極めて散文的なお化けが出る、という話があるだけ。ただしこやつはごく性悪で危険な妖怪である。

二九一 シェルピルモント

華やかな温泉地ピルモントを去ること一時間のところにシェレン山が聳えている。この山の頂きにはかつて大層古い城——その起源はドイツ先史時代のごく初期に遡る——があった。伝説によれば、ここにはケルスキ族のヘルマンの妻トウスネルデが住んでいた、とのこと。トウスネルデは人語をしゃべれる小鳥を一羽飼っていた。この小鳥は国中を飛び回って来ては、彼女に新情報を伝えた。さて、ある日のこと、いつものように飛んで戻って来た小鳥は、こう叫び続けた。

「ヘッセン谷ピツカピカ！ヘッセン谷ピツカピカ！」

こうして、ローマ軍がヘッセン谷を行軍中であることを告げたのだ。ローマ兵の甲冑と武器が谷を燦めかせていたので。そこでトウスネルデは、夫の指揮する軍勢が接近中の敵軍を迎え撃つ準備を調えられるよう、すぐさまヘルマンの許に何人も急使を送った。

後世シェレン山はペレモント伯爵家の所有となった。この山が領内に位置した伯爵一族の名は（ラテン語で）

ペトリ・モーンズ、フランス語でピエール・モンに由来、これが結局ピルモントになったそうだ。フリードリヒ赤髭帝がケルン大司教フィリップにヴェストファーレンのこの地方、もしくは全ヴェストファーレンを封土として与え、大司教はシェレン山に新たに堅固な要塞を築き、使徒ペトルスを讃えてこの城にペトリ・モーンズなる名を付けたからだ、と。これを信じる信じないはどなたもご自由。ただし、ハレ、エアフルトその他の近郊にペーター山はたくさんあるが、そのいずれからもピルモントという名の者が出た例しは知らぬ。シエルピルモントの廃墟は御多分に洩れず宝物探しどもの掘り返すところとなったが、特筆すべき物は何も見つかつてはいない。

二九二 九柱戯の黄金の柱

アエルツェン近郊、ピルモントとハーメルンの間に、リユーニングス山がある。山頂の美しい緑なす芝生の上では、夜になると白装束の妖精たちが黄金の球と黄金の柱で九柱戯遊びをした。ゴロゴロリンリン鳴る音にしばしば小鳥たちは夢を覚まされ、森の獣たちはやって来て、興味津津、繁みの中から頭を突き出して覗いた。もっとも人間はあえて近づこうとしなかった。なにしろそんなことをしようものなら、なんとも知れぬ恐怖に取り憑かれたからである。それでもとうとうある向こう見ずな織物職人が勇気を奮い起こして、黄金の柱は木でできた機織り台なんかより値打ちがあらあ、と考え、妖精たち相手に運を試してみようとした。ある暖かい夏の宵、職人はリユーニングスベルクに登り、森に踏み込み、例の妖精の芝生に近づいた。すると小さな白装束の山の精たちが九柱戯に熱中していた。柱立て係の男の子連なんぞは不要。というのも球はひとりで戻って来たし、柱もひとりでにむっくり起き上がったので。球は矢のように早く唸りを挙げて転がり、柱はチリンカランと倒れ、獣たちはちら

ちら覗き見し、小鳥たちは枝の間でぶらんこ遊び。ひゅつと弾かれた柱が一本、びくびくわなわな繁みの中に伏せていた織物職人の方へ勢いよく転がって来た。若者はこれをばつと手に取るやいなや、もう無我夢中、体を起こして逃げ出した。柱が一本失くなるのを見た精たちはすぐさま泥棒の跡を追い掛ける。こちらはいち早く山裾の野原を越えて一目散。と、そこにはフンメ川が流れていて、一本の丸太が岸から岸へと橋代わりに横たわっていた。織物職人がぼろぼろの木幹に足を乗せた時、精たちももうすぐ後ろに迫っているのに気付いたので、泡を喰って踏み誤り、ざんぶと小川に転落した。するとわやわやこう叫ぶ声。「きさまあ運の好いやつだ。おれたちは水の中じゃ何もできん。地面の上で追いついてたら、きさまの頸を捻ってやったのに」。——そうしてふつふつと消え去った。若者はと申せば柱をしっかりと抱え込み、無事に家へ帰り着き、柱の黄金で家を買ひ、可愛いあの娘に結婚を申込み、幸せになった。水車小屋導水路の畔にいまだにその家があり、家の前には大きな科の木が聳えている。リューニングスベルクにはこれまたいまだに山の精たちの九柱戯場が残っている。ただし妖精たちが九柱戯遊びをすることはもうない。なにしろ九本目の柱が盗まれてしまったので。

二九三 五本の柏の下に出る物の怪

アエルツェン近郊にゼルクセンなる村がある。村の傍に昔五本の柏の老樹が聳えていた。今なお残っているのは三本だけ。しかし住民は相変わらず「五本の柏の下」と呼ぶ。そこには夜毎不気味な物の怪が徘徊・跳梁する。鎖をじゃらじゃら引きずる、皿のように大きく燃える目の巨大数頭、三本脚の野兎が何匹も、近くの死人山からふわふわやって来た絞首台野郎ども、真っ黒けな大鴉が何羽か、梟のようにでっかい蝙蝠の数、こういっ

た輩やうなが入り乱れて走ったり、這はったり、翔とんだり。おぞましい容姿の素つ裸の娘が踊るのを見掛けることもある。ある時二人の若者が仕事先のグロ―センベルケルからゼルクセンへ帰つて来たところ、五本の柏アイヒェの下で妙ちきりんな化け物に出くわした。そやつには頭も無ければ手足も無く、彼らの方へふらふらやつて来て、ううつと呻うめき声を発したのだ。若者の一人は思い切つて立ち向かおうとしたが、幸いもう片方が引き戻した。――夜遅く患者の往診を済ませたアエルツェンのさる老外科医が五本の柏アイヒェの傍を通り掛かると、道端に一羽の白い家兎がいた。そこで外科医は捉つかまえて外科道具囊ふくろに入れ、担いで歩き続けた。ところが進むに連れて囊はどんどん重くなり、最後にはもう担げなくなつたので、下ろして開いた。すると鬼胎きたいのような、途方もなく厭いとわしい代物が中からにゆうつと出現、ふうつと唾いみ掛かつたので、外科医は走れるだけ走つて逃げ、囊は中の一切合切ともども置いてきぼりにした。――また別のある時、これも夜更けのこと、一人のユダヤ人がやつて来ると、鷺鳥がらうが一羽いた。「おやまあ」とユダヤ人は考えた。「こんな見事な鷺鳥を夜中ここに放りっぱなししておく手はない。わしが貰もつて行つて、太らせてやろう」。けれども鷺鳥はすぐには捉つかまろうとせず、ギヤアギヤアシユウシユウ啼なき叫び、ばさばさ激しく羽ばたきした。もつとも結局はユダヤ人が勝ちを占め、担いでいた背負かひ籠かごに押し込んだ。しかし歩き出してみても、「はてさて、どうして鷺鳥がこんなに重いのか。なんとかうちへ持つて帰ればなあ」と思案したものの。――が、鷺鳥を家まで持ち帰ることはなかつた。どうにも堪たまらず立ち止まつたところ、背負かひ籠かごの中からこう叫ぶ声こゑがしたのだ。「とつととあたしを五本の柏アイヒェの下まで担いで戻んな、呪のろわれたユダヤ人よう。――やれやれ、哀れな老ユダヤ人はなんともひどく震え戦おのいたが、なんともしようがなく、言われた通りにせざるを得なかつた。で、重荷をまた担いで引き返したが、ありがたや、前には一歩一歩重くなつたのと反対に、今度は一歩一歩軽くなつた。ユダヤ人が柏アイヒェのところまで辿り着くと、籠かごから這はい出して来たのは、歳を取つたも取つたも

大変な婆様で、紡錘のように瘦せつぽち、頭は髑髏しんがくみたよう、目は赤く、肌は羊皮紙やぎひながら。そして「どうも
ありがとさん、あたしを担いでくれてさ」と言うなり、がつんと顔に一発喰くらわせたので、こちらはふらふらと
ぶつ倒れた。すぐすぐ立ち去る背後からおちやらかしてこんな戯れ唄うたを歌う声が聞こえた。

「鶯鳥を盗とつたで泥棒だけんど、

返してくれただええ人さ」

お蔭かげで死にそうな思いをした哀れなユダヤ人は、以後昼だろうと夜だろうと自分のものではない鶯鳥を捉まえて
うちへ持って帰ろうなどという気は二度と起こさなくなつたし、五本の柏アイヒェの下に行くのも真つ平まじらご免とあいなつ
た。

二九四 ハーメルンの子どもたち

一二八四年のこと、色とりどりの服を着た、風変わりな風采の男がハーメルン(23)へやって来た。男は鼠捕り(24)で、
ある金額を支払えば市全体から大鼠小鼠といった害獣を駆除する、と約束した。そこで市参事会と市民一同が料金
支払いを男に保証すると、件の男は小笛を取り出し、今日少なからぬ町で牧人や夜警がやるように——それと
いうのも牧笛ケイホルンだと都会風ではないからだが——これを吹き鳴らしながら小路という小路を歩き回つた。すると、
なんと、ありとあらゆる家から大鼠小鼠が飛び出し、群れを成して男の後ろに随まき従つた。その昔マインツ大司

教ハットーを追い掛けたように。(25) こうして小路を悉く練り歩いた鼠捕りの笛吹き男は、灰色のお伴とともにヴェーザー門を出て川に向かい、服をたくし上げると、流れに足を踏み入れた。大鼠小鼠はやみくもに後に従い、紅海でのエジプト王の軍勢のごとく溺れ死んだ。ところで当時のハーメルンの市民たちはおつそろしく利巧だった。今日現在となるとハーメルンばかりではない、どこにだってそういうのがどっさりいるが——。さてこの連中、報酬の尺度を何に置いたかと申せば、人が持つている伎倆や知識ではなくて、事をやつのけるのに要した労役にだった。そこでこう語り合つたしだい。「あの鼠捕りめが決めおつた金額はこんなお手軽仕事には犯罪的じゃ。そりゃああいつが家毎に罌を仕掛け、毒を撒いたとあらば、話は分かる。——だがなあ。それにのう、あいつが鼠どもをヴェーザー川に誘い込んだのはあんまりではないか。魚が餌にしちまうわい。お他人様はヴェーザー川の魚を喰いたきや喰うがよろしい。わしらはまっぴらご免蒙る。それから、やつこさんが一件を片つけた遣り口はどうだ。用いたのは悪魔の術ぞ。もしかしたらねっからまやかしに過ぎんかも知れん。やつが金を貰つておさらばした途端、鼠どもがわしらのところへ舞い戻るって寸法のなあ。半金だけ払って遣わそうではないか。それでお氣に召さぬとあらば、やつを魔法使いとして塔の牢屋に放り込んで、鼠どもが戻つて来るか来ないか待つといたそう」——周到かつ賢明、加えてこの上もなく儉約家揃いのハーメルンの市民並びに市参事殿たちはまずこのように談合、次いでその内容を逐一鼠捕りに並べ立て、半金を差し出し、塔云云で脅しつけた。技術者はいえはその金を受け取り、むっとして退去した。さてそれからこんなことが起こつたのだ。聖なる殉教者ヨハネとパウロの日、すなわち干し草月の二十六日に人人が教会に詣でていると、あの鼠捕りの男がハーメルンの通りに再び姿を現した。ただし今回の身なりは狩人のよう、顔つきは恐ろしく、赤い奇妙な鍔付き帽を被り、笛を吹き鳴らしながら小路という小路を歩き回つた。すると家家から出て来たのは鼠ではなく——なにしろ驅除されてそれっきり

だったから——子どもたち、四歳以上の男の子、女の子で、鼠捕りの跡をとつとこ追い掛ける。中には市長——技術者を一番こつびどく怒鳴りつけ脅したのはこの人——のかなり大きな娘もいた。子どもたちは鼠捕りに大喜びで随って行き、互いに手を繋いできゃあきゃあおもしろがった。目が見えない子が一人、口の利けない子が一人いたが、この子たちでさえ行列の尻尾に付き、啞の子が盲目の子の案内役。その後から赤児を外套にくるんで連れてくる子守り娘が続いたが、これは一体先行きどうなるのか見届けたい、と思つてのこと。狐師を先頭に立てた子どもの群れはわいわいがやがやオスター門(「東門」)へ向かう狭い小路を練り歩いて、そこから市の外へ出、コッペル山に向かった。山が口を開けると笛吹きが先に入り、子どもたちがあとに続いた。目の見えない男の子を連れていた口の利けない少年だけが二人ながら外に取り残された。盲目の子がそんなに速く歩けないでいると、彼らの目の前で突然山がまた口を閉じたので。子守り娘も回れ右して市へ引き返し、子どもたちがコッペル山に連れ込まれちゃったあ、と叫んだ。大恐慌が起こった。教会は閉ざされ、怯え上がった両親らが急いで山に馳せ向かったが、僅かに徴として見つけたのは狭い割れ目がたった一箇所。百三十人の子どもたちがいなくなり、一人も帰って来なかった。町中胸も張り裂けんばかりの懊惱悲嘆の声で一杯になった。改めて痛ましくも明らかにしたのには、ろくでもない貪欲さと莫迦らしいけち臭さこそあらゆる不祥事の原因だということ。ハーメルンの人人は行方不明となった子どもたちを長いこと嘆き悲しみ、山が子どもたちを呑み込んだ場所に石の十字架を二基——男の子たちのために一つ、女の子たちのために一つ——建立した。最後に一行が練り歩いた通りでは二度と再び太鼓の響きや音曲が聞かれることはなかった。ここでは祝婚の行列でさえ鳴りを潜めた。そこで今日に至るまでもこの小路は「太鼓通り」と呼ばれている。ここで太鼓を叩くことは許されないから。「光が漏れないから森」(の類の自己撞着だが)。

この災厄の日はハーメルンの年代記に禍禍まがまがしいものとして書き留められた。市庁舎には石の碑文があつて、その思い出をかくのごとく永久とこしえに銘記した。

キリストご生誕後一二八四年

ハーメルンにおいて、ここに生を受けし

子ら百余り三十人、ある笛吹きに連れ去られ、

ケツペンの山下へと消え失せたり。⁽³¹⁾

〔のちに市庁舎の〕新しい門扉の傍らには記事がラテン語で石に刻まれた。⁽³²⁾一五七二年当時の市長はこの奇譚きたんを教会の窓に彩色画法で絵物語として再現させたが、そうしたものがなくても話は口から口へと伝えられ、消滅することなく存続した。

更にこのような言い伝えがある。ハーメルンの子どもたちは地面の下を通過してジーベンビュルゲン(33)に連れて行かれ、そこで再び地表に出、大人になつてからは同地におけるザクセンドイツ系民族の起源になつた、というのである。さて、残酷な鼠捕りにして悪魔の笛吹きちなの姿はまたと見られなかつた。しかし神聖ローマ帝国の大鼠小鼠捕りの男たちはその後いずれも皆彼に因ちなんで狩人の身なりをするようになり、かつて存在、あるいは現在も存在する宮廷使丁カンマーボート、宮廷飛脚カンマーポーター⁽³⁴⁾、あるいはその他の宮廷カンマーなる言葉の付く称号のごとく宮廷獵師カンマイネーガーと自称した。⁽³⁵⁾

二九五 聖(ザンクト) ウイトウスの贈り物

ヴェーザー河畔なるヘクスター近郊(35)のクルヴァイ修道院には美しい伝説が数多ある。この修道院はファイト聖者に奉獻されたもので、貧しくはあるが敬虔(けいけん)な修道士たちを擁していた。彼らは年に一度だけ饗宴を催した。これは聖(ザンクト) ウイトウスの祝日に、この守護聖人を崇敬して行われたのだが、饗宴といってもささやかで儉しいもの。なにせ修道院の収入は僅かだったから。ある年のこと、聖(ザンクト) ウイトウスの祝日が近づいて来たが、残念ながら修道院には祝宴に入用な魚とか猟鳥獣肉とか葡萄酒などの品品がほとんどなかった。野菜だけは足りていた。坊様がたはどうやったら必需品なしに祝祭を挙げられるか頭を捻(ひね)ったが、もとよりどうしようもないこと。ところがなんと、修道院の井戸でパチャパチャ音がしたと思つたら、中で大きな鯉(こい)が二匹泳いでおり、修道院の中庭には二頭の素晴らしい牡角鹿(ヒルシユ)が出現。鹿たちは肥満期直前でたつぷり脂が乗っていた。いやもう嬉しいのなんのつて、修道院の厨房担当修道士は雀踊り(こおどり)せんばかり。そこへ顔を輝かせた酒蔵主任の修道士が大きな壺(つば)を二つ提げてやって来て、「修道院附属」教会の祭壇裏手から迸(はな)り出ている泉でそれに水を満たしたところ、泉の水が葡萄酒(フイシユ)に変わった、と報告したものだ。こうしたいとも崇高な奇蹟(きせき)の注進を受けた修道院長は言った。「兄弟たちよ、神と我らへの守護聖人(ヒルシユ)がお授けくださったかような賜物は、忝(かたじけ)なく謹(ちよ)んで頂戴(ちやうたい)つかまつりましょうぞ。なれども我らには牡角鹿(ヒルシユ)一頭、鯉一匹で充分、また銘銘二カンネ以上の葡萄酒(フイシユ)はたしなまぬようにな」。——そこで修道士たちは異議を唱えることなく牡角鹿(ヒルシユ)の片方を放し、魚も一匹はヴェーザー川に逃がしてやった。それでも容器(ジョウツキ)にたった一杯ではなく少なくとも二杯の葡萄酒(フイシユ)を許してくれた寛大な院長を心申祝福(ザンクト) 聖(ザンクト) ウイトウスを讃(たた)える饗宴(あひあい)を和氣譚議(あいあい)と催した。以来、毎年の祝祭日に聖者の喜捨が繰り返され、受ける側も最初の年と同様に処置した。けれどもとうとう善

良で敬虔な院長が亡くなり、別の、これは豪儀で有名なのが院長に選出された。この人が神としてお仕えするのは胃袋で、崇める聖者は酒の神様だった。聖ウイトウスの祝日がまた巡って来ると、修道院長は牡角鹿を二頭とも、鯉を二匹とも殺させ、葡萄酒は潤沢に供給、聖ウイトウスに敬意を表してたたかに酔っ払った。次の年、祝祭日は来たが、牡角鹿も魚も姿を見せず、祭壇裏の泉から湧き出すのは昔に変わらぬまことに澄み切った清水とあいなり、コルヴァイ修道院の厨房担当修道士はがりがりの瘦せつぼちと改名した(39)。

二九六 天使と百合

コルヴァイ修道院附属教会にはかつて毎年——疑いもなく聖ファイトの祝日であろう——二人、あるいはそれ以上の天使が現れて、合唱隊席の少年たちが栄光の讃歌を歌うたび、ファイト聖者の墓の傍らからこよなく素晴らしい声で応誦を繰り返した。ところがある時副修道院長が天使など信じず、またしても天界の歌声が聞こえると、聖ウイトウスの碑にずかずか歩み寄り、尊大な口調で「おまえたち、ここで何を歌っておる。おまえたちは何者だ。いずれより参った」と詰つたもの。——天使たちは唄でこう応じた。「来たれ、我ら再び主の御許に赴かん。主を求める者、主を讃えん」と。——それ以来天使の歌声が修道院附属教会に響き渡すことは絶えて無くなった。三百年このかたずっと続いていたのに。そして修道院は凋落し、遍く知られていたその名声の星は消えた。

リユーベック大聖堂で死を予告する薔薇と僧ラブンドウスの一身に起こったことと全く同じ役割をコルヴァイ修道院では百合が果たした。教会の内陣に青銅の輪が一つ吊されており、輪の中に百合が一輪あった。修道士のだれ

かに死が迫ると、いつもこの百合が不思議なことに下に降りて来て、死ぬ定めめの修道士の椅子に三日前から横たわるのだった。するとその修道士は肅然かつひっそりと告別の心準備をしたのである。この奇蹟は数百年顕現したが、ある時一人の若い修道士が他の者より早く内陣に来て、自分の席に百合があるのを見つけ、震え上がって考えた。「わたしはこんなに若いのにもう死ななければならぬのか。順番に従ってまず老年の人たちがそうなる方が理の当然ではあるまいか。若い者らが年を取るだけの時間が与えられるように」と。——そこで百合は若い修道士の手から最年長の僧侶の椅子に置かれた。やがてやって来たこの坊様は百合を目にして死ぬほど仰天——なにせ高齢に達すると死ぬのはまことに好ましくない。ごく年老いた者にしてみれば人生はいかにも麗しく、ほんの片時にしか思えないのだから——し、病気になった。けれども死にはしなかった。三日後、死の予告である百合を拒もうとした例の若い修道士は急死、冷たく硬くなつて棺に納まっていた。

二九七 ヴィルベルクの乙女

三つの村ゴツケルハイム、⁽⁴¹⁾アメルンクセン、⁽⁴²⁾オットベルゲンがヘクスターの最寄りでアア川が貫流する三角形を作っている。ゴツケルハイムの正面にヴィルト山、⁽⁴³⁾あるいはヴィル山なる山がある。山頂には不気味な気配が漂っている。昔ここには巨人たちが棲み、近くのプルス山の巨人たちと数ツェントナーもの重さの石球をたくさん投げ合った。谷の真ん中に今日なお深い穴が一つ開いているが、これは投げ損なつたそういう石球が掘つたもの。ヴィルベルクの麓には乙女が一人さすらい歩いており、時時姿を現して、人間——ちゃんとした連中ならだが——に何かを授けてくれることがある。

ヴェーレン(註)の二人の若者、名をペーターとクニツピングというのが、鳥の巢探して森に入った。片方——これはペーター——は大変な怠け者で、木の下に横になつて寝入ってしまった。クニツピングは森で夢中になつて巢を探していた。ところがペーターの耳を引つ張るものがある。目を覚まして辺りを見たが、何も無い。怠け者のペーターが再び寝込むと、またしてもきゅつ。これが三度に及んだ。さしものペーターもこんな落ち着けない場所で眠り続けるわけには行かず、のんびり熟睡できるもつと静かなところを探そうと起き上がった。するとなんと、目の前を白衣の乙女が歩いていて、胡桃を割つては中の核を地面に投げ、殻を袋に入れており、やがて消えた。ペーターは胡桃の核を拾い集め、むしゃむしゃ食べて、自分で殻を割るという苦勞をせずに済んだのを嬉しがった。なにしろもうこれだけでも彼にとつては大仕事だったので。それからペーターはクニツピングを見つけ、どんなことがあつたか話し、彷徨う乙女が姿を消した場所を教えた。その後二人は幾つか目印を付けるともう二、三人仲間を連れて来て、そこを掘つた。そしてありがたいことに皆が隠しに詰め込めるだけたくさん金貨を発見した。彼らは翌日、もつと持ち帰ろう、とやつて来たが、何もかも消え失せていた。ペーターは全く辛せになつた。授かつた金貨で豪勢に眠れる家を建てたのである。

これはまた別の中年男だが、やはりヴェーレンの者で、アメルンクセンの水車小屋で穀物を挽いてもらおうと出掛けた。帰り道、ラウの池の畔でちよつと足を休めた。するとヴィルベルクの乙女が彼の前に現れて、こう言葉を掛けた。「お願い、手桶にお水を二杯、ヴィルベルクの洞穴まで運び上げてくださいな」と。そこで男が桶二杯の水を山の頂きまで持つて行つてやると、乙女いわく「明日オッテンベルゲンへいらつしやい。そしてあの村の羊飼いを捜して、帽子に飾つている花束を貰い、今と同じ時間にここに来るのです」。男は言われた通りにしたが、羊飼いはその花束をなかなか手放したがらなかった。これはどこかの綺麗な女の子がくれたものだったので。

——もつとも羊飼いは花束をどう使ったらいいものか分かりはせず、くれたのは他ならぬヴェルベルクの乙女で、それがどんな錠前でも門かどでも開けてしまふ不思議な花束だということを知らなかつたのだ。「なんとか貰い受け」た」男が花束を持って山頂の乙女のところに辿り着くと、これまで一度も目にしたことのない青銅の扉があつた。そして花束を扉の錠に押しつけると、扉はぱたんと開いた。中の洞窟どうくつにはひどく年取つた白髪しろがみの小人が坐つており、その髻むすは卓子テップルを貫いて伸びていた。周りには数数の宝物が山のようにあつた。黄金きんでできた王冠型燭台しょうだいが卓子テップルの上に吊り下がつていた。さあ、男は隠かくしに財宝を詰め込み始め、両手りょうてを使えるように花束を卓子テップルに置いた。すると乙女が「一番大事な物を忘れないで」と言つた。そこで男が黄金の燭台に手を掛けると、白髪の小人が片手を挙げ、男の横つ面をびしゃりと引つぱたいた。いやもう男はびっくり仰天、さつと逃げ出し、乙女が「一番大事な物を忘れないで」と繰り返して叫ぶのに耳を貸さず、花束を置き去りにした。逃げ出した男の背後で洞窟の門は轟然こうぜんと閉じた。山を下り、ゴツケルハイムを目の当たりにした男はお宝を数えようとした。——おやまあ、どの隠かくしにも入つていたのは紙切ればかり。紙切れにはそれぞれなんだか紋章と金額が記されていたが、男はそこに書かれてゐる字が読めなかつたものだから、紙をアア川に投げ込み、川は男の幸運を流し去つた。これは最初の紙幣紙幣だつただけどね。

二九八 池から出て来た馬

ダツセル近傍(47)の池にはテューリンゲンのシュネーコプフ山上の悪魔の環わやレーン山地の黒沼(48)に纏まつわると同様の伝説がある。つまり底無しで、悪魔の棲すま処かにして遊び場だ、というのである。ロイトホルスト(48)の農夫(48)ですこぶる強

欲なのはその池の畔ほとりに畑を一枚持つていた。土曜日どにこれを耕かしていたが、終業時間になつても埒らちが明あかなかつたので、犁すき返しを続けた。祈禱きとうの鐘かねが打たれても知らん顔で、九回厳いかに鳴り響ひびいている最中、他の者のように立ち止まつて帽子を取り敬虔けいけんに主フーケーウンザの祈りを唱なえるどころか、犁すきを牽ひく馬うまたちにこゝろ怒鳴りつけた。「はいよう、このど腐れ馬どともめえ。好よい加減で片が付くよう、悪魔あくまみてえに引ひつ張はらねえか」。――男おとこは息子こゝろも連れて来ていて、馬うまたちの傍わらわを歩あかせ、叩たたいたり、駈かり立てたりさせていたのだが、とうとう己おのれの手で狂くるつたように馬うまたちや息子こゝろに咎とがを振はるはい、どいつもこいつも地獄じごくに行いきやあがれ、と罵ののつた。辺へりはもう薄暗うすくくなつていた。すると、池いけの中なかから大きな漆黒しつこくの馬うまが静しず静かと姿を現あした。これを目めにした農夫のうとは、加勢かぜが手てに入る、と喜よろこんで、息子こゝろに向むかかつて「あの馬うまをとつ捉つかまえて来こい。それでな、ありとあらゆる悪魔あくまの名なにかけてあいつに犁すきを引ひつ張はらせるんだ。そうすりゃこの糞くそ忌いしい畑はたけを端はつこまで耕かせらあ」と叫こゝろんだ。責せめ立てられ、咎とがを喰くらつた哀あれな息子こゝろは泣なきわめいたが、結局けつ言いわれた通りとおりにし、黒馬くろばを輓ばん馬ばの先頭せんとうに繋ついだ。すると、おやまあ、なんともすごい、犁すきの刃やいばは畑はたけに切り通としの路みちみたいな溝みぞを掘ほり、農夫のうとはもう犁すきの柄えいにしがみついて、走はつて随まいで行いかねばならなかつた。さて、畑はたけの端はまで行いき着きいた農夫のうとはそこで向むかきを変かえようとしたが、馬うまはそうさせず、元氣一杯げんきいぱいぐいぐいずんずん、前まへへ前まへへと引ひつ張はり続つけ、とうとう畑はたけから出でて池いけの汀みぎわまで来こると、農夫のうとも犁すきも馬うまたちも全部ぜんぶ一いっ緒しょくたに池いけの中なかへ引ひきずり込こんだ。そして何なに一つ戻もつては来こなかつたのである。

同じこの悪魔あくまの池いけには黄金おうごんの鐘かねも沈しずんでいる。これはもともとポルテンハーゲン(10)の教会きやうかいの鐘楼かねとうにあつたもの。この鐘かねは大層おほ楽らくしげに鳴なり響ひびいたので、逆さからえる者ものは一人ひとりとしておらず、申まをさば魔法まほうに掛かけられたようにだれもが教会きやうかいにお詣まりした(遺憾いがんながらかような鐘かねはこの節ふしありはせぬ)。そこで怒おこり狂くるつた悪魔あくまが攫さらつて来て、この池いけに投げ込んだのである。かつてある男おとこが、もしかしたら鐘かねを引き揚げられるかも、と池いけに潜ひそつた。見たのは緑きよなす草原くさげん

に置かれた卓子^{テーブル}が一つ。卓子^{テーブル}の上には鐘が載っていた。ところが卓子^{テーブル}の下に黒犬の恰好^{かつこう}をした悪魔が寝そべっていて、焰^{ほのお}のような目で男をぎらぎら睨^{にら}みつけ、腕ほどの長さの焰の舌を男に向かつて突き出した。その傍らには緑色の人魚もおり、「まだ時期じゃない、まだ時期じゃない」と叫んだ。——そこで男は急いで水面に浮かび上がり、以来再び黄金の鐘を目にした者はいない。

この古いタッセル伯爵領にはコーエンハウゼン⁽⁵⁰⁾という村があるが、この村の教会の鐘楼に、その響きには雷雨を追い払う力がある、と民衆が固く信じ込んでいる鐘が下がっている。この鐘にはシラーの鐘の詩⁽⁵¹⁾でも読むことのできるかの名高い銘が記されている。いわく、

我は招く、生ける者を、

我は悼む、死せる者を、

我は祓^{はら}う、稲妻⁽⁵²⁾を。

二九九 巨人たち^{ヒューネン}

ヘクスター、コルヴァイ、ブラーケル⁽⁵³⁾周辺およびヴェストファーレンの諸地域ではヒューネン、ホイネン、あるいはリーゼンと呼ばれる巨人たち⁽⁵⁴⁾に関する言い伝えが多く語られている。いや、それどころか、こうした伝説は更に北方へと拡がり、リューネブルガー・ハイデ⁽⁵⁵⁾、マルシュ⁽⁵⁶⁾、沼沢地域へ延びている。巨人の墓^{ヒューネンクラウブ}、巨人の寝台^{ヒューネンベット}、巨人の石^{ヒューネンシュタイン}、巨人の穴蔵^{ヒューネンケラー}、巨人の城の数数^{ヒューネンツルム}がこの地方に散らばっており、民衆は、力持ちで雄大なる

体軀の逞しい種族がかつて蟠踞していた証拠だ、と見なしている。もつともこの他、妖怪変化、白衣の乙女、黒犬などが数知れず活躍したり、小人や家の精が単独で、あるいは群れをなして人間の前に現れる、固有かつ不思議な伝説もありはする。ごく僅かな例外だが、巨人族が登場も活躍もせず、昔かかる存在があつたとして、その強力ツウリキの痕跡を示し、また、彼らが棲み、遊び、闘い、球や槌ハンマーを人間が歩けば数時間も掛かる彼方から投げた場所を名指しているだけ、というものも。かつて巨人族の名はさまざまな集落に残っていたが、現在ブラーケルを見下ろす高みにヒンネン城ブルクがある。近隣の村のリーゼルとレーツェン（デイルブルク近郊）は巨人を示唆しているようだ。ゲッティンゲン地域のドランスフェルト近くにはフンネン山ないしヒューネン山（ベルク）が聳えている。山中で巨人を見た、と言う者がいる。アルテンハーゲンの村の上方にはやはり巨人の城がある。その最後の住人は城を打ち砕き、最大の石を墓の覆いとして自らの上に転がした。リュッポウ村近郊のザルツヴェーベルに向かう道筋には巨大な巨人の石がある。これはある異教の神の祭壇で、毎年降誕祭前夜、鶏鳴曉を告げると、不興のあまりごろりと引つ繰り返る。リンゲン下伯爵領（ニルンブーフ）のフレイレンの近くにも巨大な巨人の石が立っていて、そこには豊かな墳墓が幾つかある。リユーネブルク曠野のクネーゼン地区にはかの鶴嘴石（ビツケルシュタイン）があるが、これはクレーベス山（ベグ）から巨人族がここまで投げたもの。石には七つの十字架と一つの蹄鉄の形をした窪みが見られる。これらの十字架はある軍勢の指揮者が佩剣（はいけん）で刻み込んだもので、馬蹄痕はその乗馬が主人の勝利の徴として捺した、ということである。昔はこの鶴嘴石の傍らで周辺の村村の禁獵裁判が開かれた由。ジーヴェルンの在にはまだ盗掘されていない巨人の墓がある。ビュルツェンベツト（58）と呼ばれており、様式も大きさも特別である。巨人の墓を掘って、昔埋葬された者の安息を妨げるのはよろしくない。ランメルスロー（59）のある司教座聖堂参事がシュタインフェルト近傍の巨人の遺跡を掘り返したところ、その夜三人の男——内一人は隻眼だった——が現れて睨みつけ、異様な声音でい

とも古めかしい頭韻詩を詠唱した。いわく、

我らこの地にて

誉れの死を遂げぬ。

我ら祖国のために

闘いて斃れぬ。

我らの塵を掻き乱さば

幸いの星の輝くことなし。

ランメルスローの聖堂参事は二度と掘り返したりしなかった。

三〇〇 アーメルンゲン族

この地方の伝説では巨人たちとフン族の話が奇妙に溶け合っている。山や城に附いている名称の音韻が、果たしてカール大帝の時代より遙か以前この地域に棲んでいた原住民である巨人たちに帰せられるのか、それともドイツに侵攻してライン河にまで到達、『ニーベルンゲンの歌』の中では褒めそやされているエッツェル王配下のフン族を指すのか、区別するのはまことに難しい。エッツェルのフン族にアーメルンゲン族と呼ばれる三兄弟がおり、その名をヴァラミール、ヴィデイミール、テオデイミールと言った。彼らはいずれもフン族全軍きつての勇猛な英傑

だった。異様なのはヘクスター周辺地域にこのアーメルンゲン^{アーメルンゲン}一族なる名の響きをうつすらと、あるいは強く思い起こさせる村落が連なっていることである。すなわち、アーメルンクセン、アーメルングスホルン、アーメルゼン、アーメルスハウゼンなど。いや、ハーメルンやハーメルシエンブルクもあるいはこれを示唆していると申せようか。さて他方、ボルトルプ、ピルモントと三角形を作るヒッデンハウゼンなる村落名はフリースラント地方の巨人ヒッデを偲^{しの}ばせる。この巨人はカール大帝の時代ブラウンシュヴァイク地方⁽⁶²⁾に棲んでいて、カールからエルベ河畔の幾つかの所領を受封され、ヒッデスアッカー〔「ヒッデの耕作地」〕——今日ヒッツアッカー⁽⁶³⁾と表記——の町を建設した由。

三〇一 小人の揺り籠^{ツヴェルク}

ある巨人がヒッデスアッカーないしヒッツアッカーを建設した、という伝承が行われているにも関わらず、当のヒッツアッカーには巨人族に纏^{まと}わる話は全然と言つていいほど無い。けれども小人^{ツヴェルク}のこととなると逆に随分ある。小人たちはかつてこの地で極めて頻繁に見掛けられたし、これはどの時代にも亘^{わた}っていた。けれども、とどのつまりどこかへ移住してしまつたのである。だれかが土地を捨てる場合普通そうだが、小人族は自分たちが棲んでいたところ——山山、それからとりわけヒッツアッカーの城山——が厭^{いと}になつたからなので。彼らは長い間土地の者とうまく折り合つていた。そして、アーヘンのハインツヒエンのように人間から料理用具を借りたのではなく、反対に人間たちが善良な小人族からそうしたものを借りた。麦酒^{ビール}醸造鍋^{ヒットツ}さえも。小人らはその見返りに何一つ要求しなかつた。ただ、人間は貸してもらつた什器^{じゆぐ}を綺麗に洗つて受け取つた場所に戻し、醸造したての麦酒^{ビール}一壺^{ひとつぽ}と焼き

上がつたばかりの麵麩ペシ一塊を添えておけばよかった。ところがある時若造の旅職人が、返却するため置かれていたそうした鍋を見つけ、小人たちのための麵麩ペシを横取りして喰くい、麦酒ビールを飲んでしまったばかりでなく、醸造鍋の中に汚い物をし散らかした。そこで小人族はかんかんになり、麦酒ビールは自分たちの穴蔵で自身調達し、更にはまた自分たちの子どもを「人間の子どもと」取り替えたがるようになった。「ヒツツアツカーの」市長ヨーハン・シユルツも——母親が産褥さんじょくで赤児の彼に添い寝していた折——危あやうくそんな目に遭うところだった。夜中ふと目覚めた産婦は部屋の中に一群の小人たちが屯たづしているのに気付いた。彼らは取替え子を抱かいていて、産婦の子どもに襲い掛かかった。けれども産婦は寢床にドステンとドラント(66)を欠かさないようにしていたので、小人たちは彼女と子どもに害を加えることはできなかつた。もつとも一度は子どもに手を掛かけはしたのである。ドステンとドラントは共に効能ある香草で、ドステンは安樂草ヴァイエルゲムト(オリガヌム)とも言い、床に敷いておくと毒蛇を近づけない。ドラントの方はさまざまな香草——猫カッツの錢エミユンツ、小さな獅子口レイツェンマウ、羊の穀束シヤーフガルベ、苦薄荷アンドルン(マルビウム)など——のどれをも指すが、最後のが本物である。さて小さい人人が「ヒツツアツカーを」立ち去る時、一人の渡し守がエルベ河を渡してやつた。小人族はうようよ舩ふねに乗り込み、渡し守はけっこうな船賃を貰もらった。小人族はヒツツアツカー近傍の葡萄酒ぶどうに彼らの王子が使つかった黄金の揺り籠かごを置き去りにしたが、これは毎年一回ヨハネ祭ヨハニスアハト(66)の夜十二時から一時の間間に出現する。その刻限に葡萄酒に登る勇氣があつて、丁度その場場にいああわあせあれあば見られる。焰ほのおのような目をした黒犬が一頭揺り籠を守っている。揺り籠を持ち帰ろうとする者は口を利用してはいけない。また悪魔を恐れてはならない。かつて二人の大胆な若者があえてそうした冒険に挑んだところ、揺り籠はあつたが、犬は見えなかつた。が、不意に彼らは絞首台の下下にいるのに気付いた。そして絞首架の上には悪魔がうずくまり、絞首索をぶらぶらさせて若者たちの頸くびに引ひっかけようとした。そこで二人は仰天して大声を挙げた。途端に揺り籠も、絞首台も、悪魔

も消え失せた。

三〇二 許嫁の石

北部ドイツの広闊平坦な諸地域には目路の及ぶ限り始原岩層など見当たらないが、花崗岩の巖塊——しばしば非常に大きい——が散在しているのに行き当たることが多い。学者はこれを漂石と称する。小さな町リユツホ近郊、コルボルン・曠野にもこのような巖塊ないし石塊が一つある。一面赤い斑点に覆われ、大地より四脚尺高い。

ある相思相愛の貴族の男女が運命の配剤で別離の憂き目に遭った。騎士が出征しなければならなくなったからである。二人はこの石——その頃白樺の疎林に真ん中であつた——に腰掛け、永遠の信実を誓い合つた。辺りに丈の低い灌木があつて白い花を一杯につけていた。騎士は語らいの中で、恋人が貞節を守り続けてくれようか、と懸念を投げ掛けた。女はそんな問いに大層気を悪くして、もし裏切るようなことがあつたら、この巖が動いて、自分の墓石になるであろう、と誓言した。こうした激しい誓約を聴いて騎士は満足し、安心して愛しい許嫁に別れを告げた。

さりながらしばし時が経つと、愛しい許嫁は、よくあることだが、遠く離れた婚約者を忘れてしまい、新たに情人を拵え、連れ立つてコルボルン曠野を散策、白樺林に入り、知らず知らず例の巖塊のところをやつて来て、腰を下ろし、喋喋喃喃愛の語らいをした。すると突然石が地面からぐいと起き上がり、後ずさりした。男はそれによつて生じた穴の縁に跳びついたが、不実な女の方は口を開けた墓さながらの穴に転落、すぐさまその上に転がった石に押し潰されたので、血が斑斑と石に飛び散り、周りの白い花をも染めた。

また暫く時が経って騎士が帰還して来た。道はかの林を通っていたので、間もなく例の石のところに着いた。石が赤い斑点と筋に覆われており、以前は白かった花が赤くなっているのを目にした騎士は、なにやら忌まわしさを感じ、剣を抜くと石を一撃した。すると一筋の血が噴き出し、地下から悲鳴が響いた。騎士は花を一束摘むと、駒に跨って再び戦いに赴き、そのまま故郷に戻らなかつた。以前白かった花はその後ずつと赤く咲くようになった。これがすなわちエリカである。以来石は許嫁の石、エリカは許嫁の信実と呼ばれている。そこで白い花を着けたエリカを見ることはほとんど無い。

三〇三 泣き女
ヴェークラト

リユーネブルグ・ハイデ
リユーネブルク曠野には嵐の夜ともなると嘆き女——目が落ち窪み、死人のように蒼褪めた巨大な妖怪——が屍衣を靡かせて徘徊し、夜もすがら身の毛もよだつ哀泣の声を挙げて叫び立てる。この妖怪はだれかが間もなく死ぬ定めの上へ長い骨の腕を差し伸ばす。それから一箇月が過ぎると死者が出るのである。テューリンゲンでもこういう夜の妖精の言い伝えがあつて、そこでは泣き女という。ヴァイマル、エアフルトおよびハールツ山地一帯に及ぶ。出現する時期同様この妖怪の起源は闇に閉ざされている。定まった伝承はごく僅かである。

三〇四 塩の牝猪
メスヘのしし

八百年前リユーネブルク周辺がまだ森林と沼沢地ばかりだった頃のことである。獵師らが一頭の牝猪の跡を追つ

たところ、猪は心行くまで泥濘でいねいの中を転げ回り、それから乾燥した場所に横たわって寝込んだ。太陽が燦燦さんさんと照りつけると、猪の黒褐色の剛毛が美しい白になった。不思議に思った猟師らが牝猪を殺すと、見事に飽和した塩水が剛毛で結晶して良質の純粋塩となっているのが分かった。これがその名も高い埋蔵量豊富なリユーネブルク岩塩坑発見の端緒である。この猪で作った燻製腿肉レンケンの片脚分は食べてしまわず、ラテン語の銘文を記し、硝子ガラスの箱に納め、永遠の記念としてリユーネブルク市のいとも聡明なる参事会の厨房ちゆうぼうに安置された。塩にまみれた剛毛が附いたままの皮も保存された。岩塩坑はズルツェと呼ばれた。リユーネブルクにはこの他に有名な山とイルメナウ川に架かる立派な橋があるので、この三つの名物を讃えてラテン語の韻文が詠よまれた。これはイエナの七不思議を歌った詩句と同様、山モントス、泉フォレンス、橋ポンスで始まる。岩塩坑に対する悪事一般防止のため、時を移さず塔が一つ建設され、白塔と呼ばれたが、この白色には塩の猪のように塩の結晶は含まれていなかった。この塔には大なり小なり悪事を犯した岩塩坑夫が閉じ込められて一本の大きな重い鎖に繋がれた。悪魔もこの塔に呪封され、かのアーヘンのポネレン塔ポネレンでのように、中で騒がしく動き回った。悪魔は夜每一口分塔を嚙かり取った。これはどうやら成功だったらしい。なぜなら、白塔が崩壊した、との記録が既に百年以上前にあるからで。残ったのは例の大きな鎖だけとか。

三〇五 剥むきだしの鏡

リユーネブルクの北方にバルデヴィック(23)の町がある。この町はかつてまことに壮大、繁華、富裕かつ強力だった。塩の猪いのししがまだリユーネブルク岩塩坑ズルツェ発見の端緒とならず、現在数多くの住民を擁しているこの都市が建設もされていかなかった時代のこと。一一八九年、バルデヴィックの町は主君、すなわちブラウンシュヴァイクのハイン

リヒ獅子公ライオンヴェーに叛逆はんぎやくし、公の入市をやみくもに拒んだ。獅子ライオンに冗談じゆたんが分かるうはずはない。少なくとも謀叛むはんに理解を示しはしない。そこでハインリヒは市に軍を進め、攻撃準備に取り掛かった。しかし市民は自らの勇気たのを恃み、市壁から剥きだしの鏡を吊り下ろし、公にこれを見せつけて罵倒嘲弄たした。この鏡は別にピカピカに磨かれていたわけではない。そこで公は激怒し、バルデヴィック市が永久に余を忘れないよう、市民どもに鏡を磨かせてやろう、と誓い、いかにも獍猛どうろうな獅子ライオンらしい遣り口でこの言葉を守ったのである。三日間攻めに攻めて市を占領すると、脱出できなかつた者たちを残らず殺し、繁栄していたこの古い町を悉く瓦礫がれきの山に変えてしまった。嘲りへの報復は容易たやすかつたわけ。逃亡した市民たちはやっと一年後バルデヴィックから遠く離れた場所に新しい町を復興させることができた。これすなわちリューネブルクの起源である。さらに長い時が経過するうち漸く徐徐ようやに破壊されたバルデヴィックの跡地に住民が戻った。

三〇六 ブレーメンのローラント

ブレーメン(註)の広広とした中央広場マルクトプラッツには極めて古いローラント柱ゾイレ(註)が立っている。これこそこの都市の自由の徴である。この彫像が立っている限り、この都市の自由が廃絶することはないのだぞうだ。自然現象によりローラント像が倒壊する事態に備えて、市庁地下にもう一つ代わりの像が匿かくされているが、二十四時間以内に立てないと、ブレーメンの自由は存亡の危機に瀕する、との言い伝えがある。ローラント像には以下の碑銘が記されている。

我のここに汝なほらに示す自由は

まことカールが諸侯をまじえずして

この都市に与えしものなり。

我は勸む、汝らこれを神に感謝せんことを。⁽⁷⁾

ローラント像の足許^{むしと}にはある象徴として一人の不具者の形が見られるが、これは次のような伝説と結び付いている。昔レスモン家のある女伯⁽⁷⁸⁾——豊かな所領に恵まれていた——が〔ブレイメン市の近くに〕広広とした素晴らしい牧草地を持っていた。こうした牧草地が不足していたブレイメン市参事会は女伯に参事会の代表たちを送り、その一部を売るか貸すかして戴^{いた}きたいと申し込んだ。さて女伯が参事諸氏と野外で言葉を交わしていると、ごくごく足の悪い不具者がそこへ這^はいずつて来て、富裕な女伯に施しを乞うた。施しを与えた女伯は微笑みながら参事諸氏にこう言った。「わたくし、幸あるブレイメンの町に所有の牧草地の一部を贈り物にいたしましょう。ここな^{あしな}参事者が一日で這つてぐるりを廻れるだけな」。女伯としてはあまりに多く提供することになるとは考えなかつたし、参事会の方もそう広く貰^{もら}えるとは思わなかつた。憐れな不具者の這い方はまことに痛痛しく見えたので。——ところが、たつぷり謝礼を出す、と約束されると、こちらは元氣一杯、だれもがびつくり仰天するほどの速さで這い始めた。なるほど参事ではあつたが、筋骨隆隆で力が強かつたので。こうしてまことに大きな牧草地を這い回つて市に提供、これは今日なおブレイメンが所有している。市参事会は女伯に極めて懇^{いんげん}切に礼を述べ、懇切この上なく生涯参事者の面倒を見、かつ永遠にその恩を忘れぬため市の自由の象徴であるローラントの巨像の足許にその姿を留めたしだい。

三〇七 神の戦

一三四年のこと、幸あるブレーメンの町に由由しい災厄が降り掛かった。市内では黒死病(ペスト)が荒れ狂い、市壁の外には敵のオルデンブルク伯マルティン(80)が陣を張り、厳しく包圍して攻め寄せた。とどのつまり市内の疫病による困窮はその極に達し、市民軍はもはや市壁を防禦(ぼうぎょ)し続けることも、市門を封鎖し続けることもできず、ぐつたりとなげやりになり、「どのみち我らは死なねばならぬ——どうとでもなるがよいわ」と語り合った。——そこで「攻圍軍の」隊長連は司令官の前に進み出て、こう言った。「町は開けっ放しで、無防備状態にあいなり申した。いざ突入して、戦の慣わしと征服者の権利に従い、分捕りをいたそうではござりませぬか。——するとオルデンブルク伯マルティンが毅然としていわく「決してさようなことをしてはならぬ。至高の王たる神がブレーメンの町と戦われ、町は既に塗炭の苦しみに陥っておる。されば、我らが更にこの町を損なうのは穩当ではない。いざ、我らは情けある征服者として入城いたそうぞ。我らは今こそこの町の敵ではあるが、行く行くはまた友となろうやも知れぬからだ」。これは実行され、伯爵はブレーメンに入り、指揮下の軍勢の一兵たりとも住民や町の財産に手を出すことは許されなかった。

三〇八 七つの足跡

ハノーファー地方にあるペンテ村近くの野原に七つの石が一塊に立っている。民衆はこれを七つの足跡、あるいは七つの穴ばこと呼んでいる。ある農夫が下男と一緒に野良からここへやって来た。すると下男は主人に、自分は

まだ賃金のかかりを預けてある、この賃金を今全部払ってもらいたい、と言った。農夫は下男への借りを思い出すことができなかったのか、それとも思い出したくなかったのか、下男には一文の負い目もない、と答えた。で、下男が「おらは神かけて、あんたはおらに借金がある、と誓う」と言うと、農夫は「そんならわしやあ七匹の悪魔にかけて、おめえにこれっぽっちも借金は無い、と誓う。わしの言葉が間違つとつたら、七歩目に悪魔がわしを地面に埋めつつまうがええ」と怒鳴った。そして言つた通りになつたのである。七歩目に雷のような音がして、大地が裂け、農夫は影も形もなくなり、残されたのは柔らかな土に刻んだ最後の七つの足跡だけだった。

別の伝説ではこう。下女を不当に扱つた農夫が邪な敵（「悪魔」）にかけて誓言すると、その冒瀆行為のために同じ運命に見舞われた。その後、思い出の徴として七つの石が地面に立てられた。ペンテ村はその維持管理をカーレンベルク地区から依頼され、見返りに毎年半シエツフェルのライ麦を受け取っている。夜はだれもこの七つの足跡の傍を通りたがらない。附近は不気味で、化け物がいろいろ少なからず出没、道行く人をおちよくつたり、嚇かしたりするからである。

三〇九 薔薇の雪

昔皇帝ルートヴィヒ敬虔王(註)が冬の最中森で狩りをしてた時、いつも頸に懸けていた聖遺物の十字架を失くした。そこで何人もの僕を遣わしてこの大層貴重な十字架を捜させたところ、なんと、彼らは森の奥深くで咲き誇る薔薇の繁みばらに出くわした。そしてこの繁みに王の十字架がくつついていたのだが、なんとでもそこから取り外すことができなかった。この不思議な話を注進された王が自身急いでそこに向かうと、目にしたのは雪が積もった森

の空閑地だったが、積雪は「教会の」身廊の形をしており、その屋根の先に当たるところに満開の薔薇の木があり、その幹に十字架が下がっていたので、王は殊の外驚嘆した。そこで「こはヒルデ・シュネー「薔薇の雪」ぞ」と叫び、^{ひざまず}跪くと、なにゆえこの十字架はここを離れようとしなのか、御教えを垂れたもうよう神に祈った。下された啓示はこうだった。大聖堂を建てよ、してその広さとその高さは聖なる雪の形に従え、と。王が建立を誓うと、十字架を手に収めることができた。ルートヴィヒはすぐさまその場所に縄張りを施させ、造営を開始したが、薔薇の木がちやんと保存されるよう配慮した。聳え立つ大聖堂の周囲には建築職人や工事人夫、それから信心深い人人が住み着き、王はここにエルツェの司教座を移した。この場所は以後ずっとヒルデシュネーと呼ばれ、時が経つにつれてとうとうヒルデスハイム⁽⁸³⁾という名称になった。例の薔薇の木はすくすくと伸び続け、今日なおヒルデスハイム大聖堂の傍らにあり、その根を主祭壇の下にまで伸ばしている。かつてある敬虔な司教座聖堂参事会員が薔薇の根の一部を素材としてキリスト磔刑像を彫刻した。これは高く崇められ、毎年の聖金曜日^{カールフイクター}、あるいは聖週間中毎朝、聖堂参事会員たちはこの磔刑像を教会玄関ないし入口広間^{しじら}に設えられた聖墓の中に安置する儀式を執り行った。ある時、聖堂参事会員たちがうっかりそれを忘れていると、御像は普段掛けられている場所から下りて、一人で墓に歩み入った。以来、御像は歩みの十字架と呼ばれ、前にも増して尊崇された。ヒルデスハイム大聖堂の内陣座席にも、コルヴァイの百合^{ゆり}やリユーベックとプレスラウの薔薇と同じ伝説があつて、聖堂参事会員のだからの死が差し迫っていると、これが白薔薇で示される由。

三二〇 帽子小人^{ヒュートヒェン}

ベルンハルト司教⁽⁸⁶⁾がヒルデスハイムを治めていた頃のこと、司教館に一風変わった家^{ゴイボルト}の精^{ゲイスト}が出没するようになった。これはあの変幻自在のヒンツエルマンのように姿を消しているのが好きなのとは違って、だれの前にも農民の身なりで現れ、物腰はとて^{おとよ}温和しくて善良、いつも先の尖った^{ツピ}氈帽^{フェルトマウ}を目深に被^かっていた。そこで館の使用人たちはすぐにヘーデケン⁽⁸⁸⁾、すなわち帽子小人^{ヒュートヒェン}としか呼ばないようになった。なにしろ頸^{くび}から上は帽子しか見えなかったもので、このへんてこな妖精は人のお喋^{しゃべ}りに口を差し挟みたがったが、問答をしてしかるべく助言し、親切で世話好きだった。ヴィンツェンブルク伯ヘルマンが悪行を働いたあげく奥方ともども封臣の一人に弑^し逆^{ぎやく}され、子どもがいなかったの、伯爵領が無主となった折、殺人が行われたのと同じ時刻に帽子小人^{ヒュートヒェン}が司教の寝室に入ってきて、司教を起こしてこう言った。「起きて、戦支度をしなよ。ヴィンツェンブルク伯爵領はやられちゃった。家来を連れてって、領地をあんたと司教区のものにしちまいな」。ベルンハルト司教は兵士を従^まえて急遽^{きゅうそ}進発、伯爵領に突入して接収し、これを永久にヒルデスハイムの封土とすることを皇帝から認めてもらった。後に相続権者が現れたが、彼は相続分をあまり減らさないうで済むよう伯爵領を司教から受封した。この伯爵には子息が二人いたが、いずれも既に成年で、仲が悪かった。采邑^{さいい}授与の際、こんな取り決めがなされた。「次代の受封では」年の順ではなく、先に受封を要請した方が優先権を与えられる、と。さて老伯爵が死ぬと、兄息子は取る物もと^とりあえず^すうちに跨^{また}り、ヒルデスハイム目指して疾駆した。けれども馬を持たぬ弟息子の方はすっかり途方に暮れ、なすすべもなかった。すると帽子小人^{ヒュートヒェン}が部屋に入って来て、良い知恵を貸してくれた。いわく「司教に手紙を書いて、お父^とつつあんが死んだことを伝え、領地をおくんなさい、と言うんだ。あんたの手紙は兄^{あに}さんよりも早く届けてやる」

と。そこで弟が急いで手紙を書き、これに自分の封印を捺すと、帽子小人は手紙を受け取り、山越え森越えまっしぐら、最短距離を取ってヒルデスハイムに向かい、兄よりも一、二時間早く到着した。このように早かったので、司教官房では弟息子のために見事な新しい采邑授与状が飛び切りの条文で認められ、司教と司教座聖堂参事会の卵型の封印が鉄力の枠に収められてこれにぶら下がった。「帽子小人が突つ走った」山の小径は今日なお帽子小人の駈け道と呼ばれているが、見つけるのは難しい。

帽子小人はこんな風に甲斐甲斐しく役に立ち、人助けが大好きということを示した。ある貧乏な釘製造工に、これで釘を作りな、と半分に割れた蹄鉄をくれたが、男が釘を拵えてみると、どれもこれも黄金になった。その娘が帽子小人に貰った一卷きの緞帯は、「一度に」数肘尺以上は引き出せなかったけれども、いくら使っても際限が無かった。ヒルデスハイムのある聖堂参事——喉元まで詰まっているのは知識学問にあらずして葡萄酒にござ候という御方だった——が教会会議に弁士として派遣される羽目になり、心配で心配で堪らないでいた。なにせ、自分の学識はお粗末な代物で、我が弁舌で栄光を輝かせられっこない、とよくよく心得ていたから。帽子小人はこの人も不安懊惱から救ってやった。月桂樹の葉と一初、それから劍草浦とで編んだ小さな冠を作って与えたのである。聖堂参事はこれを肌身離さず持つていなければならなかった。すると、なんと、教会会議の席上ヒルデスハイムの演説家はまこと偉大にして輝かしい名僧知識として進退、ために諸人は驚倒し、参事の素晴らしい雄弁に信仰を深めたのだった。こういう気の利いた帽子小人が手を貸してくれば、後世の大勢の弁士たちも彼から教えてもらって、幸せになれただろうにね。ヒルデスハイムのある亭主が心底惚れ込んでいる女房を持っていた。ある時旅に出なければならなくなつて、帽子小人に、妻が操を守るよう監視してくれ、と頼み込んだ。このありがたのお目付役を全うするのに、帽子小人がどれほど苦心惨憺したか、筆舌に尽くし難い。漸く夫が帰つて来ると、

妖精はいそいそと出迎えて、こう言った。「いやあ、戻ってくれて感謝感激雨霰だよ。あなたのかみさんを見張るなんてこと、もうもう金輪際ご免蒙る。一遍にザクセン中の豚どもの番をする方が増しき。ああいう手練手管に長けた狡猾い女の見張りに較べりやな」。

さりながら、帽子小人はこれほど親切を尽くしてくれる一方、時時家の精の意地悪な性分をちらつかせ、怒ったり仕返しをしたりし、召使いたちの失敗を口煩く叱りつけることもあったので、彼らに嫌われたし、果ては司教自身の不興をも買うに至り、司教は強力なお祓いをして帽子小人をヒルデスハイムから放逐した。

三二一 イルメン柱

ヒルデスハイムの大聖堂には柱が一本ある。優美な大理石製で、金箔を貼った青銅の環が幾つも付き、高さ十一英尺、先端にマリア像が飾られている。これにはかつてザクセンの往古の神イルミンの柱像が載っていたとのこと。そこで今なおイルメン柱と呼ばれている。

この神像はエーレスブルク——現在のデーメル河畔ベルゲ市——に立っていた。そして七七年カール大帝に破壊された。——小刀で柱を叩いてみると冴えた響きがする。暑い夏でもとても冷たく、霧が附くと雫になつて滴り落ちるので、まるで汗を掻いているように見える。言い伝えでは、カール大帝がヒルデスハイムへ運ばせた、とのこと。青銅の環には手書きでラテン語の章句が刻まれているが、これはイルメン柱とその歴史には何の関係もなく、むしろこの柱が巨大な燭台として用いられたことを示しているに過ぎないようだ。イルメンはイルミン、アルミン、ヘルマン、すなわち神のように尊崇されたドイツの解放者だ、と唱える向きも少なくない。アーレフェ

ルト近郊の村アルメンザイトなる名はアルミン柱ゾイレが訛なまった響きなのかどうか、調べる価値があるかも知れない。

三二二 ハインリヒ獅子公デア・レーヴェの話

ブラウンシュヴァイク邦の君主ハインリヒ公(93)はかつて海を渡った。嵐が乗船を襲い、公爵と乗り組み一同を未知の海へと押し流した。食糧は悉ことごとく尽つき、彼らは飢餓に殊の外苦しめられた。そこで一人また一人と他の者の腹を満たすために己おのが命を犠牲にしなければならなくなった。だれに死んでもらうかは籤くじで決めた。こうして暫く命を繋いだが、天の配剤で公爵は籤に当たらずに済んでいた。とうとう船に残ったのは公爵と従者が一人きり。そして飢えは留まるところを知らぬ。「さて最後の籤を引こうではないか」と公爵は哀しげにのたもつた。「当たった者は死ぬのじゃ」。「とんでもない、それよりかわたしを殺してください、殿」と忠僕。「ならば。籤を引こうぞ」と公爵の返辞。引いてみると、当たったのは公爵。けれども従者はこう言った。「わたしは愛するご主君を決して殺せませぬ。一つ思案がございます。殿を牡牛おかしの皮に縫い込みましょう。ご佩劍はけんもろとも。天が救いの手を差し伸べてくれるやも知れませぬ」。公爵がこれを肯うけない、その通りにしたところ、獅子身鷲頭鳥(94)が飛んで来て、獣を攫さらった、と思ひ込み、皮を鉤爪かぎづめで引つ掴つかみ、海を越えて獲物を自分の巢へ運んで行った。そしてまた飛び去ったので、ハインリヒは剣で皮を切り裂いた。するとお腹ぺこぺこの雛ひなたちが襲い掛かって来たので、次々と首を刎なねてしまい、鉤爪を一つ取ると、獅子身鷲頭鳥の巢が作られていた高い樹から下りて、森に入った。公爵は長いことこの荒涼とした森林を彷徨さまよっていたが、やがて耳にしたのはこれまで聞いたこともない叫び——雷鳴のような咆哮ほうこうと森中に響き渡るかすれた笛のような音だった。恐ろしい叫び声に近づくと、目に入ったのは大きな獅子ライオンがおぞましい

無翼龍と猛烈な闘いをしているさま。しかし既に獅子は負けそうだった。そこで公爵の思うよう、獅子はなんと
 いても美しく高貴な動物で百獣の王、これにひきかえ無翼龍は毒虫である、と。かくして獅子に加勢することに
 し、獅子を龍から引き離し、長い闘いのあげく龍を斃した。龍から解放されて救われた獅子は感謝して公爵の足許
 に平伏したが、一旦はどこかへいなくなつた。これは食べ物を調達するためで、それを公爵と分け合つた。やがて
 こうした寂しさ、こうした仲間、こうした食べ物に公爵はどうも気が向かなくなつた。海は間近にある。公爵はで
 きるだけうまく筏を作成、櫂を一本拵えると、ある日獅子が再び狩りに出掛けた留守に、筏に乗って岸辺から離
 れた。間もなく帰つて来た獅子は、主人がいないのに気付くと、跡を辿つて海岸に到着、すぐさまさんぶと潮に
 跳び込み、筏を追つて泳いだ。間もなく筏に泳ぎ着くと、またのんびりと主人の前に寝そべつた。しかし海の上
 は狐の獲物はいない。飢餓の苦しみが絶望とともに立ち戻つた。——と、悪魔が公爵の前に出現してこう言つた。
 「あなたの根城のブラウンシュヴァイクじゃ今日は大賑わいだて。歓びここに極まれりつてやつよ。なのにあんた
 は水と雲の間で漂つて、腹がぺこぺこちゆうわけだ。あなたにやここでひもじさがお相手、ところがあつちじゃ
 華燭の典。てのはな、奥さんはあなたがどっかへ行つちまつたのうんざりして、他の若い男、すてきな伯爵と一
 緒になるからさね。あなたは死んだと思つとるんだ」。ハインリヒ公がこんな話を聞かされて仰天すると、悪魔は
 こう続けた。「あなた、さぞかしその婚礼に出たいだろう。おいらに身を任せな、そうすりゃおいら、あなたを今
 日の内に家に連れてつてやるぜ。それであなたも踊りの仲間に入れらあな」。——「神は、久遠の光明は、余が背
 きまいらせて、そちの所有になることなどお望みにならぬ」と敬虔な公爵が言うのと、悪魔はこう応じた。「あなた
 の神が望むか望まないか、そんなことおいら知らねえ。だがよ、どうやらあなたを助けたくはねえようだぜ。が、
 おいらは助けてやりてえし、こうしてここにいる。後悔する前によく考えな。あんなすげえ婚礼に毎日行けるもん

じゃねえ。明日じゃ遅過ぎらあ。「余がそちの言うままになれば、余の魂は永劫に責め苛まれよう」と公爵が答えると、悪魔いわく「だつてな、あんたの魂は今だつて真つ直ぐ天国には行くまいよ。どっちみち苦しみを舐めにやなるまい。あんたはおいらの王国がよく分かつたらん。そうそう悪いところでもねえさ。ま、いわゆる至福つてのを抜きにすりやあな。ほら、おいらはもう長いことそこに棲んでるんだぜ。で、おいら、そこでまずまあ気楽にやつてる。どうだい、あんた、うちへ帰してもらえるんだぞ」「したが、余の獅子はどうする」とハインリヒ。「これは余に忠義を尽くしてくれておる。決して置き去りにしようない」「そいつも連れてつてやるさ」と悪魔は告げ、こんな条件を出した。ハインリヒを手に入れられるのは、自分が獅子を連れて再度ブラウンシュヴァイク近くのギーアス山の頂きに帰着した際、ハインリヒが眠っているのを見つけた場合のみ、と。悪魔はそれ以上大骨折りの代償に何も要求しなかつた。奥方に心底焦がれてもおり、この絶望的状态からなんとしてでも抜け出したい、と必死だつたハインリヒ公はとどのつまりこの条件を承諾した。すると悪魔はすぐさまギーアスベルクまで運び、つぺんに降ろした。「じゃあな、ちゃんと目を覚ましていろよ」と悪魔は叫んで、獅子を迎えにまたさつと飛び去つた。勇者ではあつても困苦欠乏と空の旅に死ぬほど疲れ切つていたハインリヒは、間もなく睡魔に抗えなくなり、草の中にごろりと横たわると、死人のようにびくりともせず昏昏と寝入ってしまった。さて獅子とともに遠路空中を轟轟と飛翔して来た悪魔は、その鋭い目で遙か彼方から眠っているハインリヒを発見、嬉しくて堪らずびちゃびちゃ舌舐めずりをしたものだ。だつて、ほら、公爵が眠つてしまふに決まつてる、ととうに心得ていたのだから。ところが、もつと近づくと、獅子は公爵がしゃつちよこばつて身動きもしないでいるのを目にし、死んでしまった、と思つて、恐ろしい吼え声を挙げた。そこで下界のブラウンシュヴァイクの人人は、こりやあ嵐になるぞ、もう雷が鳴っている、と言つたものである。この咆哮でハインリヒ公ははたと目覚め、眠つてるところを捉まえ

られなかつた悪魔はかんかんになり、潰れちまえ、とばかり高みから獅子を投げ落とした。けれども獅子は猫さながら、骨など折らずに四本の脚ですつくと立つた。そうして主人に随いて町へ下り、それから音楽とさんざめきが聞こえて来る城へ向かつた。これは婚礼の祝いだった。公爵は巡礼と称して、花嫁御寮から葡萄酒を一杯戴きとうございます、と申し出た。花嫁が酒杯を持って行かせると、巡礼は指環を一つ外し、酒を飲み干してからこれを高脚杯に投げ込み、どちらも奥方様のお手まで、と僕に頼んだ。公爵夫人はすぐにそれを背の君の指環と認め、夫の足許に身を投げ、ようこそお帰りあそばして、と歓迎。家来一同は喝采し、花婿の若殿は償いとしてうら若い花嫁を娶せてもらつた。その後ハインリヒ公——獅子公としか呼ばれなくなつた——は長い間幸せに統治し、とうとう逝去すると、かの獅子は公爵の墓の上に横たわり、これも息を引き取つた。そこで獅子の遺体は城中に埋葬され、青銅の記念像が建立された。ハインリヒ公は獅子の生存中既にそうした青銅の獅子像を鑄造させ、安置した、という説もある。獅子身驚頭鳥の雛の鉤爪だが、ハインリヒはこれを聖堂内に吊るし、海と空の旅の徴とした。

三三三 死んだ許嫁

昔ブラウンシュヴァイクに麦酒醸造業者があつて、綺麗な娘を持つていた。この娘はブレーメンのある若い商人を心底愛しており、相愛の二人は、生ける時も死せる時もお互い変わらぬ心でいよう、もしどちらかがこの信義を破つたら、残された方は相手が墓に入つてからでもそれを思い出させてよい、と誓いを立てた。さてその内商人は世渡りをして身代を作り、現世の富を積むため旅に出、娘の期待より長く帰つて来なかつた。もともとこの恋愛沙汰を冷やかに眺めていた父親はかねてから、義理の息子には芳醇なブラウンシュヴァイク産ムンメの醸造法を

心得ている人間が欲しい、と思つており、折しも感じの良い、腕っこきの杜氏とらじを抱えていたので、是非ともあれを婿むこに、と望んだ。そこで娘はどうとう好きでもないこの男と婚約する羽目に陥つた。けれどもその後間もなく焦がれに焦がれ、悲嘆に昏くれたあげくどつと病の床に就き、枕が上がらなくなつた。埋葬が済んですぐ、前の許婚がやつて来て、言い交わした娘が他の男と婚約してから亡くなつた、と聞き、もう一度彼女の顔を見たくて矢も楯たても堪らなくなつた。そこで墓掘り人に金を擱おませ、こつそり墓を掘り返して、柩ひつぎを開いてもらつた。すると娘は額はなわに花環はなわを戴いたき、死者のかんばせに見るあの淨福の表情で、青白く麗しく横たわつていた。若者はかきくどいた。「おお、愛いとしい、愛いとしいひと。本當にほくを忘れることができたの。ほくはほくららの神聖な三度の誓いにかけてきみがした約束を思い出させてやる」。若い商人がこう語り掛けると、死んだ乙女は覚醒して目を開き、「あなたのもの、あなただけのもの、生ける時も死せる時も」とうめくように言つた。そして両腕を上げると、青年の頸くびを固く抱き締めたのである。墓掘り人は烈しい恐怖に襲われてぱつたり倒れ、正氣に返つた時は、なんと、柩ひつぎは空っぽで恋人たちは二人とも影も形もなく、その後彼らを見掛けた者はいなかつた。この話が人人の口の端はに上るようになると、後釜あがたまの婚約者であるムンメの杜氏はひどく恥はずかしくもあり、憤いらいらろしくもあつた。この、死んで埋められて掘り起こされた、という事のしだいは自分から花嫁を奪うばひ去るでつちあげに過ぎなかつたのではないか、と考えたからなおさらである。で、結局のところ一件を悪魔のせいにする他良い知恵は浮かばず。悪魔は人間様がつかまつる過去現在の悪行悪行を何もかもおつつけられるのが常である。そこで杜氏はおぞましい諷刺ふうし図絵を刻ませ、これをだれにも見えるように家の軒蛇腹しやばらに固定した。この図は乙女が棺桶から体を起こし、片方が馬の脚の悪魔が手を差し伸べているもの。絵の下には負けず劣らず趣味の悪い落首が書かれていた。これはまさに酸っぱいムンメみたいな碌ろくでもない代物。この韻文と彫刻が掛かっている古い家は長いことあつたが、遂には壊された。けれどもこ

れに関わる伝承の方は依然としてブラウンシュヴァイクの民衆の間に生き長らえている。

三一四 コールベックの踊り手たち

遙か昔のこと、ハルバーシュタット近郊のコールベック村に一人の農夫が住んでいた。この男、常日頃教会通いより居酒屋通いが好き、それから埒らちもないことをやらかすのがお気に入りとして来ていた。そこである年の降誕祭クリスマスの夜、十五人の同類どもと三人のあまつこを誘い合わせて、深夜弥撒ミサが行われている間教会墓地で、わいわいきゃあきゃあ声を張り上げ、輪舞をしようと思いついた。そこへ司祭がやって来て、聖なる降誕祭の夜をこうも破廉恥はれんちに冒瀆ぼうとくしている踊り手連を厳しい言葉で咎めたが、農夫は気にも懸けず、司祭に向かってこんなおちゃらけを怒鳴るしまつ。「あんたの名前はループレヒト、おいらの名前はアルブレヒトよ。

あんたは中でお唄を歌いな、

おれっっちゃ外で歌って踊らな」。

そこで司祭は両手を天に挙げてこう叫んだ。「しからば神と聖マゲヌスザラントが、おぬしらは一年間踊らねばならぬ、と望みたまわんことを」。——と、この呪いはたちどころに叶えられた。踊っている者たちはなんとしても足が止まらず、踊りが止められなくなった。恐ろしい力で駈かり立てられ続け、朝が訪れ、昼が過ぎても、一同は踊っていた。一晩中踊り抜き。次の朝になってもそうで、これが夜となく昼となくいつまでもいつまでも。彼らは雨にも濡

れず、陽にも灼けず、飢渴も寒暑も感じず、履いている靴も擦り切れず、着ている服が綻びることもなかった。この狂乱の輪舞が始まった時、聖物保管係が——妹がそれに加わっていたので——これを止めさせようとしゃにむに引つ張ったところ、妹の片腕が取れてこちらの手に残り、妹は片腕が無いまま踊り続けた。これが昼夜まるまる十二箇月続き、地面が体半分ほどにえぐれて、並ぶ墓石の間に穴が開いた。とうとうケルン〔大〕司教ヘリベルトがやって来て、踊り手たちに祈禱と儀式を執り行い、彼らの罪の呪縛から解放した。すると内四人がたちどころに倒れて死に、他の者たちは重病に罹った。その後男女の踊り手がいた場所に数数の石が置かれ、村は踊り村と呼ばれるようになった。その名を聞いただけで、人人は怖気を振るったものである。

三一五 クレツベル

ブラウンシュヴァイクとダルデスハイム近傍のハルバーシュタットの中間地帯やハールツ山地北支脈沿いの地域には小人の伝説が夥しい。この小人たちは——ほとんどどの地方でも名称がさまざまだが——彼らの体が小さく歪んでおり一部は屈背なので、この辺りではクレツベルあるいはクレツベル(クリュツベル)と呼ばれている。ちつちやな衆(小さな人人)と言われもする。昔彼らが棲んでいた——なにせもうとつくに小人はいなくなっている——とされる巖穴がある村は数多い。その性格・習俗は繰り返し語られているのと同様である。善良で世話好き、仕器を貸してくれ、僅かな礼で満足する、しかし天性盜癖があつて、怒りっぽい。ダルデスハイム附近のある山からスマンの泉が湧き出ている。小人族はここに棲むのが一番好きだった。山の東側の斜面に畑が一枚あるが、昔これをライヒェルトという名の鍛冶屋が持つていて、豌豆を播くのだったが、これが熟すと全部摘み採

られてしまう。そこで鍛冶屋は腹を立て、見張りを怠らなかつた。しかし、姿も見えず音も聞こえないのにまたしても豌豆が無くなっているのだつた。そこで、畑ですぐに脱穀してしまわなくては、と考え、頑丈な穀棹からざおを用意して見張り小屋に行き、白白明けに仕事を始めた。すると突然の悲鳴。——なんとまあ、隠れ頭巾ネーベルカッペを吹っ飛ばされて、頭に一撃を喰らつたクレールペルが一人倒れていた。このクレールペルは頭巾を失くしたので姿を現さざるを得なかつたのだが、他の連中は頭巾を被かぶつて逃げ去つたのである。

後にクレールペルたちはクヴェードリンブルクとターレの間にあるヴァルンシュタット村を通つて立ち去つた。道を東方へ取つたのだが、ひよつとして古い故郷を屈指したのかも知れない。マクデブルク地方のゼーハウゼンの近くにも彼らが沢山いた。ブランケンブルク(註)とクヴェードリンブルクの丁度中間辺りである。そこのある村——もしかするとヴァルンシュタットかヴェスターハウゼン——に麵麩屋パンが一軒あつたが、小人たちに麵麩を夥おびただしく盗まれたため貧乏になつた。そこで人人はもうクレールペルどもと折り合えなくなつて、移住を余儀なくされた。以来滅多に小人の姿は見られなくなつた。

三一六 焰ほのおに包まれた伯爵

ハルバーシュタット周辺に山があつて、その名を焰フオアーベルクの山という。ここにはかの邪よこしまな者(「悪魔」)が屯たむろしていて、悪人どもを責め苛さいなんでいる。昔ある横道おうちやうな伯爵がいて、長年に亘わたりある男から多額の金を借りていたが、貸し手はいつまで経つても返済してもらえないでいた。暫しばくして伯爵がいなくなつたが、あれは遠国おんこくで死んでしまひ、どこに墓があるか悪魔なら知つているかも、という話だつた。実のところ、悪魔は、自分が伯爵をどこへ連れ

て行ったか、よく承知していたのである。さてかの債権者は伯爵の遺産相続人たちに貸し金の支払いを頼もうと、改めて出掛けて行ったが、先方は負債のことなど関知せず、一昨日来るがいいわい、さもなきやきさまの背中にこつびい金を降らして、「（原）〃（原）答で背中をしたたかにぶん殴つて」勘定いたす、と脅かしたものの。そこでいいようにあしらわれた気の毒な男はがっくりして森を辿つていた。すると出逢つた見知らぬひとが、いったいどうしたんだね、と訊いた。男が悩み苦しみのほどを訴えると、「あんた、伯爵に会いたいかね。それならあたしに随いておいで」と見知らぬ御仁。男が従うと、草木のない高い山の峰に行き着いた。山がぼっかり口を開くと、中では赤赤と火が燃え盛っているのが見え、その巨大な焰の真ん中にある灼熱の椅子に例の伯爵が腰掛けていた。伯爵は男に「この布を取り、おぬしがわしに会つたという証拠としてわしの家の者たちに持つて行くがよい。そしてわしがどんなに苦しまねばならないでいるか、告げてくれい」と叫び、布を差し出した。伯爵の指と手は真っ赤に灼けており、パチパチと火花が飛んでいた。それから男は元の場所に連れ戻され、次いで欣然と貸し金を受け取りに行った。禿げ山だったフォイアーベルクの頂きは後世 柏アイヒェと樅モみの森に覆われた。

三一七 ハツケルンベルクとトウート・オーゼル

昔ブラウンシュヴァイク公領に剛強な獵師ニムロドがおり、実際森番頭と獵人長を兼ねていた。このハンス・フォン・ハツケルンベルク殿にとつて狩獵は人生唯一の快樂だった。ある時彼はその狩りの縄張りである森の真つ只中のハールツの古城で一夜を過ごしたが、こんな気になる夢を見た。巨大な牡猪おすいのししが自分に襲い掛かり、恐ろしい牙きばを向け、傷を負わせ、倒して走り去る、という夢である。ハツケルンベルクはどうしてもこの夢を忘れることができ

なかつた。その後間もなくハールツ山地縁辺部で本当に一頭の牡猪が彼を目掛けて突進して来た。夢に見たほど怖くはなかつたし、夢が正夢になつたわけでもなかつた。というのは、ハッケルンベルクは節くれ立つた猪槍を——獵人長なら当然そのように猪を斃してしかるべきだが——巧みに操つて見事にぐつさり突き入れたからである。そこでハンス・フォン・ハッケルンベルク殿は、愚かな夢を見たものよ、と笑い飛ばし、死んだ猪の口をぐいと踏みつけ、「ささま、もうおれに悪さはさせないぞ」と言つた。夢でやつたように、この猪が自分を打ち負かすことはない、と思つてのこと。ところが踏みつけた足に突然激しい痛みを感じた。なんと、あんまりひどく踏みつけたので死んだ猪の鋭い牙が長靴の革を突き破り、足に傷を負わせたのである。ハッケルンベルクはこの傷を気にもせず狩りを続けたが、その内だんだん具合が悪くなり、片脚が腫れ上がり、城に戻つた時には、長靴を切り開かねばならなかつた。怪我人はもう馬には乗れなかつたので、ヴォルフエンビュッテルへ乗り物で運ばざるを得なかつた。ところが当時は今日のごとく汽車ではまいらぬ。赤土道をごつごつ突き上げられながらのろろやつとこ馬車で行くのだから堪らない。病人はヴォルフエンビュッテルへは辿り着けずじまい。ホルンブルク近傍、ヴルペローデ村近くの最寄りに治療院があり、騎士はここに運び込まれた。彼は、もう狩りができない、とひどく嘆き悲しみ、いまわの際に、「この地上で永遠に狩りができさえすればそれがなにより。主なる神よ、神かけて天国はご自分に取つといてくださいまし」と願つて、傷がもとで死に、ヴルペローデに埋葬された。ここに彼の記念堂があり、彼の甲冑が下がっている。

ハッケルンベルクの末期の願いは叶えられた。彼は最後の審判の日まで獲物を追ひ、狩ることが許された。いや、許されたばかりではない。そうし続けねばならない。彼はハールツ山地の荒れ狂う獵師である、恐ろしい姿形なことがしばしばだが、夜、凄まじい騒音を立てながら徘徊する。その伴をする、あるいは先立ちになる夜の

妖怪がいるが、これはばかりでかい梟ふくろうの恰好かつこう。つんざくつんざくのような途方もない絶叫けつごうを挙げるのでトゥート・オーゼルと呼ばれる。この梟はその昔テューリンゲンのある修道院の修道女で、教姉妹シスターウルゼルという名だった。彼女は聖歌を歌う時、他の修道女たちがさっさと逃げ出したくなるような———そうできれば、許されればの話だが———ひどい声を張り上げた。その響きたるや娘の声というよりも並並ならず喇叭らっぱ鶯鳥がちょうに似ていたから、トゥート・ウルゼルとしか呼ばれなくなつたしだい。とうとう彼女がみまかると、教姉妹シスター一同はもう二度とその声も顔も見ずに済むので喜んだ。なにしろ声を抜きにしたって到底天使とはいえなかつたのでね。———だが、あな恐ろしや、彼女の死後すぐ修道院附き教会の鐘楼の穴からつんざくような声がするようになった。聖歌を歌っている時も、弥撒ミサを執り行っている最中も、大祝日前夜の徹宵てつしやうの祈禱きとの折にも割り込んで来る。そこで「ああ、神様、あれトゥート・ウルゼルだわ」と一人の若い修道女が思わず沈黙の誓いを破つてこう金切り声で叫んだ。すると尼さん全部が悲鳴を挙げ、教会からどつと外へ飛び出し、ウルゼルの声が聞こえる限り、あそこへ戻るくらいなら死んだ方が増しです、と言ひ張る仕儀にあいなつた。そこで遙遙はるばるオーストリアからカプチン会派の修道士である祓魔師はくまが手紙で呼び寄せられ、梟の姿となつたトゥート・ウルゼルを古城のドウムブルク———ハルバーシユタットとクヴェードリンプルクの中間にあつてボーデ川とゼルケ川が合流する地点にあり、アーダースレーベンとハーダースレーベン村近傍———に呪封した。そこが今度はハツケルンベルクの最愛の獵区で根城———最寄りの山はハツケル———となつたし、そうでなくなつて元来おぞましい妖怪変化が夥おびただしく出没する場所なものだから、トゥート・オーゼルは狩りをする騎士の仲間に加わつた。駒こまにうち跨またがつたハツケルンベルクは何があるうともとせす獲物を求めて沼地をばしゃばしゃ駆かけ抜ける。オーゼルはばさはさ跡を追う。かれは、ハイハイ、と叫び、これは、ホウホウ、と叫ぶ。この二人組に途中で出くわす者に、神よ、恩寵を垂れたまえ。この連中に気付いたら、腹はら這はいになつ

て固く沈黙を守り、ざあざあどうどうという騒音が頭上を通り過ぎて行くのをひたすら待つほかない。ハッケルンベルクは領境地帯にも入り込む。いや、アルトマルクのドレームリングに至っては、ハッケルンベルクの棲処はおれらのとこだ、と自慢し、獵師が攫いに来るぞう、と脅かすくらいである。

ゼルケ河谷の小城マイゼンベルクには木彫りの酒杯があり、ハッケルンベルクが生前使用したものだ、という。『魔弾の射手』が上演されるつど、狼谷の木のの上に火のような目をした大きな梟が止まっていて、いかにも退屈そうに絶えず羽ばたきをしているのが普通。これ、すなわちトゥート・オーゼルである。

三一八 底無し

ハッケル山の北の峰から遠からぬところに大きな漏斗状の陥没地がある。一部は満満と水を湛え、縁には丈高い葦が生い繁っている。ハールツ山地周辺、とりわけその南部にはこうしたものがある。遙か昔、この場所には残忍非没地は底無しと呼ばれる。一番長い測量棒を用いても深さが測れないからである。遙か昔、この場所には残忍非道な所業が数多行われる盗賊騎士の城が建っていた。さしも寛容な上天もとうとううんざりし、一夜盗賊城とその住人の上に武装者のごとく災厄が降り掛かった。城は恐ろしい轟音に包まれながら無限の深みに沈んで行き、水がどどつととその頭上で打ち合って湖となった。騎士たちは川鯰に、従士どもは鯉に変身、あらゆる非行に忠実に手を貸した老家政婦は巨大で一ツエントナーほども重みのある鯰になった。彼らは底無しの水の中で絶え間なく追いつ追われつしている。なお件の騎士たちは生前何の役にも立たない連中だったので、今日でも、ほとんど、あるいは全然役に立たない、それだけにどうしようもないくでなしがいて、「やつは正真正銘の川鯰だ」とい

う。

三一九 巨人の血

ハツケル山から程遠からず、エーゲルン^(註)とヴェスターエーゲルン(マクデブルク郡)の間に沼が一つあるが、これはいつも真つ赤である。その由来は巨人族——この種族の途方もない大きさについて空想はなんとも思い切った描写を^{ほしいまま}恣にして来た——の時代に遡るといふことである。二人の巨人が闘つて互いに追い掛けあつた。片方が逃げて、子どもが溝をまたぐような具合にエルベ河を越え、僅か数歩でエーゲルン地域に入った。ところが片足を充分高く上げなかつたので、あの古城の塔の尖端に躓き、よろめいて倒れ、ヴェスターエーゲルン近くの野原の石に鼻をぶつつけた。それもひどい勢いだったので、鼻骨を折つてしまい、鼻血が^{ほとほし}迸つて沼一杯分にもなつた。これすなわち巨人の血である。またこういう異説もある。ヴェスターエーゲルン近傍に棲んでいたある巨人がしばしばあちらへ、またこちらへとこの村を跳び越えておもしろがつていた。ところがある跳躍の際塔の尖端で足指を傷つけた。このかすり傷から大きな弧を描いて血が降り注ぎ、いまだに真つ赤な例の沼を作つたのだ、と。この沼は今日なお巨人の血と呼ばれている。

三二〇 人狼の石

ハツケル山と北のエッゲンシュテットに向かつて延びているブランツレーベンの森は昔撃がつていた。この森

に身許みもとの分からぬ男が一人棲すみ着きいていて、羊飼いの下働きとして土地の者に雇よわられていた。土地の者は男をただ、爺じいさん、と呼んでいた。なにしろだれも男の名を知らなかったし、雇よわれ先もあつちこつち転転と変え、一つ家に長居したことがなかったのですね。ある時爺さんは羊毛刈りの時期にメレという羊飼いのところで働いた。けれども時期が終わると、爺さんもいなくなつた。そして羊飼いのお気に入りこゝろの仔羊——かねて爺さんは、これenkをくれ、とメレに頼んだが、断られたのである——も一緒に連れ去つた。けれどもその後羊飼いのメレがカッテン谷で羊の番をしていると、不意に爺さんが「こんちは、メレ。あんたの仔羊がよろしくつてさ」と声を掛けた。腹を立てた羊飼いは携もつていた牧杖シツペで石を打ち、爺さん目掛けてぶつつけた。——すると爺さんは突如残忍な人狼⑩に変身、メレに襲い掛かつた。メレは身を翻ひるがえし、逃げながら犬たちを呼んだ。犬たちはすぐさま猛猛しく人狼を攻撃した。今度は人狼が逃げ出す番で、メレも向き直つて追跡を始めた。人間と犬たちが人狼を駈かり立ててエッゲンシユテツト界限かいげんにまで来ると、羊飼いは「殺してやるぞ、死ね」と叫んだ。——人狼は突然また爺さんの姿に戻り、勘弁してくれ、と懇願した。しかし羊飼いは許してやろうなど思おもひも寄らず、情け容赦もあらばこそ爺さんに打ち掛かつた。するとまたしても急に爺さんの姿が消え、羊飼いが打つたのは茨いばらの繁みだつた。しかし羊飼いが手を休めず叩たたきに叩たたいている内、茨はすっかり薙なぎ倒された。と、またまた繁みは爺さんに変容、もう一度助命を乞うた。けれども無駄だつた。——すると爺さんは再び狼になつて、逃げようとしたが、節くれ立つた牧杖に附ついている鋭い田匙シヤベル状の石突きがその頭蓋あたまに中り、狼ははつたり倒れて死んだ。近くに一つだけほつんと離れた巖いわがあり、爺さんはそこに穴を掘つて埋められた。この巖は今日なお人狼ウエノツウオウシヤウライン、石と呼ばれている。

三二一 クロツペンシュテットの蓄え

ハルバーシュタットとエーゲルンの間中に位する小さな町クロツペンシュテットの象徴は奇妙なもので、しろがね白銀の高脚杯ポカイレである。これが町役場にあり、クロツペンシュテットの蓄えと称されている。高脚杯には浮き彫りで揺り籠かごが十三と槽かねが一つ描かれ、どの揺り籠にも子どもが一人ずつ、そして槽にも一人入っている。これについてはこんな物語がある。昔クロツペンシュテットの牛飼いが一年で十二人の愛人に十四人の子どもを生ませた、とのこと。これを証明する銘文がラテン語の章句で例の酒杯に記されている。十二人の幸せな母親はうまく間に合わせようと揺り籠を捜したが、クロツペンシュテットの揺り籠の備蓄は全部で十三しかなかった。そこで十四人目の男の子(子どもは皆男児ばかりだった)は槽で我慢しなければならなかった。かかる豊年の記念としてこの町の参事会は白銀の高脚杯ポカイレを作らせた。これがちゃんと保管されている限り、クロツペンシュテットの町には揺り籠の蓄えと子宝が尽きることはないそうである。なにせ「蓄えあれば殿様⑩」「備えあれば憂いなし」という結構な古諺こげんはこの地に由来しているのだ。

三二二 クヴェードル

ブラウンシュヴァイクの大聖堂では男がもじゃもじゃの髭ひげを生やした女性の傍に立っている記念像が見られるが、これには、実の父親の道ならぬ愛欲から身を守るため、顔をこのように醜くしてください、と娘が神に祈った、という伝説がある。皇帝ハインリヒ三世⑪の見目麗しい息女はそれと同じ状況に置かれ、神に熱烈に祈り、懇願し

たにも関わらず、その身の苛酷な訓練には全くの徒労だった。ほとんど絶望しかけていた折、かの邪な敵〔悪魔〕が彼女の前に姿を現し、天帝のあまりにも強い恋着が嫌悪に変じるよう力を貸そう、しかも、自分が姫の眠っているところを三夜続けて目にしなかつたら、無報酬でそうしよう、と申し出た。もちろんマティルデが眠っている現場をおさえたら、彼女からそくばくの分け前を頂戴つかまつる、というのである。——皇女は毅然としてこの由由しい契約を承引、大きな壁掛けの刺繡を始めた。針を運んでいると、お蔭で夜も目を覚ましていられた。でも二晩目、三晩目ともなると、なんとも眠くて堪らず目蓋がついつい下りたが、忠実な小犬のクヴェードルが唸ったり吠えたり裳裾を口にくわえて引つ張ったりして彼女を起こした。そこで皇女が眠ってはいないか、と悪魔が見に来て、目に入るのは目覚めている姿。かくして悪魔は彼女の不滅の靈魂に指一本触れることができず、それに彼女は悪魔とその肉体に関して契約を結んでいたわけだから、悪魔はその鉤爪を伸ばして彼女の顔に掴み掛かり、鼻をぺちゅんこに押し潰し、片眼を抉り、口を切り開いた。マティルデが神意と悪魔の怒りによって無残に変えられた顔で天帝の前に出ると、彼の罪深い愛はすっかり消え失せた。さて俗世の歎びを捨て去った彼女は壮麗な修道院を建立、寝ずの番をして救ってくれた愛犬の名に因んでこれをクヴェードリンブルクと命名した。

三三三 エルベの乙女

エルベ河には女の水の精が一人棲んでいる。マクデブルク地方の人人はこれをエルベの乙女と呼ぶ。以前はしばしば簡素な身なりの市民の娘といった恰好で現れた。白い前掛けをしているのだが、その裾はいつもぐつしり濡れていた。さもなければ、岸辺に坐り黄金色の長い髪の毛を梳っている姿を見掛けたが、人間が近づくと、目の

前で水に跳び込むのだった。彼女が誘惑して死に導いた者は夥しく、向こう見ずな泳ぎ手を水中に引つ張り込んだことも少なくない。エルベ河に巣くつている男の水の精に関する伝説もある。マクデブルクの井戸水は硬水で、エルベ河の水は軟水なのだが、河水は市外に出て大骨折つて運んで来なければならなかったから、かつて市民がエルベ河から市まで水道を敷設しようと思つたことがある。工事は杭打ちで始められたが、だれも働いていない真昼時、素つ裸の男が一人、流れの中の杭の列の傍に立つて、ぐらぐらと揺さぶり、抜き取つては水に流してしまふのが目撃された。そこで人人は着工したばかりの計画を放棄した。

ある時マクデブルクのさる貴族の若者が麗しい令嬢と婚約した。ところがふと水泳に出掛けた青年は二度と家へ帰らなかつた。エルベの乙女が己の許へ招き寄せたのだ。彼の身内一同——それからなによりも彼の許嫁——は度を失つて三日も河の中至るところを捜し廻つたが無駄だった。すると一人の妖術師がマクデブルクへ来たので、許嫁の両親がこれにお伺いを立てた。妖術師は伎倆を振るい、やがて両親にこう告げた。「御曹司はエルベの乙女の虜になつております。生きながら返すことは決してありませぬ。もつとも娘御にご自分の命を婚約者の代わりにエルベの乙女に差し出すご覚悟がおりますか、さもなければ、彼ら二人ながらその身を女の水の精に約束なさるなら別」。許嫁はすぐさま愛しい御方のために喜んで命を捧げるつもりになつたが、両親はそうした誠実な決心を適切と見做すわけにはゆかず、生贄が緊要とは認めなかつた。そして逆に、娘の婚約者を生きていようと——やむを得ないなら——死んでいようと、取り戻して欲しい、と妖術師にせつついた。これに応じて妖術師が、奪い去つた男を行かせるようエルベの乙女に術を行使すると、エルベの乙女はそれに従い、男を岸边に打ち寄せた。ただし残念ながら彼は死んでいて、全身青い斑点だらけだった。これはエルベの乙女がひたすら烈しくおぞましい愛欲に駆られて唇を押しつけたり、爪つたりした痕だったのである。

三二四 マクデブルクの建設

マクデブルクは極めて古い都市である。ユリウス・カエサルがキリストご生誕前四十七年に築き、市内に神殿を建立、これをウエヌスに奉献したのだ、とのこと。神殿があった場所は今日でも示される。この古都の名は最初処女の町だったが、典雅な愛の女神の乙女像のため、後世乙女の町と、そして遂にはマクデブルクと呼ばれるようになった。カール大帝の時代が過ぎ去るとこの都市はヴェンド人とハンガリア人に劫略され、貧しいエルベの漁民らの住む寒村になり果てた。その後オットー大帝が妃のエーディタに贈り物にすると、彼女はここが好きになり、新たなマクデブルクを造営、更に夫と共同で大聖堂を建立した。聖堂内には大帝の像と並んで彼女の壮麗な大理石像をも見ることが出来る。皇帝像は片手に十九箇の黄金を被せた小樽から成る丸い環を持つている。これは聖堂建立に十九樽もの金貨を要したことを表す。その折皇后エーディタは一輛の馬車に乗って辺りを経巡り、新市街の広さ、市壁、防禦設備を決めた。聖堂内外にはより小さい木像が幾つも見られ、これらはそれぞれ伝説と結び付いている。使用人、羊たち、犬どもを従えた羊飼いが塔の畔で一つの星を見詰めているのは、その星の高さほどに、その羊飼いが自費でその塔を建てさせたのだとか。悪魔が窺っている修道士は、無分別にも思い切つて悪魔に献身を誓ったからだそうである。聖堂自体の内部にある鎖を掛けられた男の木像二つは、聖堂建立を妨げようとした両グライヒェン伯爵だ、とのこと、だから彼らの像が鎖で吊り下げられている由。

三二五 戦争の前兆

マクデブルクは他のほとんどのドイツの町に較べ頻繁に兵火によって損なわれた。初期の頃既に東方から侵攻して来た野蛮な諸民族に破壊されたし、後代にも惨禍荒廢をいやというほど味わった。こうした災厄にはおおよそ常にそれを告げ報せる何らかの予兆があった。皇帝ハインリヒ四世の時代不思議な恐ろしい徴しるしが幾つも天に見られた。近郊の沼地では鴉かぶつの大合戦が行われ、これは丸一日続き、沼地は互いに激闘したあげく命を失った鴉の屍骸で一面に覆われた。禮拜堂に安置されている司教杖がじつとりと濡れ、聖職者たちや市民たちがやがて恐怖のあまり顔に浮かべるであろう冷や汗を予告した。母親の胎内で子どもが口を利き、焼きたての麵麩めんぷの切り口から血が流れることも再再だった。かような徴にはいずれの場合も慘憺さんたんが続いた。マクデブルクがメックレンブルク公ゲオルク(18)——同地方に侵入、無残に荒らし回った——と戦闘状態に入った折もこうしたことが起こった。市は武備を固め、町の守護者であるマウリティウス聖者の日に、市民の親方連アインスターを先頭に立て、敵に一大会戦を挑もうと出陣した。彼らが市から一哩アール離れた、オーレ川の対岸、ヒラースレーベンとメーゼブルクの間(19)に広がる野原に差し掛かると、服装といい体つきといい農夫のような男に出逢った。男はごく年寄りで髪も髭ひげも雪白だったが、顔は全く若若しく端正で、元氣潑潑はつらつ、いとも優雅な風情だった。そして市民軍に向かつて両手を挙げ、こう言った。「いずれへ行かれるおつもりか、マクデブルクの衆。ご存じないのか、そなたらの守護聖人の日がそなたらに決して幸いを齎もたらしたことがないのを。二百年前(一二三〇年)この地で、しかもこの日、マクデブルク勢が撃破され、それからもつと後にももう一度同じ日にそうなったのですぞ。引き返して、町の守備を嚴重になされ。災厄はすぐそこに来ているのじゃ」——。

男の話聞いて仰天、従おうとしたのは同勢の内ごく僅かに過ぎず、防衛軍の多数を占めるいつも愚かな大衆は自分たちがおっそろしく利巧だと自負、闘志満満、敵なんぞぺろりで、木っ端微塵に叩き潰してやるつもりだったし、殊に市民軍の隊長たちに至ってはこの狂乱の年の数数の厄介事にも関わらず意気盛んな闘鶏さながらだった。しかし半時間後彼らの調子はがらり一変、会戦は急速な暴風のように過ぎ去っていた。マクデブルク勢の損失は死者千二百、捕虜三百、野戦用蛇砲（フエルトンネンゲン）（「長砲身軽量野砲」）十一門およびその他の戦争動物園（ツォー）だった。市民兵小旗部隊（フエリシライ）の十一旒（リョウ）の軍旗もまたしかり。白髪の警告者を嘲り笑った者たちは悉く殺されるか、虜囚（トリコ）となるか、さもなければ彼らの部下だった民衆の大部分とともにオーレ川に追い込まれた。この溺死は以来皮肉にマクデブルクの洗礼と呼ばれた。災厄を予言した例の老人は戦後熱心に捜されたが、あれ以前にも以後にもその姿を見た者はなく、彼に関する情報も入手できなかつた。

マクデブルクはカール皇帝とその命を奉じたザクセン選帝侯モーリッツに厳しく攻囲されたが、こちらは確（ツ）かにより幸運だった。しかし次の世紀には少なからぬ徴がティリー麾下（キカ）の軍兵によるまたしても破壊が間近であることを十二分に示したのである。

三二六 魔術の目眩（くら）まし

一人の魔術師がマクデブルクへやって来て、店出し自由の市で小屋掛けをし、夥（おびただ）しい群衆を周りに集め、ホークスポークスやらアーブラカダーブラやらを唱えて芸を披露する前にもうながしかのお銭（あし）を頂戴（ちやうたい）した。演目が進行する内、とても可愛い、びつくりするほどちっぽけな小馬が登場、円を描いて踊って見せ、見物人をおもしろ

がらせた。最後に魔術師は妻、娘、道化役、それから小馬を横に並べて、一席ぶち始めた。まず今生きているこのろくでもない恥すべきご時世を嘆き、それからいわく「皿が廻つて来て、見料を払わなけりやならないってえと、どうしてご見物衆がばらばらなくなるんでしょうかね。真つ正直な男にまずまずの暮らしができないってなどういわけでござんしょう。あたくしやあもうこの愛しい家族ともどもこの世にうんざりしてます。とりわけマクデブルクにはね。だもんで、ここを出立して、おさらばするつもりでさ。さしあたっては天国へまいります。天国でうまく行かなきゃピッターフェルト（デッサウとハレの間にある）へね。あそこはとつてもすてきな土地柄なんで」。言い終わると綱を一本空中に投げ上げた。小馬がその綱をぱつと捉え、それに縋つて真つ直ぐ上昇。魔術師は小馬の尻尾を掴み、そら行けえ、と叫んで、これも上へ。——すると魔術師の妻が夫の脚に、娘が母親の脚に、道化役が娘の下裳にぶら下がり、こうして一座はずんずん昇る。それから魔術師は空から下界へ向かつてこう怒鳴った。

この世じゃあもう会うこたないが、

ピッターフェルトでお目もじいたそう。

人人が皆どつと笑い、大口開けて驚嘆する内、一座は空へ舞い上がり、やがてピッターフェルトの方角へと消え失せた。そこへ一人の市民が町から出て来たので、知人のだれかれが、あれを見なかつたのは惜しかった、ああいうものには毎日お目に掛かれない、と先刻の奇蹟の話をして聞かせた。けれども市民は「そりや嘘っぱちだ。だつてな、たった今わしは魔術師と小馬と家族が連中の泊まつとる宿屋に入つて行くところを目にした。だからして、や

つらは天国へ行つたわけでも、宙を飛んでビクターフェルトへ行つたわけでもない」と応じた――。

三二七 カピストラーヌの最上梨

熱烈な跣足修道士(15)ヨーハン・カピストラーヌスがマクデブルクでも民衆に悔悛と、あらゆる虚飾をかなぐり捨てることを説くため、かの地へ来た時、大司教フリードリヒは配下の全聖職者を引き連れ、鐘が鳴りどよもす中、十字架を捧げ教会旗を靡かせて出迎え、夥しい群衆がこの行列に従つた。このように盛大に歓迎、新広場にそこから説教を行えるよう高い説教壇を設け、男どもは遊戯盤、賭博道具の骰子(さいころ)、骨牌(カルタ)、祭の仮装に用いる仮面、道化の打ち籠(べら)、道化の帽子の数を、女たちは飾り紐(ひも)、面紗(ベール)、附け鬘(まげ)、それからありとあらゆるこまごました装身具を持ち寄つた。熱烈な民衆説教師は火を焚かせ、集まつた品物をなにもかもそこで灰にした。カピストラーヌスの説教ぶりは激越だったので、壇の近くの人人が泣きだすと、遠くにいて言葉が聴き取れなかつた者たちに至るまで、涙を流さずにはいられなかつた。彼は涙の水門を開き、どつと流れるがままにしてのけたのである。こうした妙技に掛けてカピストラーヌスに比肩する者はいまだに無い。さて、説教を終えた後の食事の席でカピストラーヌスにとりわけ極上の梨(ななし)が提供された。説教して喉がからからになつていたことでもあるし、これを飛び切り旨い、と思つた彼はこの梨に祝福を与え、聖別した。以来この種類は最上梨(カルティナイナルスビルネ)なる名を授かつたが、この梨の風味がメランヒトン梨——伝説によればメランヒトン(16)が、すばらしい、と認めたので、ペガウの教区監督庭園で三百年來栽培されている——より優れているかどうか決めるのは、おそらく神学者より果樹園芸学者の方が容易(たやす)かろう。

三二八 ヴォルミアシュテットの名

カール大帝がこの領域に遠征、エルベ河畔に達した時、オーレの川筋がエルベの流れに向かう場所の地勢風土が殊の外御意に叶い、率いる軍旅に陣を設営させ、物見の丘を築かせて、「この場所は氣に入ったぞ」とのたもつた。――なにしろ休息を取りたかつたし、近隣の多くの土地、たとえばハレなどよりも大氣が清らかで好ましい、と感じたからである。この場所は後に小さな町となり、ヴォルミアシュテットと名付けられた。イエルスレーベン(ゲルスレーベン)村の近くに上部がいくらか掘りくぼめられている丘があるが、これがかの物見の丘だったというので、今日なおカールの釜と呼ばれている。

三二九 イーゼルン・シュニツベ

ミルデ河畔のガルデレーゲン近郊にイーゼルン・シュニツベという堡壘があるが、この建物の起源はまことにまことに古い、とのこと。ローマの將軍ドルルスがこれを造り、女神イシスのために聖所を設けた由。そこで堡壘はイシスブルクあるいはイーゼンブルクと呼ばれた。ヴェンド人が攻囲したことがあるが失敗に終わり、少なからぬ痛手を蒙ってすぐすごと引き揚げた。ためにこの堡壘はイーゼルン・シュニツベと呼ばれるようになった。この建物の周りに、申さば庭に置くとといった感じで町が建設され、ガルデレーゲンと命名された。しかし近くの叢林に巣くっていた追い剥ぎの徒党がガルデレーゲンの住民に捕らえられ、その叢林の方が都市としての発展性がある、と分かり、人人はそちらを新しいガルデレーゲンとした。これが現在存続している。元の都市があつた場所

に三百年前にはまだ判読し難い銘文を刻んだ古い十字架が立っていたが、これはペトルス聖者を讃えて建立されたもの。昔は毎年「聴きたまえ」の日曜日ともなると全市を挙げて練り出し、イーゼレン・シュニツベ館の土地にある十字架の許に赴き、一日を楽しむのが常だった。

イーゼレン・シュニツベに向かう城道の端れにはかつて門があった。城道に裁判権を有し、市の近隣に豊かな所領があり、大抵はカルベの本邸に居住するアルフエンスレーベンの殿たちはこの門から騎馬で〔市内に〕入った。城道のこの門は開門権の結果、アルフエンスレーベンの殿たちのため、その要求に従い昼夜ずつと開けたままにしておかねばならなかった。そこで殿たちとガルデレーゲン市参事会との間に悶着が生じた。なにしろ参事会としては、市の門を昼夜開け放っておかねばならんとしたら、見張り番も市壁も要りません、開いたままのこの門など見たくもない、なんとか閉めつきりにしたいものだ、との見解だったから。さてある日のこと、ガルデレーゲン市庁舎で開かれたなにかの宴会にアルフエンスレーベン一族最長老の家長が出席、皆和氣諷諭で争い事の気もなかった。その折市長がただの冗談といった調子で例の門に触れ、「いかがでござろう、殿、わたしどもが門を壁で塗り込めさせると言ったら」と言った。「ほほう」とアルフエンスレーベンの殿。「ちょっと待ってくれぬか。わしはまず馬で散策に出たいのじゃ」。「お帰りになられる前に閉めきりにできますぞ」と市長がこれに応じた。すると騎士は把手付き大杯を掲げ、ぐいと一口あおると、こう叫んだ。「さように手早い左官職人をお持ちかな。わしはおぬしらの町のぐるりを速歩で廻るが、馬で跳び越えられぬほど土台が高くなる前に戻って来てみせよう」。「やってごらんになられませ、騎士様」。「決まりじや、騎りにまいるぞ」。こうして殿は最上の持ち馬を牽いて来させ、鞍に跨ると城門から市外へ出て行った。しかし市長は、瓢箪から駒を出そう、と故意にこの冗談を話題に上せたのだったから、かねて何人もの左官職人、石材、石灰、灰泥などを全て用意しており、騎手が出

て行くと門扉が閉ざされ、どんどん石が積まれていった。一方騎手は上機嫌でミルデ橋を渡り、町を周回、特別長い時間も掛からずだった。馬は飛び切り、気分も最高。ところがもう目的の地が目に入った時、馬が躓いた。怪我は無かったのだが、こちらの停滞とあちらの迅速の結果、ごくごく僅かな時間の中にガルデレーゲン市民は門を一つ獲得、アルフェンスレーベンの殿たちは権利を一つ喪失した。

三三〇 ソリス・ヴェルテ

アルトマルク地方の人人はごく古い時代が起源という発祥伝説がお好きである。この地の伝承によれば、ユリウス・カエサルが惑星の神神を讃えてドイツに七つの都市を建設した由。マクデブルクも〔女神〕ウエヌスの星〔金星〕に捧げられた女性の町とか。一方太陽神ソルに捧げられた町がアルトマルクにあつて、これは以前ソリス・ヴェルテという名だった。——ヴェルテとは古語のヴェレ、屋根が弓なりの園亭、すなわち小屋、あるいはより後世の語ではヴェラーマウアー、つまり粘土の壁に由来するとか——どうも信用し難い話で。これが今日のザルトヴェーデルである。異説によれば、ガルデレーゲン近傍にイシスの神殿を造つたように、ドルススがここにソリスの神殿を建てたそうだ。カール大帝が異教を撃破し、古代の神殿を破却した時にはまだフォイボス・アポロンの神像があつた。

三三一 杖に詰まったドゥカーテン金貨

昔ザルツヴェーデルに男が一人いたが、別の男からドゥカーテン金貨(金)を百枚借りた。ただしこやつ、この金を返却する気は毛頭無かった。貸し手がやって来てきつく督促するたびに、だつてあれはとくに返したじやないか、とうそぶく始末。そこでとうとう告訴された。するとこの奸悪な借り手はこんな策略を使った。散歩用の杖(杖)の中を剝(く)り抜き、中に百枚のドゥカーテン金貨を小さく巻いたものを音がしないようにぎゅっと詰め込んだ。そしてこの杖(杖)を携(も)えて市庁舎に出掛けた。そこではもう債権者が裁判官の隣(すわ)に坐(ま)つて待ち構(ま)えていた。提訴と抗弁が行われた後、裁判官は宣誓要求に取り掛(か)かった。用意おさおさ怠(な)りなかつた不実な男は、持(も)つていてくれ、と素早く例の杖(杖)を債権者の手に押し込んだ。右手は宣誓のため高く掲(か)げ、左手は福音書の上に置かれた磔(たづな)刑像(たづな)に載せなければならなかつたからだ。そうして、百ドゥカーテンをまこと全く満額債権者の手に戻したことは今現在真正なる旨、堂堂かつきっぱりと誓(ちか)つた。かくして一件落着とあいなり、金を貸した方は面目を失(し)つて悄然(しやうぜん)と、借りた方は意気揚揚で家路に就(つ)いた。が、借り手の男は残念ながら帰宅できなかつた。というのは何事をも見そなわす神の峻(しんげん)厳(げん)な審判が途中でこの偽誓者に下(くだ)つたのだ。出くわしたのは粉屋の荷馬車。主(しゅ)はその牽(ひ)き馬たちの頸(くび)に二、三匹の雀蜂(すずめばち)を送りたもうた。そこで馬たちは狂奔逸走、男を突き倒し、車で轆(ひ)き去(い)つた。二つの車輪が男の体に乗(の)つかり、儀式抜きではあるが車裂きの死刑に処したのである。他の二つの車輪は杖(杖)の上を通過、これを碎(くだ)いたので、百ドゥカーテンが転(ま)げ出し、男の詐略も同時に明明白白となつた。その後この話はザルツヴェーデル新市街(ノイシュタット)のカタリーネ教会で絵図になつた。

三三二 テッツェルと騎士

免罪符売りのテッツェルは⁽¹⁸⁾その金櫃を抱えてドイツの地を経巡っていたが、アルトマルク地方へもやって来て、ザルツヴェーデル近郊の村——その名はフレヒティンゲン——に入り、売り物を披露、劫罰、浄罪火〔煉獄の火〕、地獄の責め苦について説教、免罪符の効能を褒めそやした。さて、フレヒティンゲンにはバーナード・フォン・シエンク殿という貴族が住んでいたが、この御仁もテッツェルの口上を熱心に傾聴し、過去に犯した罪ばかりではなく、目下企てている、そして将来犯すであろう罪——それらがいかなる行為から成り立っておつても——のために免罪符を買うことができませんぞ、お金が櫃の中でチリンと鳴れば、買った者の魂はお金と引き替えに浄罪火からびよんと跳び出し、三日もすれば浄罪界の灰色の永劫からおさらばして無垢の身となれますのだ、というところをとりわけ胸に納めた。免罪符説教師が火のごとき雄弁で描き出したこうしたことどもをとくと聴き澄ますと、騎士も歩み寄つて、羊皮紙に記されたまことに見事な贖宥状⁽¹⁹⁾を買ひ求めた。そこでテッツェルは当然ながら自分と騎士の名、および日付をこれに記入、封印も忘れずに捺したしだいである。これに続いて近隣の貴族たちも購入したので、例の金櫃はオルツターラー銀貨やグルデン金貨でほとんど一杯になり、テッツェルは金櫃と共に上のご機嫌で村を立ち去つた。テッツェルがフレヒティンゲンの森を抜けようとしていると、なんと、急いで先回りしたバーナード・フォン・シエンク殿が待ち構えており、こう言った。「おい、坊さん、戴きたいものがあるんだが——」。「やつがれの祝福を授けよ、とな、善男よ。いかにも授けて進ぜましようぞ」とテッツェルは相手に皆まで言わせず、祝福するため両手を挙げた。「いや、祝福は取っておきなされ。頂戴いたしたいのはあんなの金櫃だ」と騎士。これにはテッツェルびっくり仰天、こう悲壮な言葉を並べ立てた。「ご貴殿のごとき高貴な騎士が

教会の財産に手を伸ばすほど破廉恥なわけはなからう。教会はこれをもろもろの敬虔な事業や壊れかけた神の家の修築のため緊急に必要としておるのじゃ。聖物竊取はまっこと由由しき強奪行為にして、両親殺しとも並ぶ極悪の大罪重罪ですぞ。するとバーナード・フォン・シエンク殿はつい先刻買い取ったばかりの免罪符を取り出し、これをテツツェルの目の前に突きつけていわく「罪かも知れんが、ここにわしの贖宥状がござる。あんた自身がな、おありがたい神父様、あんた自身がわしに授けたものよ。されば神と共に行かっしゃれ。してその金櫃はわしに委せて、わしの祝福も受け取りなされ。お望みとあらば、ローマなる教皇陛下に、わしがよろしくと申した、とお伝えあつてもよい」。——テツツェルには頼りないお伴しかいなかったし、騎士は強そうな騎乗の男を数人従えていたので、テツツェルは金子がぎっしり詰まった櫃を恨めしげに眺めて、これに今生の別れを告げ、道中を続けざるを得なかつた。一方、金を手に入れたバーナード・フォン・シエンク殿はなんとも気前のいい主ぶりを発揮、これを当時まだフレヒティンゲン村になかつた教会建立に寄進し、大きく、頑丈な櫃の方はヴィッテンベルクの教会への贈り物とした。こちらはいまだにそこにあつて見せてもらえる。テツツェルは別の櫃を作らせたが、これが後にゴスラールに來た品で、今もかの地に存在する。これら以外にもテツツェル櫃といわれる免罪符売りの櫃はそこそこにあるが、中には鏢一文入つてはいない。

三三三 月の中の糸紡ぎ女

ザルツヴェーデル近郊のある村——ヴィーベリッツだったかも知れない——に年取つた貧しい女が住んでいた。女には娘がたった一人いて、マリーエという名だった。これはとても仕事のできる子で、貧乏を乗り切ろうと

せつせと母親に手を貸していた。マリーエは一日に撚り糸二つを紡ぐことができ、できた糸は比類なく均一で細かった。けれどもマリーエは勤勉なのと同じくらい明るい遊び好きでもあって、糸紡ぎ寄せ場(糸紡ぎ部屋)ではいつも一番陽気だった。とりわけ糸繰り車をうっちゃらかして、さ、踊りましょ、となるね。この踊りが終わるのは夜もすつかり更けてからだだった。母親にしてみれば、年端も行かない娘が真夜中まで騒ぎ廻ることがよくあるなんて、どうにも気に入らなかつたが、小言を繰り返してもあまり効き目がなかつた。さてまた冬——その間マリーエはずうつと勤勉そのものだった——もほとんど終わりがけ、マリアの聖燭祭(リトマス)の宵が到来、冬の締め括りにもう一度糸紡ぎ寄せ場(糸紡ぎ部屋)をやるうということになった。なにしろ、「聖燭祭ならお昼には腸詰めをば食べなちや」と諺(ことわざ)にもある。そこで、行つて来ます、と娘が糸繰り車を取り上げた時、母親はこう言ったもの。「ねえ、おまえ、今日はマリア様の日だ。今日は子どもが親に逆らつちやいけない。さもないとすぐ天罰が当たる。だから、おまえ、約束しておくれ。今日はまたまた真夜中過ぎまで帰らないなんてことはしないって。それで真夜中になる前に家に帰るって。それから今日は踊りに行かないって。信用してるよ」。マリーエは母親の言いつけを目に涙を浮かべて約束し、糸繰り車を持つと出て行つた。そしてとても熱心に糸を紡ぎ続けた。ところがやがて若い衆がやって来た。更に前から旅籠屋(はたごや)にプラークの楽士(楽士)が二、三人泊まっついて、これは新機軸(新機軸)だった。どうしたつて楽士連を呼んで来なくつちや、となり、踊りが始まつた。マリーエはおつ母さんとの約束を守つて、帰ろうとしたが、青年たちと娘たちが行かせようとせず、輪舞に加わらねばならなかつた。また楽士たちの笛や提琴(ヴァイオリン)の演奏はおつそろしく上手だった。というしだいで一旦踊り始めると、マリーエは決して止めなかつた。婆(ばあ)さんは長く待つことになつた。なんといつても踊りはマリーエの無上の歓喜の源、至福(至福)だったのだから。かくしてマリーエが考えてもみない内に真夜の刻限が過ぎ、陽気な一座は「糸紡ぎ寄せ場(糸紡ぎ部屋)となつていた」家を後にした。娘たちは音楽附きで家まで

送られることになり、これはちよつとの間だが素晴らしかった。明るい月夜の上森閑としていてこよなく快かった。途中教会墓地の傍を通り掛かると、墓地の門が開きっぱなしになっていた。そこには科リツヂの古木が聳え、木の下は平坦な空き地だった。そこで男の踊り手たちと楽士連は墓地に入り込み、改めて踊りを始めた。女の子らは最初怖がっておずおずしていたが、そのうち半ば無理強いできつつ行つた。最後にはマリーエまでも。さて老母は家で待ちぼうけ、子どものことを心配して泣いていたが、遠くから楽しげなさんざめきが聞こえて来たので、あそこうちのマリーエがいけないわけではないわ、とすぐに考え、仕度をすると、子どもを連れ戻しにあばらやからよろめき出た。するとまあ仰天もし、腹も立ったが、こともあろうに教会墓地で踊り狂っている中に彼女のマリーエがいるではないか。そこで、「あたしに随ついてとつと家に帰るんだよ」と厳しく命じた。ところが娘はこう叫んだ。「あら、おつ母さん、お月様がまだこんなに明るく綺麗に照つてるじゃない。先に行つて、あたし、すぐ帰るから。」——婆さんは萎しなびた両手を天に挙げ、頭にさんばらで垂れ下がった白髪を振り乱し、荒荒しい声音で怒鳴つた。「ああ、おまえのようなやくざな子は明るい月の中にずうつとずうつと坐すわり続けて、あつちでいつまでも忌々しい糸紡シユビンネンコッペルぎ寄せ場をやつてるがいいさ。悪魔と悪魔の祖母ばあ様の名にかけて」。婆さんはこう呪いを吐くなり、ばったり倒れて死んでしまった。マリーエはといえば嘆き悲しむ違いとまもあらばこそ、糸繰り車もろともさあつと月の中へ連れて行かれ、今でもそこに坐つて、考えて、紡いでいる。——月が皓こう皓と輝いている時には、とてもはつきりその姿を見ることが出来る。そして紡いだこの上もなく繊細な糸を彼女は月から下界へ撒き散らす。さよう、糸紡シユビンネンコッペルぎ寄せ場が終わる春の初めと、糸紡シユビンネンコッペルぎ寄せ場が始まつて宵がどんどん長くなる秋に。晴天の日中、風がこの糸をあちこちへ吹き飛ばし、糸はふわふわ空中を漂い、繁しずみから繁みへ、花から花へ、虹の七色に輝きながら巡つて行く。人人はこれをマリーエの糸、マリーエの絹、翔アリアゲぶ夏と呼んでいる。

三三四 アーレントゼー

アーレントゼー^(註)は小さな町で、その名はすぐ傍に渺茫と拡がる湖に拠る。この町ができる前、この大きな湖が誕生する前、この場所には巨城が建っていたが、一夜にしてだれもかれも一緒くたに沈んでしまった。残されたのはアーレントなる男とその妻だけ。彼らは城からかなり離れたところにおいて、沈む光景を目撃したのである。突然ばりばりざあざあという物凄い音を耳にした妻が夫に向かって「アーレント、見て」と叫び、洪水が襲い掛からない内に二人で急いで逃げ延びた。後に彼らは口を揃えて、洪水があつという間に住人もろとも城全体を呑み込んだ、と言明した。どうしてそんなことになったか詳らかでないが、城の住人の徳行に報いるためだったとは考えにくい。命拾いをした夫婦はそれから湖の岸辺を開墾し、だんだんに村を作ったが、この村は妻が夫の名を、それから、見て、と叫んだことからその名が附いた。湖はベルト海峡が氷結する時のみ氷結する。その場合はまず麵麩^{パン}焼き竈^{かまど}のようにもやもやと煙り始め、深部では唸るような轟音が、湖上の空中では聴く者を戦慄させる咆哮^{ほうこう}が響き渡る。太陽が燦燦と照り、しんと静まりかえっている日には時時、沈んだ城の城壁と建物が湖中に見えることがある。かつて何人かが湖の深さを探ろうと思ひ立ち、綱を下ろした。すると突然水中深くで綱がびくびく引かれた。引き揚げてみると、紙片が一枚結びつけてあり、それにヨブ記の章句が記されていた。「なんぢ古昔の世の道を行はんとするや、是あしき人の踐たりしものならずや。彼等は時いまだ至らざるに打絶れ、其根基は大水に押流されたり。」——舟に乗っていてこれを読んだ者たちは震え上がつてもくろみを放棄した。

三三五 教母エメレンツィア

かつてアーレントゼーにはベネディクト派の女子修道院があった。これは貴族の令嬢だけのもので、大層な名声を享受していた。建物は同地に現存し、さまざまな彫刻で飾られた教会も残っている。宗教戦争が初めてドイツに勃発、カトリック教がこの地方で駆逐されつつあった時、この修道院も攻撃・略奪されそうになった。しかし敵の軍司令官は説得されて、女子修道院長には特別配慮して自由退去を認めた。この高貴な女子修道院長はエメレンツィア・フォン・リートドルフといった。自らの自由退去が認められた彼女は、修道院からいくらかのものを安全に持ち出すことも許して欲しい、と更に望んだ。「と申しましても、わたくしの大外衣（コルマツテル 10）で隠れるだけの嵩かさで、それ以上ではありませぬ」と。軍司令官は、このやんごとない女性は豪華な弥撒祭服ミサガキといった法衣ホウイの類を持ち出したがっているのだらう、と推量、躊躇ためらわなかつたわけではないが、この願いを承知した。なにしろそもそも肝要なのは修道院の略奪だったのだから。さて修道院から歩み出た女子修道院長の外衣は体の周りから随分離れてもこもと膨れ上がった。敵方は「このご婦人、認可を拡大行使ちやくだしとるな。まるで駱駝らくだのごとき運搬うんぱんぶりではないか」と心中考えた。——けれど教母エメレンツィアが外衣で覆っていたのは他でもない。外衣の下で十本の足が動いていた。彼女は献身的な母鶏ははどりが雛ひなたちを翼の下に匿かくまうように、修道院会衆の九人の乙女たちを外衣の下に隠していたのだ。乙女たちに危害不法が及ばないように。このことで敬虔な教母エメレンツィアは大いなる誉れを博した。後に外衣で乙女たちを覆っている彼女の彫像が破壊されずに済んだ修道院附属教会の風琴高廊オルガンに置かれた。その上の銘。

我らアーレントゼー処女マリア修道院会衆一同

そしてその下にはこのように。

女子修道院長エメレンツィア・フォン・リートドルフ

アルハイデ・フォン・アイクシユテッテ、

アンナ・フォン・バルデンシユテッテン等等

三三六 オスターブルクの災厄

かつて皇帝ロタール(註)がアルトマルク地方を旅した時、オスターブルク市当局(註)は行幸の榮譽あずかに与りたい、と思い、同輩中から使節団を皇帝の側近諸卿に派遣、皇帝を謹んでご招待申し上げた。皇帝が招待をご嘉納あそばし、おいでくださったのはいいが、おっそろしく沢山の扈從じじゅうも一緒だった。この小都市にしてみればこれほどの数とはてんから予想していなかった。とはいうものの高貴な賓客を慶賀するためにしなければならぬことは、悉く行われ、皇帝は満足した。しかしお伴の連中のいくらかはそうは行かず、祝祭の間喧嘩の火種を探し始め、ある行進で桶屋組合をとりわけ嘲弄した。この組合は醸造鍋一杯の麦酒ビールを運びながら、輪舞を披露したのだが。組合側はこれに気を悪くし、「太い丸太にや太い楔くさびが相応」「無礼な態度には無礼なお返しが当然」と考え、とんとことんこの桶屋流儀で相手方を引っぱたい。叩き合いは殴り合いに、殴り合いは入り乱れての大喧嘩おおげんかに、大喧嘩は戦闘に発

展、この戦闘でオスターブルクの住民のほとんどが斃れ、町も城塞も廢墟と化した。なんとも高くついた行幸だった。

何百年も前のことだが、オスターブルクのある醸造業者の醸造用樽に妖術が掛けられ、ただの一回もうまく醸せなくなつた。こういう類の災難はオスターブルク以外でもまたこの現代においてもかなりの醸造業者に起こるといふことだ。ともかく、良い忠告は高くつく(「うまい知恵はなかなか浮かばない」)し、良い麦酒には大枚をはたかねばならぬ道理。醸造業者はあちこちと対策を相談して廻つたあげく、真正正銘の妖術使いの大先達で、できないことはないし、どんな悪霊だつて逆らえない、というのがシユテンダールにいる、と聞き込んだ。そこでこの靈験あらたかな御仁を呼んだところ、早速やつて来て、この災厄を至極独特な遣り口で浄めに掛かつた。まず摩訶不思議な修法を行い呪文を唱えながら樽を焦がし始めた。それはいいが、この妖術師殿、何か見落としがあつたに違ひない、それとも樽に居坐つていた悪霊の方が用いられた法力より強かつたのか。突然樹脂が樽に燃えつき、樽の火が家に燃え移り、家から通り全体が火事となり、僅か数時間で小さな町オスターブルクの三分の二以上が灰燼に帰した。オスターブルクには全アルトマルク地方で最も高い、巧みを凝らした建築の教会塔があつたが、この塔もこの壊滅的大火の犠牲になつた。かくしてこの浄めの樹脂^{ベツヒ}災厄^{ベツヒ}により醸造樽に潜んでいた妖術はすっかり残らず極めて強力に阻止されたらしい。

三三七 赤い浅瀬^{ロイテ、アラト}

オスターブルクから程遠からぬところで昔血みどろの大会戦が行われた。アスカニア家のアルブレヒトとシユ

ターデ家のフーバーがこの地でアルトマルクの所有権を巡って争ったのである。どちらの側でも夥しい兵が死に、その血が広く大地を赤く染め、クリアという小川も同様だった。その辺りの土はいまだに真つ赤で、この小川はクルンケ村の近くでは今日に至るまで「赤い浅瀬」^{「ロイテ・フルト」}と呼ばれている。

別の伝説によれば赤い大地と赤い浅瀬の由来はこうである。遙か昔、二つの勇ましい小都市オスターブルクとゼーハウゼン——相互にごく近接していて、両市を結ぶ道には村が無い——の間に恐ろしい会戦が行われたのだ、と。この戦いでオスターブルクの指揮官は、町中探しても馬が全く無かったものだから、牡牛に乗って戦場に出た由。ドイツ近傍の「赤い土」についても似たような大会戦の伝承がある。

三三八 同時に二人の妻

テューリンゲンのグライヒエン伯爵が二人妻を持っていた伝説は周知のことだが、この伝説がそのまま訛りとなつて返つたような話がアルトマルク地方にあることはほとんど知られていない。「草地界限」^{「グライダグ・ヴァンシェ」}と呼ばれる地域のアウローゼンにヤーゴウ一族のある殿が住んでいた。彼は極めて敬虔で神を畏敬する人物だったので、こうした心情が命じるまま、故郷と妻子の許を去り、不信の輩——その頃はとりわけトルコ人がこう呼ばれていた——との戦いに赴いた。しかしながらかの地で奴隷とされ、それから、グライヒエン伯爵の伝説が物語ること全てが寸分の違ひもなく彼の身にも生じている。すなわち、虜囚、園丁仕事、高貴なトルコ女性との恋、結婚の約束、逃亡、教皇の特宥、最後に故郷への帰還である。ある年の洗足木曜日のこと、子どもたちと一緒に豌豆と干鰯の食膳に着いていたヤーゴウの奥方は愛しい背の君のことを想っていた。するとその時不意にご当人が素晴らしく麗しい

女人を同伴して彼女の目の前に現れた。さあ、心からの大喜びである。二人の妻は互いに——ドイツと東洋のグライヒェン伯爵夫人と同様——まことに仲の良いお友だちになった。そしてこの親愛の情は——多くの者がそう主張している——両人が死を迎えるまでいかなることがあつても変わらなかつた。今でもなおかのトルコ女性の肖像画がヤーゴウ家の先祖らの中に見られる。さて、無事安泰に帰郷したばかりでなく、以後もずっと「家庭不和無く」無事安泰のままでいられるようになったヤーゴウの殿は嬉しくてならず、洗足木曜日自らを永久に記念して貧民への喜捨を行うことにした。施す食物は豌豆と干鰯だったが、腊肉と麵包をおまけに添えた。以来数千もの貧民がその日そこで十二分に満腹した。トルコ人の奥方は生涯を終えると大ガルト（註）の地下納骨堂に葬られた。彼女の体は木乃伊ミイラになつていて、見る事ができる。かつて同教会の墓碑の一つには騎士（註）「グライヒェン伯爵」の二人妻が並んでいる図が彫られていた。グライヒェン伯爵が二人妻の間に立っている墓碑——エアフルト大聖堂所在——のようになつた。

三三九 乙女ローレンツ

タンガールミュンデ（註）の近くに昔広闊な大森林があつた。これはローレンツなる乙女の所領だつた。森はとても広かつたので、領主である乙女がある日散策に出掛けたところ、道に踏み迷ひ、自分がどこにいるのやらさつぱり分からなくなつた。三日もの間深い森の中を必死で彷徨い歩き、食べるのは草の実たぐひの類、飲むのはそちこちの細流せせらぎの水。なにとぞお助けを、と数多たび天に訴えたのに、二度と再びこの森から出られず、ここで死ななければならぬのか、と思ひ詰めたほど。ところがなんと、乙女が三日目にまたひたむきに祈りを捧げると、牡鹿エルヒのように

大きな枝角を持った二頭の牡角鹿ヒルシユが出現、いとも人懐こげな様子で近づいて来ると、乙女の前で頭を屈め、あれあれという間もなくその巨大な角で彼女を地面から掬すくい上げ、背中に乗せると、ずんずん歩き始め、深い森の中を進みに進んで行ったが、足取りはいかにも優しく、乙女を運ぶのが誇らかな風情だった。そしてとうとう木の繁しげみが多ばらになつて来て、やがて森から出ると、目の前にタンガーマミュンデの幾つもの市門が見えた。こうして乙女ローレンツは無事に我が家に戻れたので、早速誓いを実行した。森のかなりの部分をタンガーマミュンデのニコラウス教会に寄進し、牡角鹿の枝角に乗っている自分の木像を上手に造らせて教会に安置した。この木像を教会がしかと建っている限りいついつまでも保存するように、と指示して。時代の嵐に少なからず損なわれ、変形したにも関わらず、建物は今日に至るまで存在しており、彫像もいまなお見ることができ。教会は施療院になり、その造形装飾は悉ことごとく撤去されたり壊されたりしたが、乙女ローレンツの像だけはそれを免れて生き延びている。乙女自身が人知れずその木像を庇護しているかと思われる。だれかが不逞ふていにも牡角鹿の枝角に何かをぶら下げようとすると、ごろごろと異様な騒音が起こるのだ。グロープレーベン村とベルスドルフ村の間に広がる全地域は乙女ローレンツがかつて教会に寄進したもので、現在でははや森などなく、ずっとローレンツフェルトの野と呼ばれ続けている。

訳注

- (1) ヴァルデック領には im Waldeckischen. ヴァルデック Waldeck は十四世紀以降神聖ローマ帝国の独立伯爵領。一七二二年から一九一八年までヴァルデック＝ビルモンツ侯国 Fürstentum Waldeck-Pyrmont。侯国は二つの部分——かつてのヴァルデック伯爵領(現ヘッセン州北部)と飛び地であるより小さいビルモンツ伯爵領(現ニーダーザクセン州南部)——から構成された。首邑は当初エーダー河畔のヴァルデック城、一六五五年以降アロルゼン(現バート・アロルゼン)。尤も古くはランダウやアイゼンベルクを根拠地とした家系もあった。

- (2) ヴェッター城^{Wetterburg}。現ヘッセン州ヴァルデック＝フランケンベルク郡の保養地バート・アロルゼンの一部ヴェッターブルクに城壁外部の建物(一五七六年建築)が現存。かつて存在した城塞は山城で、ヴァルデック伯ハインリヒ四世によって一三〇六年築かれた。三十年戦争中既に廃墟になった由。
- (3) ヴアルデック伯フィリップ二世 Philip II. Graf zu Waldeck. ヴアルデック＝アイゼンベルク伯フィリップ二世 Philip II. Graf von Waldeck-Eisenberg (一四五三—一五二四)。彼は末弟に生まれ、もともと聖職者になる定めだったが、同名の兄(ヴァルデック伯フィリップ一世)が一四七五年没すると聖職を放棄、まだ幼児だった甥ハインリヒの摂政として伯爵領を支配、一四八六年甥と伯爵領を分割、自分はヴァルデック＝アイゼンベルク伯爵となり、甥はヴァルデック＝ヴィルドゥング伯ハインリヒ八世となる。一四九九年アイゼンベルクで豊かな金鉱脈が発見された。
- (4) マイネツ大司教アルブレヒト Erzbischof Albrecht von Mainz. アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク(一四九〇—一五四五)。ブランデンブルク選帝侯ヨハン・ツィーチェロの第二子。一五二三年二十三歳の若さでマクデブルク大司教。一五二四年——複数の司教職就任を禁ずる教会法に反し——マイネツ大司教(選帝侯でもある)にもなる。一五一八年枢機卿。ドイツにおける免罪符販売(DSB三三三参照)の擁護者かつ最高位の聖職者としてマルティン・ルターの最も重要な敵手。
- (5) 鉄の手の騎士ゲッツ・フォン・ベルリンゲン Ritter Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand. ゴットフリート(=「ゲッツ」・フォン・ベルリンゲン・ツィー・ホルンベルク州)の領主一族の生まれ。一五一七年コンラート・シヨット騎士からホルンベルク城(現バーデン＝ヴュルテンベルク州の小邑ネカーツインメルンにある)を買い取り、居城とした。八十余歳で没したのも(一)。彼の生涯は戦争稼業に終始した、と言えよう。一五〇四年のある戦いで蛇砲(=野戦用蛇砲=長砲身軽量野砲)の砲弾により右手首を失ったが、その後精巧な鉄製の義手を着けた。「鉄の手の」mit der eisernen Handという添え名はこのことによる。ゲーテの戯曲「ゲッツ・フォン・ベルリンゲン」Götz von Berlichingen (1773)の主人公は彼をモデルとしたものだが、英雄化されている。自伝がある。Götz von Berlichingen: Lebensbeschreibung des Ritters Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand. Unveränderter Nachdruck der Ausgabe Nürnberg, Felssecker, 1731. Mit Vorwort von Hans Freiherr von Berlichingen und Heinz-Eugen Schramm. Weidlich-Reprints, Frankfurt am Main 1980. など。邦訳。ゲッツ・フォン・ベルリンゲン著／藤川芳朗訳『鉄腕ゲッツ行状記 ある盗賊騎士の回想録』白水社、二〇〇八年。
- (6) ダールハイム「修道院」Dahleim. パーターホルン領主司教領にあった修道院。この近くでゲッツ一味は伯爵一行を襲った。
- (7) コーブルク Coburg. 現バイエルン州北部オーバーフランケン行政区の歴史ある都市。

- (8) 二十週間に及ぶ拘留 Haft von zwanzig Wochen. 前掲自伝訳注によれば、伯爵は一五一六年四月十一日にゲッツの捕虜となり、解放されたのは同年九月二日。八千グルデンの身代金と四百グルデンの利息の支払いに関して相互が了解に達したのはほぼ一年後の由。ゲッツはこの私闘により生涯で最高額を稼いだ。
- (9) 聖なる結社 die heilige Feme. 中世——十三世紀から十五世紀半ば辺りまで——とりわけヴェストファーレン地方で行われた秘密裁判、あるいはその主体。「フェーメ」Femeとは中世北ドイツ語で「結社」「団体」の意。法の裁きを逃れている、あるいは、そう見做された人物を召喚、一人の秘密裁判長 Freisatz 十二人から七人の秘密陪席判事 Freischöffe から構成された非公開の法廷で裁判し、有罪と決まれば、最寄りの木で絞首刑にした。召喚状を三度まで無視しても有罪とされた。神聖ローマ皇帝カール四世に裁判権を公許された由。実は十九世紀まで存続したらしいが、法律改革が進行した結果、衰退、湮滅した。
- (10) フォルクマールゼン Volkmarzen. 現ヘッセン州ヴァルデック＝フランケンベルク郡の小都市。
- (11) 「葦原に皇帝秘密裁判の畏敬すべき王立法廷」, vñ dem ride die wirdige königliche Dingstatt des kaiserlichen freienstulz. 原文は上記の通り。ride は「葦原」と訳せず「湿地」「開墾地」でもよかるうが、いずれにせよ、市壁外部の人氣のない場所。
- (12) 「真正なる秘密陪席判事らと聖なる秘密檢察官八人」, die echten rechten freischöffen und procuratoren der heiligen heimlichen achte. 原文は上記の通り。
- (13) 騎士道小説『クルト・フォン・デア・ヴェッターブルクあるいは目に見えぬ上長たち』, im Ritterromane: Kurt von der Weterburg oder die unsichtbaren Oberen. 原文は上記の通り。
- (14) ビルモンント Pymont. 現ニーダーザクセン州ハーメルン＝ビルモンント郡の保養地バート・ビルモンント。古代ローマ時代から薬効のある温泉で知られている。かつてのビルモンント伯爵領の首邑。なお同伯爵領は一六二五年ヴァルデック伯爵家に相続された。
- (15) ケルススキ族のヘルマン Hermann der Cherusker. ゲルマン人の一部族ケルススキ族の族長(前一六―後二二)。ローマ側からはアルミニウスと呼ばれた。帝政ローマによるゲルマニアの属領化を阻止した「トイトブルクの戦い」(後九)でゲルマン諸部族の指揮者としてローマの三軍団を完膚無きまでに打ち破った。彼の主導による対ローマ帝国戦はこの後三回あるが、結果としてはローマ軍を撃退した。
- (16) トゥスネルデ Thusnelde. ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、普通「トゥスネルダ」Thusnelda(前一〇頃―後一七・五・二十六以降)。紀元一四年ゲルマニクス指揮するローマ軍のゲルマニア侵攻の際息子共共捕虜となり、ローマへ連行され、再び故郷を見ることはなかった。息子は剣闘士に仕立てられ、闘技場で落命したとのこと。
- (17) ヘッセン谷 Hessenthal. 現在魅力あるハイキング・コースとして推奨されている。

- (18) ペレモント伯爵家 die Grafen von Peremont. 原文は上記の通り。
- (19) アエルツェン Aerzen. 現ニーターザクセン州ハーメルン＝ピルモント郡の町。郡庁所在地ハーメルンと境界を接する。
- (20) 九柱戯遊びをした Kegel geschoben. 「九柱戯遊びをする」Kegel schieben. 九柱戯はボウリング（十柱戯）に似た競技。細長い円錐形の木柱を九本方形（三列）に並べ（後に木柱の形も並べ方も変わった）、これに木製の球を転がしてぶつけ、倒れた木柱の数で得点を競う。W・アーヴィングの短編小説集「スケッチ・ブック」Washington Irving: Sketch Book of Geoffrey Crayon, ca.1820. に収められた一編「リップ・ヴァン・ウィンクル」Rip van Winkle では、主人公のリップが山中で九柱戯をしているオランダ風の古風な服装の男たち（オランダ人開拓者たちの亡霊）と出逢う。
- (21) ゼルクセン Selxen. 現ニーターザクセン州ハーメルン＝ピルモント郡。一九七三年アエルツェンに編入。
- (22) 死人山 Totenberg. 山の名からしても、文脈からしても、これは絞首台など処刑設備のある小高い丘である。
- (23) ハーメルン Hameln. 現ニーターザクセン州ハーメルン＝ピルモント郡の都市。同郡郡庁所在地。ヴェーザー河畔に位する。
- (24) 鼠捕り Rattenfänger. 鼠毒、鼠捕り用に仕込んだテリアなどを使用して民家から鼠を駆除する職業は実際にヨーロッパに存在した。
- (25) その昔マインツ大司教ハットーを追い掛けたように wie vordessen hinter dem Bischof Hatto von Mainz her. DSB六三、DS四二参照。
- (26) 聖なる殉教者ヨハネとパウロの日 am Tage Johannis und Pauli, der heiligen Martyrer. 六月二十六日。ペヒンユタインは一箇月間違えている。
- (27) オスター門 Ostertor. 「＝東門」現ハーメルン旧市街をかつて囲んでいた市壁のほぼ真東に位置していた市門。
- (28) コッペル山 Koppelberg. ハーメルンのオスター門の外にある大きな丘らしいが、現在の地図では見当たらない。識者のご高教を俟つ。
- (29) 太鼓通り Bungen(Trommel)straße. DS二四五では「太鼓無し（調への無い、静粛な）」die bunge-lose (trommel, tonlose, stille) ぶなひつらぬ。
- (30) 「光が漏れないから森」の類の自己撞着だが Lucus a non lucendo. 「ルークス・ア・ノン・ルーケンド」なるラテン語は直訳すると「光luxが射らないから杜lucus」。矛盾した（じつ）け語源説の例。
- (31) キリスト（生誕後一二八四年）ハーメルンにおいて、マリアに生を受けし／子ら百余り三十人、ある笛吹きに連れ去られ、／ケツペンの山下へと消え失せたり。 Im jar 1284 na Christi gebort / tho Hamel worden uhtgewort / hundred vnd dirczig kinder, dosilvest geborn, / dorch enen piper vnter den köppen verorn. 原文は上記の通り。

- (32) ラテン語で石に刻み込まれた *lateinisch in Stein geschrieben*. DS二四五によれば以下の通り。「百三十人の子どもらを魔法使いの市から連れ出せしより、二百七十二年の後の門は築かれたり」*Centum ter denos cum magus ab urbe pueros / duxerat ante annos CCLXXII condita porta fuit.*
- (33) ジーベンビュールケン *Siebenbürgen*. ラテン語で「トランシルヴァニア」*Transsilvania* (森の彼方の地) に同じ。現ルーマニアの中央部・北西部に当たる地域の歴史的名称。
宮廷使丁、宮廷飛脚 *Kammerknechte, Kammerboten*. 「宮廷使丁」なる用語はDS四六六に出る。注参照。
ヘクスター *Höxter*. 現ホルトライン＝ヴェストファーレン州の都市。
- (36) ファイト聖者 *der heilige Veit*. 「聖ウイトゥス」*St. Vitus* に同じ。初期キリスト教殉教者。とりわけ十三、四世紀に尊崇され、十四救難聖人の一人に数えられた。ローマ皇帝ディオクレティアヌス(在位二八四―三〇五)時代にキリスト教徒として投獄され、ライオンの前に投げ出され、ライオンが何の危害も加えようとしないので、拷問台に架けられたが、大風が起って解放された、という少年。祝日は六月十五日。
- (37) 肥満期 *Fiszeit*. 交尾期を前に控えた時期。しかし「肥満期直前」は「交尾期直前」の誤りであろう。「交尾期直前」なら、牡角鹿はたっぷり食べて肥満しており、恋思いで寝れていないわけ。
カンネ *Kanne*. ショッキ。あるいは昔の液量単位(約一リットル)。
がりがりの瘦せこぼせ *Schmalhans*. „Schmalhans ist Küchenmeister.“ (がりがりの瘦せこぼせが料理番頭) とは「喰うや喰わずの暮らしてある」「飢餓状態である」の意の慣用句。DSB二二三にも出る。
リューベック大聖堂で死を予告する薔薇と僧ラプントゥスの一身に起つたこと *Was sich im Dome zu Lübeck zugegetragen mit den voraussagenden Todesrosen und dem Mönche Rabundus*. DS B二〇八参照。
- (41) アメルンクセン *Amelnuxen*. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州ヘクスター郡の都市ベーヴェルンゲンの一部。ヘクスターの南西ほぼ七キロ。
- (43) オットベルゲン *Otbergen*. 現在ヘクスターに属する村。
- (44) ヴェーレン *Wehren*. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州リップペ郡ホルン＝バート・マインベルクの一部を成す小集落。
- (45) オッテンベルゲン *Ottenbergen*. 前出「オットベルゲン」*Otbergen*。
- (46) これは最初の紙幣だったのだけだね *Es war das erste Papiergeld*. ≪ビシユタインのふざけた解釈である。元来の伝説では、大

事な呪具である花束を置き去りにしたので、宝物は紙屑と化してしまった、というだけのこと。

ダッセル *Dassel* 現ニーダーザクセン州南部ノルトハイム郡の小都市。ゾリング山地北東縁に位置する。

(48)(47) ロイトホルスト *Leuthorst* 現ニーダーザクセン州南部ノルトハイム郡の村リュートホルスト *Lithorst*。一九七四年以降ダッセルの市街区。

ポルテンハーゲン *Portenhagen* かつては小村。現在ダッセルの一部。

コーエンハウゼン *Coenhäusen* 未詳。

(51)(50)(49) シラーの鐘の詩 *Schillers Gedicht von der Glocke*。F・シラー「鐘の歌」*Friedrich Schiller: Das Lied von der Glocke*。1799。を指す。ただし、次注にあるようなラテン語はこの詩には見当たらない。

(52) 我は招く、生ける者を、／我は悼む、死せる者を、／我は祓う、稲妻を。 *Vivos voco, mortuos plango, fulgura frango*。原文は上記の通り。中世ヨーロッパの教会の鐘にしばしば見られる銘である。最後の章句は、落雷の多かつた鐘楼がそうした災いに遭わないように、との願いであろう。

(54)(53) ブラーケル *Brakel* 現ニーダーザクセン州東部ヘクスター郡の都市。

ヒューネン、ホイネン、あるいはリーゼンと呼ばれる巨人たち *Hünen, Heunen oder Riesen*。ヒューネン、ホイネンの同義語には「フンネン」*Hunnen*もある。これは三七〇年頃ヴォルガ河の彼方から出現してヨーロッパになだれこみ、パンノニア(現ハンガリア)を根拠地として、短期間だがドイツ、バルト海沿岸にまで及ぶ大帝國を築いたフン族(帝國最盛期の王がアッティラ)をも指す。フン族はトルコ・モンゴル系の遊牧民族集団だが、その一部は、ヨーロッパ史に記された時日より三〇〇年ほど前、後漢との戦いに敗れ、西方へ姿を消した北匈奴の末裔だったかも知れない(より詳しくはDSB一〇四注参照)。いずれにせよ兇悍な蛮族に対する記憶がドイツの地で巨人伝説と結び付いた可能性はある。

(55) リューネブルク *Lüneburg* 曠野 *Heide*。「ハイデ」の綴りは現在 *Heide*。現ニーダーザクセン州北東部に広がる荒地。森林伐採のため土地が涸渇、僅かな灌木しか生えていない。八月上旬にはエリカが赤紫の花を咲かせるため、現代では多くの観光客が訪れる。

ゲース地域 *Geesgegend*。北西ドイツ沿海部の高燥不毛な土地を「ゲーストラント」*Geestland*というが、これの誤記か。

リンゲン *Lingen* 伯爵領 *Niedergrafschaft Lingen*。DSB二五八注参照。

ビュルツェンベット *Bützenbett*。北ドイツ方言でブルメン、すなわち巨人墳墓を「ブルテンベット」*Buldenbett*と称する。「ブルト」*Bult*「ブルチ」*Bulte*「ブルルチ」*Bülle*とは草の生えた小丘のこと。

(58)(57)(56) リューネブルク *Lüneburg* 曠野 *Heide*。「ハイデ」の綴りは現在 *Heide*。現ニーダーザクセン州北東部に広がる荒地。森林伐採のため土地が涸渇、僅かな灌木しか生えていない。八月上旬にはエリカが赤紫の花を咲かせるため、現代では多くの観光客が訪れる。

ゲース地域 *Geesgegend*。北西ドイツ沿海部の高燥不毛な土地を「ゲーストラント」*Geestland*というが、これの誤記か。

リンゲン *Lingen* 伯爵領 *Niedergrafschaft Lingen*。DSB二五八注参照。

ビュルツェンベット *Bützenbett*。北ドイツ方言でブルメン、すなわち巨人墳墓を「ブルテンベット」*Buldenbett*と称する。「ブルト」*Bult*「ブルチ」*Bulte*「ブルルチ」*Bülle*とは草の生えた小丘のこと。

(58)(57)(56) リューネブルク *Lüneburg* 曠野 *Heide*。「ハイデ」の綴りは現在 *Heide*。現ニーダーザクセン州北東部に広がる荒地。森林伐採のため土地が涸渇、僅かな灌木しか生えていない。八月上旬にはエリカが赤紫の花を咲かせるため、現代では多くの観光客が訪れる。

ゲース地域 *Geesgegend*。北西ドイツ沿海部の高燥不毛な土地を「ゲーストラント」*Geestland*というが、これの誤記か。

リンゲン *Lingen* 伯爵領 *Niedergrafschaft Lingen*。DSB二五八注参照。

ビュルツェンベット *Bützenbett*。北ドイツ方言でブルメン、すなわち巨人墳墓を「ブルテンベット」*Buldenbett*と称する。「ブルト」*Bult*「ブルチ」*Bulte*「ブルルチ」*Bülle*とは草の生えた小丘のこと。

(58)(57)(56) リューネブルク *Lüneburg* 曠野 *Heide*。「ハイデ」の綴りは現在 *Heide*。現ニーダーザクセン州北東部に広がる荒地。森林伐採のため土地が涸渇、僅かな灌木しか生えていない。八月上旬にはエリカが赤紫の花を咲かせるため、現代では多くの観光客が訪れる。

ゲース地域 *Geesgegend*。北西ドイツ沿海部の高燥不毛な土地を「ゲーストラント」*Geestland*というが、これの誤記か。

リンゲン *Lingen* 伯爵領 *Niedergrafschaft Lingen*。DSB二五八注参照。

ビュルツェンベット *Bützenbett*。北ドイツ方言でブルメン、すなわち巨人墳墓を「ブルテンベット」*Buldenbett*と称する。「ブルト」*Bult*「ブルチ」*Bulte*「ブルルチ」*Bülle*とは草の生えた小丘のこと。

(58)(57)(56) リューネブルク *Lüneburg* 曠野 *Heide*。「ハイデ」の綴りは現在 *Heide*。現ニーダーザクセン州北東部に広がる荒地。森林伐採のため土地が涸渇、僅かな灌木しか生えていない。八月上旬にはエリカが赤紫の花を咲かせるため、現代では多くの観光客が訪れる。

ゲース地域 *Geesgegend*。北西ドイツ沿海部の高燥不毛な土地を「ゲーストラント」*Geestland*というが、これの誤記か。

リンゲン *Lingen* 伯爵領 *Niedergrafschaft Lingen*。DSB二五八注参照。

ビュルツェンベット *Bützenbett*。北ドイツ方言でブルメン、すなわち巨人墳墓を「ブルテンベット」*Buldenbett*と称する。「ブルト」*Bult*「ブルチ」*Bulte*「ブルルチ」*Bülle*とは草の生えた小丘のこと。

- (59) ランメルスロー Rammelsloh. ハンブルク南方三〇キロ、リューネブルガー・ハイデ北部にあった村ラーメルスロー Rammelsloh。中世ここに聖堂が建立された。現ニーダーザクセン州ハールブルク郡の都市ゼーフエタールの一部。
- (60) エッツェル王 König Ezel. 『ニーベルンゲンの歌』でジークフリートの妻だったクリームヒルトの二度目の夫となるこの王は、フン族の王アッテイヤ(四〇六—四五三)のこととされる。エッツェルは不意ながら妃クリームヒルトの復讐に追隨し、フン族の戦士らは招待客であるブルグント王グンテル(クリームヒルトの兄)の扈從の騎士たちを殺す。エッツェル王の許に身を寄せたベルンのディートリヒも家臣等と共にやむなくこの闘いに参加し、自他共に夥しい犠牲者を出す。四〇〇年以降ライン河畔中部に存在したブルグント族の王国を、西ローマ帝国の軍司令官アエティウスの指図でフン族の補助部隊が四三六年に滅ぼしたが、そのため——これとは関係ない——フン族の王アッテイヤがドイツ英雄伝説の主要人物となったようだ。
- (61) アーメルンゲ一族 Amelungen. 「アーメルンゲの人人」とも邦訳される。ドイツ英雄伝説の主要人物東ゴート王ベルンのディートリヒとその家臣たちのこと。「アーメラ」Analer は東ゴート族の王族名。
- (62) ブラウンシュヴァイク地方 Land Braunschweig. 現ニーダーザクセン州南東部。ほぼかつてのブラウンシュヴァイク公国の中核に当たる。首邑はブラウンシュヴァイク市。ティル・オイレンシュピーゲルやハインリヒ獅子公に纏わる伝説の舞台。なおブラウンシュヴァイクの起源についての伝説はDSB一五五にある。
- (63) ヒッツアッカー Hitzacker. 現ニーダーザクセン州リュッホーダンネンベルク郡の町。エルベ河畔に位置する。三千年以上前から人が定住。八世紀にはスラヴ族が現旧市街を見下ろす葡萄酒の上に城塞を築いている。元来重要な交易地として発達、やがて町が建設された模様である。
- (64) アーヘンのハインツヒェン Heinzchen zu Aachen. DSB一二八参照。
- (65) ドステンとドラント Dosten und Dorant. ドステンは学名オリガナム・ウルガレ *origanum vulgare*。花薄荷(オレガノあるいはマヨナラ)ないし瑠璃蒿(ポリシ)。ドラントは学名マルビウム・ウルガレ *marrubium vulgare*。西洋鋸草(ヤロウ)。この二種の香草は男の水の精(ニクス、ヴァッサマン)を祓うのに卓効があるとしてDS六六五で語られている。
- (66) ヨハネ祭の夜 Johannisnacht. 洗礼者聖ヨハネの祝祭日(六月二十四日)の前夜。
- (67) リュッホ Luchow. 現ニーダーザクセン州北東部南ヴェンドラントにあり、リュッホーダンネンベルク郡郡庁所在地。かつてこの町を首邑としたリュッホ伯爵領は一二三〇年ブラウンシュヴァイクリュューネブルク家の所有に帰した。中世後期の城塞の遺構としては塔が一つ残るだけで、これは教会の鐘楼となっている。
- (68) エリカ Heide. 現在の綴りは Heide。躑躅科エリカ属。七〇〇種以上の属がある。英国のヒース heath。ドイツではリュューネ

- (69) ルガー・ハイデ、英国ではデヴォン州南部に拡がるダートムーアが群生地として有名。
 嘆き女 *Klageweib*、恐ろしい悲嘆の声を挙げて家人の死を予告する妖精としては、アイルランド、スコットランド——すなわちケルト人居住地——の伝説登場形態「パンシー」*bansee*（泣き女）が有名。
- (70) リューネブルク *Lüneburg*、現ニーダーザクセン州の中心都市。保養地。ハンブルク南東五〇キロに位置し、ハンブルク大都市圏に属する。かつてハンザ同盟の一員。また岩塩採掘でも繁栄、運河とイルメナウ川を利用してハンブルクへ送り出していた。ブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公国の二つの重要都市ブラウンシュヴァイクとリューネブルクの二つ。
- (71) ズルツェ *Sülze*、普通名詞としては「塩水」「岩塩坑」の意。
- (72) アーヘンのポネレン塔 *Ponellenhurm zu Aachen*、D S B 一一一参照。
- (73) バルデヴィック *Bardewick*、現ニーダーザクセン州リューネブルクの町バルドヴィック *Bardowick*。ザクセン公ハインリヒ獅子公の支配下にあったが、公がフリードリヒ赤髭帝に反抗、その報復として皇帝から三年間英国へ追放され、ブラウンシュヴァイクとリューネブルク周辺の僅かな所領以外は取り上げられた折、公に見棄てられたと思ったこの都市は、この追放の途次、公を迎え入れることを拒否した。一一八九年ザクセンに帰還したハインリヒ獅子公は十月二十六日バルドヴィックを包囲、最初は失敗に終わるかと思われたが、二十八日（二十九日との説もあり）攻撃が成功、公は教会と禮拜堂を除き全市を破壊した。
- (74) *haben den Herzog von der Mauer herunter einen nackten Spiegel sehen, zum Schimpf und Hohn*、「ある者に鏡を突きつける」*im den Spiegel vorhalten*なる慣用句は「ある者にその者も人間の弱みに捉われていることを指摘する」の意。バルドヴィック市民はハインリヒ公を、落ちぶれた身の程を知れ、と侮辱したのか。そして公は、自分の真の恐ろしさを見せつけてやろう、と誓ったものか。
- (75) プレーメン *Bremen*、ヴェザー河畔の定住地・渡し場としての歴史は古く、紀元前一五〇年のアレクサンドリアの地理学者もこれに触れている。カール大帝により七八七年司教座とされ、八四五年大司教座に昇格。一一八六年神聖ローマ帝国都市となったが、帝国直属ではなかった。一二六〇年ハンザ同盟に加入したが、同盟内におけるその地位はしばしば不安定だった。しかしやがて充分な経済的重要性を獲得したプレーメンはプレーメン大司教の世俗的支配から脱却、市の立つ広場（中央広場）に一一四〇四年ローラント像を立て、一四〇九年市庁舎を建設した。現在自由ハンザ都市プレーメン州の州都であり、ドイツで十番目の大都市。
- (76) ローラント柱 *Rolandsäule*、プレーメン旧市街の中心である中央広場に面して旧市庁舎があるが、その正面に盾を左肩に吊り、右手に抜き身の剣を持つ英雄ローラント（中世英雄伝説によれば、カール大帝＝シャルルマーニュの甥でその十二臣将の一人）の巨大な石像が立っている。これはプレーメン市の自由と独立の象徴である。かつては木造でプレーメン大司教によって焼かれたが、

- 一四〇四年石造りで再建された。周囲の封建諸侯の支配から脱して神聖ローマ帝国直属都市になった諸都市には、今日なおその市の立つ広場にローラント像ない類似の像を持つものが少なくない。
- (77) 我のここに汝らに示す自由は、まことカールが諸侯をまじえずして、この都市に与えしものなり。我は勸む、汝らこれを神に感謝せんことを。 Freiheit do ich ju openbar / Da Carl vn manning fürst vorwar / Deser stadt gegeben hat / Deß danket Got ist min Rath. 原文は上記の通り。
- (78) レスモン家のある女伯 eine Gräfin von Lesmon. 「レスモン伯爵家」は未詳。ザクセンの名門貴族ビルングBillungないしビリングBiling 伯爵家のことか。
- (79) こくく足の悪い不具者が、こくく這いずって来て kroch ein äußerst lahmer Krüppel heran. この男は車輪の附いた箱に坐り、両手を使って移動することができたのである。ために上半身と両腕は力強く発達していたわけ。
- (80) オルデンブルク伯マルティン Graf Martin von Oldenburg. 未詳。オルデンブルク伯爵領はニーダーライン＝ヴェストファーレン地域にあった神聖ローマ帝国の領邦の一つ。オルデンブルク家はザクセン公ハインリヒ獅子公の封臣だったが、公の権勢がフリードリヒ赤髭帝によって失墜したのを利して独立を達成した。
- (81) 皇帝ルートヴィヒ敬虔王 Kaiser Ludwig der Fromme. カール大帝のシャルルマーニュの第三子。兄二人が早世したため単独の相続者となった。フランク王国カロリング朝国王(在位八一四—四〇)、西ローマ皇帝(在位八一四—四〇)。フランス語ではルイ敬虔王 Louis le Pieux Ⅱルイ一世。DSB 一一九参照。
- (82) エルツェ Elze. 現ニーダーザクセン州南部ハノーファー＝ブラウンシュヴァイク＝ゲッティンゲン大都市圏に属す。ヒルデスハイム郡西部の大きな町。
- (83) ヒルデスハイム Hildesheim. 現ニーダーザクセン州南部の大都市。八〇〇年頃カール大帝がオストファーレンを管轄する司教座をエルツェに置いたが、八一五年その子息ルートヴィヒ敬虔王によって現在のヒルデスハイムの地に司教座が移され、聖母マリアに奉献される聖堂が建立された。
- (84) 聖金曜日 Charfreitag. Karfreitag. 復活祭直前の金曜日でキリスト受難記念日。
- (85) 聖週間 Charwoche. Karwoche. 復活祭直前の一週間。キリスト受難週。
- (86) ベルンハルト司教 Bischof Bernhard. ベルンハルト一世(在位一一三〇—五八)。
- (87) ヒンツェルマン Hinzemann. DSB 二七五参照。
- (88) ヘーデケン Hödeken. 「小さい帽子」くらの意。ニーダーザクセンの訛。

- (89) ヴィンツェンブルク伯ヘルマン Graf Hermann von Winzenburg ヴィンツェンブルク伯ヘルマン二世。一一五二年一月二十九日の夜、その専横な振る舞いを憎んでいたヒルデスハイム司教区の下級貴族らがヴィンツェン城に乱入、ヘルマンと身籠もっていたその夫人を剣で殺した。殺人者の一人は一一五六年斬首され、もう一人、ヘルマンの隣人ボーデンブルク伯ハインリヒは神明裁判の決闘で敗れ、ハレのノイブルク修道院に入った。
- (90) 月桂樹の葉と一初、それから劍菖蒲 Lorbeerlaub, Siegwurz und Allemansharisch. 月桂冠は言わずと知れた勝利の象徴。また、ドイツ語の次の二つの植物名は本来同じものだが、直訳すれば「勝利の根っこ」「諸人の鎧」で、その刀剣に似た葉の形から——日本でもそうだが——勝負強さを約束してくれる、と考えられた。
- (91) ザクセンの往古の神イルミンの柱像 des alten Sachsengottes Irmin Bildsäule. ザクセン族が崇めた聖柱「イルミンスール」Imminsauのこと。七七年フランク族はザクセンに侵入、聖柱を数数破壊したので、いわゆるザクセン戦争が始まった。ザクセン族の首長ヴィッテキント(DSB一六二参照)は七七年から七八五年までカール大帝に対するザクセン族の抗戦を指揮した。ザクセン族は結局軍事的に優位に立つフランク族に降服、現ドイツ北西部はカロリング朝フランク王国に併合され、キリスト教化された。
- (92) ヘルマン、すなわち神のように尊崇されたドイツの解放者 Hermann, der Befreier Deutschlands, dem göttliche Verehrung zu Theil geworden. 帝政ローマによるゲルマニアの属領化を阻止した「トイトブルクの戦い」(紀元九)でゲルマン諸部族の指揮者としてローマの三箇軍団を完膚無きまでに打ち破ったケルススキ族の族長。DSB二九一注参照。
- (93) ブラウンシュヴァイク邦の君主ハインリヒ公 Herzog Heinrich, der Herr der Braunschweiger Lande. ザクセン公ハインリヒ三世(在位一一四二—一八〇)にしてバイエルン公ハインリヒ十二世(在位一一五六—一八〇)だったハインリヒ獅子公(一一二九—九五)。父母および父母の両親から広大な領土を継承、また自身の軍略によってこれを維持・拡大した。ミュンヒェン、リューベック、シュターデ、リューネブルク、ブラウンシュヴァイクを建設したのは彼である。最盛時にはドイツにおける最も強大な領邦君主だった。長年従兄である神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世(赤髭帝)を支持していたが、一一七四年フリードリヒが再開した北イタリアのロンバルディア都市同盟との戦争に、強い要請があったにも関わらず、兵を送らなかったため、皇帝の逆鱗を買ひ、皇帝は一一八〇年ハインリヒに追放刑を宣告、一一八一年ザクセンに侵入、その軍を撃破した。降服したハインリヒは一一八二年以降三年間ドイツから追放されたが、許可が下りない内一一八五年ドイツに帰ったため、一一八八年再度追放された。妻のマティルダ(イングランド王ヘンリー二世の息女)は一一八九年死去。一一八九年フリードリヒが第三次十字軍のため出征した留守にハインリヒはザクセンに帰還、自らに忠実な兵を率いてバルドヴィックを包囲、教会以外を全て瓦礫に化さしめた。一一九四年フリードリヒ

- と和解、周辺の領土をかなり削られたブラウンシュヴァイクに戻り、一一九五年ブラウンシュヴァイク公として死去。なお、一一六六年彼はブラウンシュヴァイクで青銅のライオン像を作らせ、同市の城塞であるタンクヴァルデ城の中庭に置いた。
- こういう話もある。公爵が聖地へ巡礼した折、乗船が難破したため、アフリカ海岸に漂着した。曠野の洞窟に入ったところ、ライオンが一頭いたが、これは左後足に棘を刺して、ひどく苦しんでいた。公爵が棘を抜いてやると、ライオンはこれを大いに恩に、狩りの獲物を公爵に提供し、一人と一頭は仲良く暮らした。やがて公爵は魔物と契約して領国へ連れ戻してもらったが、飼犬同然に懐いたライオンも一緒だった。公妃は、夫は死んだ、と思い、再婚しようとしていたが、公爵はその婚札寸前に帰着、ライオンとともに式典を流血の場に変えて阻止した。詳しくは、J・K・A・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』所収「メレクザラ」*Meleksla* > Johann Karl August Müsüs: *Volksmärchen der Deutschen*. 1782-86. (邦訳。鈴木満訳『メレクザラ』ドイツ人の民話『国書刊行会』平成十九年) 参照。
- (94) 獅子身鷲頭鳥 Vogel Greif. 獅子身鷲頭鷲翼の伝説の怪鳥。ギリシア神話には登場していないが、ヘロドトスの『歴史』やプリニウスの『博物誌』では既に言及されている。
- (95) ブラウンシュヴァイク産ムンメ Braunschweiger Mumme. ブラウンシュヴァイク特産のビール。起源は中世後期にまで遡る。既に古くから五種類も製法があったが、全てに共通している特徴は、色は黒褐色、麦芽の含有量が多く、粘りけがあることである。すなわち甘くて強い黒ビール。
- (96) ハルバーシュタット Halberstadt. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡郡庁所在地の都市。
- (97) コルベック村 Dorf Kolbeck. 未詳。
- (98) 深夜弥撒 Christmette. 十二月二十四日から二十五日の夜に掛けて行われるミサ。もとより司祭と敬虔な信徒にとつて極めて大切なミサである。
- (99) 聖マグヌス St. Magnus. 八世紀フュッセンの隠者だったマグヌスカ。バイエルンのフュッセンに十九世紀初頭まであった 聖マング修道院の伝承ではこの聖人が修道院の建立者にして初代院長とされている。
- (100) ダルデスハイム Dardesheim. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡オスターヴィーク市の一部。
- (101) クリュッペル Krüppel. 「身体障害者」(原義「体の曲がった人」)の意。
- (102) 隠れ頭巾 Nebelkappe. 元来中高ドイツ語で「姿を隠してくれる頭巾付き外套」。ゲルマンや北欧の昔話に登場し、小人やトロールが纏う。「タルンカッヅ」Tarnkappe とす。
- (103) クヴェードリンブルク Quedlinburg. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の都市。ハルバーシュタットの南南東、ハールツ山

- 地の北東、ポーデ河畔の極めて古い都市。
- (104) ターレ Thale. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の都市。ハールツ山地の険しい北東縁にある。ここでポーデ河谷クイールが始まる。
- (105) ブランケンブルク Blankenburg. 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡の都市。
- (106) きらまの背中に「ひびく」金を降らす mit harter Münze auf seinen Rücken. mit grober (=harter) Münze zahlen. はあまり一般的ではないが、「あるひとをひどい目に遭わす」くらいの慣用句。
- (107) ヴォルフエンビュッテル Wolfenbüttel. 現ニーダーザクセン州ヴォルフエンビュッテル郡郡庁所在地の小都市。
- (108) アルトマルク Altmärk. 現ザクセン＝アンハルト州北部の地域。
- (109) ドレームリング Drömling. 現ニーダーザクセン州と現ザクセン＝アンハルト州に掛けて広がるほぼ三四〇平方キロで住民過疎の自然公園。僅かな叢林と村落が散らばっている広漠たる草原と湿地。
- (110) 『魔弾の射手』 Freischütz. カール・マリア・フォン・ヴェーバー作曲のオペラ。初演一八二二年ベルリン王立劇場。
- (111) 狼谷 Wolfschlucht. 『魔弾の射手』で主人公マックスが悪魔と契約し、魔弾を鑄造する場所。一般名詞としては「物凄い峡谷」。
- (112) 武装者の「うんぐ」 wie ein gewappneter Mann. 原文は上記の通り。意味不明。識者の「高教を俟つ」。
- (113) 川鯰 Hecht. 川鯰目川鯰科川鯰属。アラスカ、カナダ、北米、アメリカ中部、ユーラシア大陸ではヨーロッパからシベリアにかけて棲息する北川鯰は最大で二メートルにも達する。肉食。巨口で大きな獲物も丸呑みにできる。鋭い歯を持つ。英語pike。ロシア語シチューカ。「養鯉池の中の川鯰」ein Hecht im Karpenteich は「羊の群れの中の狼」の意の慣用句。
- (114) 一ツェントナー ein Zentner. 現在一〇〇ポンド＝五〇キログラム。
- (115) エーゲルン Egelin. 現ザクセン＝アンハルト州ザルツラント郡にある歴史ある町。尖塔を持つ古城エーゲルン城が今も残っていて、エーゲルン郷土博物館とレストランになっている。
- (116) エッゲンシユェット Egenstädt. Egenstedt. 現ザクセン＝アンハルト州ベルデ郡の小村だったが、二〇一〇年以降ヴァンツレーベン・ベルデ市に編入。
- (117) 牧杖 Schippe. 「シックス」Schippeとは普通「シヤベル」「スコップ」のことだが、スコップ状の先端が附いた牧人の杖をもういう。フジでは後者。
- (118) 人狼 Wärfwolf. 現在の綴りは、Wewolf (人+狼)。DSB二四四本文および注参照。
- (119) クロツペンシユェット Croppenstädt. 現在の綴りは Kroppenstedt. 現ザクセン＝アンハルト州ベルデ郡の小さい町。マクデブルクとハルバーシユェットを結ぶ街道沿いにある。

- (120) 善えあれば殿様 *Vorrat ist Herr.* この諺は D S B 二一九に既出。
- (121) 皇帝ハインリヒ三世 *Kaiser Heinrich III.* ザーリアー朝第二代ドイツ王(在位一〇三九—一〇五六)・神聖ローマ皇帝(在位一〇四六—一〇五六)。初婚で儲けた一女ベアトリクス(一〇三七—一〇六一)はクヴェードリンブルク修道院長。再婚で息女としてはアーデルハイト(ガンデルスハイム修道院長)、ギーゼラ(夭折)、マティルダ(シュヴァーベン大公にして後の対立ドイツ王ルードルフ・フォン・ラインフェルデンと結婚)、ユードイト(初婚でハンガリア王シャヤモンの妃。王に死別した後ポーランド公ヴワディスワフ一世ヘルマンと再婚)を儲ける。ハインリヒ四世の父。さて残念ながらクヴェードリンブルク修道院に入ったハインリヒ三世の息女の名はマティルデではなくてベアトリクス。クヴェードリンブルク修道院を建立したのは確かにマティルデ(九五—九九)だが、これはザーリアー朝の前、ザクセン朝第二代東フランク王・初代神聖ローマ皇帝オットー一世(大帝)の息女である。
- (122) マクデブルク *Magdeburg.* 現ザクセン州ハルト州州都。エルベ河畔の大都市。低地ドイツ語ではマイデボルク *Meiðeborg*。八〇五年既に文書に名が出る。この都市の象徴は聖マウリティウス・カタリーナ大聖堂(ドイツ最古のゴシック建築。一二〇七年建築開始、一三六三年奉獻。オットー大帝の奥津城がある)。初代神聖ローマ皇帝オットー一世(大帝)により九六八年マクデブルク大司教区が置かれ、スラヴ人のキリスト教化が進行した。以来大司教のお膝元として、またハンザ同盟都市として繁栄したが、一五二四年ルターの宗教改革に賛同、ルター派プロテスタント都市となる。約一世紀後三十年戦争が荒れ狂うようになると、市はカトリック教会を護持する神聖ローマ皇帝側と対峙、しばしば戦禍を被った。
- (123) 皇帝像は片手に十九箇の黄金を被せた小樽から成る丸い環を持っている。 *Das eine Kaiserbildnis hält einen runden Reif in der Hand, der aus neunzehn kleinen vergoldeten Tönchen gebildet ist.* 因みにマクデブルクの紋章は門扉が黄色で、赤く塗られた市門塔の上に緑の長衣を纏った女性が左手を腰に当て、右手に緑の環を掲げて立つ図である。
- (124) グライヒェン伯爵 *Grafen von Gleichen.* グライヒェン伯爵家は元来ザクセンの貴族で、後にテューリンゲンへ追われ、この地で繁栄したようである。二人妻を持ったテューリンゲンのグライヒェン伯爵の伝説については D S B 三三八注を参照のこと。
- (125) メックレンブルク公ゲオルク *Herzog Georg von Mecklenburg.* メックレンブルク公アルブレヒト七世の第三子(一五二八—一五二九)。ザクセン選帝侯モーリッツ(後にカール五世に背いてフランス王国に通じ、カール五世の重要な敵手となる)と共にマクデブルクを包囲(一五五〇年九月一六日から一五五一年十一月九日まで継続)したが、まだ一五五〇年中マクデブルク軍出撃の際虜囚の身となり、同市降服後漸く釈放された。のちフランクフルト・アム・マイン攻囲戦の折砲弾に右脚をがれ、この傷のため即日死去。
- (126) マウリティウス聖者の日に *am Tage des heiligen Mauritius.* 九月二十二日。マウリティウス(モーリッツ)聖者はいわゆるテ-

へ軍団(DSB九一参照)の指揮官。

(127) 市民の親方連 *die Bürgermeister*. *Bürgermeister* とは「市長」である。しかし、ここでは複数形になっている。市長が複数いるわけではない。そこでマクデブルク市のお歴歴であり、市民軍が編成されれば隊長株になりそうな各種職能別組合の親方たちと考えた。訳の可否について識者のご高教を俟つ。

一三五〇年 1350. 故事不明。識者のご高教を俟つ。

(129) (128) 戦争動物園 *Kriegsmenagerie*. ベヒシュタインのおふざけである。中・近世ヨーロッパの大砲には鷹、蛇、バジリスクなど現実ないし想像上の動物の名を附けられていることが多かったものでこう言ったもの。

(130) マクデブルク勢の損失は死者千二百、捕虜三百、野戦用蛇砲(＝長砲身野砲)十一門およびその他の戦争動物園だった。市民兵小旗部隊の十一旗の軍旗もまたしかり *Die Magdeburger verloren zweihundert Tode und dreihundert Gefangene, und elf Stück Feldschlangen und sonstige Kriegsmenagerie, auch elf Bürgerfählein*. 最後の部分 *auch elf Bürgerfählein* の訳は類推である。他の伝説の記事によれば以下の通り。「半時間後彼らは完敗した。千二百の死者と三百の捕虜を失い、十一門の野戦用蛇砲と市民兵小旗部隊の十一旗の軍旗も敵手に落ちた」14. *Der Warner vor der Schlacht, und die Magdeburger Taufe*. > *Jodocus Deodatus Hubertus Temme: Die Volkssagen der Almark. Mit einem Anhange von Sagen aus den übrigen Marken und aus dem Magdeburgischen*. 訳者は「Fähnlein」を「小旗部隊」と訳して来た。これは小回りの利く戦闘単位で兵数四百ほど(三百から六百との説もある)の部隊である。しかし、この伝説でも参考に引用した伝説でも、そうした部隊ではなく、その軍旗と考えないと意味不通になってしまう。

(131) マクデブルクはカール皇帝とその命を奉じたザクセン選帝侯モーリッツに厳しく攻囲されもした *Magdeburg von Kaiser Karl und in dessen Auftrag vom Kurfürsten Moritz zu Sachsen hart belagert wurde*. 神聖ローマ皇帝カール五世がマクデブルク攻囲戦に失敗したことはDSB八五の中であらりと触れられている。

(132) ティーリ^{テューリ}麾下の軍兵によるまたしても破壊が間近である *die unter Tilly nahende abermalige Zerstörung*. 三十年戦争中神聖ローマ皇帝軍軍司令官だった傭兵隊長ティーリ^{テューリ}伯ヨハン・セルクラエス(一五五九—一六三二)による半年に亘る攻囲の結果陥落(グレゴリオ暦一六三二年五月二十日＝ユリウス暦五月十日)した同市は暴兵^{ソルダト}にも略奪・放火され、死者は二万(F・シラー『三十年戦争史』第二巻(一七九〇執筆) Friedrich Schiller: *Geschichte des dreißigjährigen Kriegs*. *Zweytes Buch*. によれば(三二二)にも及び、生存者は僅か五千程度、その大半は攻囲軍の捕虜とされ(おそらく凌辱され)た女性だった(シラーにはこの叙述無し)。市は三日の間燃え続けた。残ったのは教会二と小宅数戸(シラー)。この悲惨な占領と炎上は「マクデブルクの婚礼」*Magdeburger*

- Hochzeit と言われる。三十年戦争が漸く終了したヴェストファリア条約締結時(一六四八年十月二十四日)、市の人口は五百に満たなかつたとか。
- (133) 店出し自由の市で auf offenem Markt. auf offenem Markt は「公衆の面前で」「公然と」くらいの意味だが、ここでは「歳の市」とか「教会堂開基祭」のように市民ではない旅廻りの香具師や行商人も(いくらかの料金を市に納めれば)店が出せる時・場所と考へたので、敢えてこのように訳した。訳の可否について識者のご高教を俟つ。
- (134) そこへ一人の市民が町から出て来た Da kam ein Bürger aus der Stadt gegangen. これから考えると、魔術師の興行はマクテブルクの市の立つ広場ではなく、市外で行われたようである。
- (135) 跣足修道士ヨーハン・カピストラヌス Barfüßermönch Johann Capistranus. イタリアのラクイラ地方(現アブルッツォ州)カピストラノ生まれのフランシスコ派修道士ジヨヴァンニ・ダ・カピストラノ(一三八六—一四五六)。名高い放浪説教師、軍司令官、異端審問官、ユダヤ人迫害者。
- (136) メランヒトン Melancthon. 宗教改革派の神学者、人文主義者。詳しくはDSB三九注参照。
- (137) ペガウの教区監督庭園 Superintendenturgarten zu Pegau. ペガウはザクセン州ライプツィヒ郡の歴史的都市。「教区監督」は新教会の聖職階位ないし職務分担で、カトリック教会の司教にあたる。この用語は後にも出る。
- (138) ヴォルミーアシュテット Wohnstätte. 現在の綴りは「Wohnstedt」。現ザクセン州ベルデ郡の都市。
- (139) ガルデレーゲン Galdelagen. 現ザクセン州アルトマルク郡ザルツヴェーデルの郡庁所在地。古い歴史を持つハンザ都市。ザルツヴェーデル南方に位する。
- (140) ドルスス Drusus. ローマ皇帝ティベリウスの弟ネロ・クラウディウス・ドルスス(前三八—後九)。ティベリウスの息子小ドルススに対して大ドルススと呼ばれる。ローマの軍司令官として軍団を率いてゲルマニアに侵攻、ゲルマン人を撃破した。その戦功を讃えて死後ローマ元老院から「ゲルマニクス」の称号を与えられている。
- (141) イシス Isis. エジプト神話の女神。太陽神オシリスの妹にして妻。イシス信仰はローマ共和制末期にローマに輸入され、二〇〇年頃にはその全版図に及んだ。
- (142) 「聴きたまはす」の日曜日 am Sonntag Exaudi. 「エクサウディ・ノス」exaudi nos で始まる旧約聖書詩編二十七篇七節に因む。復活祭後の第六日曜日。
- (143) カルベ Calbe. 現ザクセン州アンハルト州アルトマルク郡ザルツヴェーデルの小さな町。ミルデ河畔に位置する。現在は「Kalbe」と綴る。

- (144) アルフエンズレーベンの殿たち die Herren von Alvensleben. アルフエンズレーベンの殿はガルデレーゲン市にある城塞の城主だった。北ドイツの貴族アルフエンズレーベン一族の流れである。以下の話はガルデレーゲンとエクスレーベンの城主ヴァレンティン・フォン・アルフエンズレーベン(一五二九—九四)——乗馬の名手で知られた——が市の北門(ノルトラート)の権利を市参事会に百グルデンで売却した故事に由来するらしい。
- (145) ザルツヴェーデル Salzwedel. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク郡ザルツヴェーデルの郡庁所在地。古い歴史を持つハンザ都市。
- (146) フォイボス・アポロン Phoibos Apollon. アポロンの別名としてしばしば用いられる「輝ける者」の意というが、言語的根拠は不明とか(呉茂一『ギリシア神話』、新潮社、昭和四十四)。ギリシア神話の太陽神。ローマ神話のヘリオスと同一視される。
- (147) ドウカートン金貨 Dukaten. イタリア語「ドウカート」duccato. 古くから金貨が流通していた東ローマ帝国やイスラム諸国との貿易で栄えたヴェネツィア共和国で一二八四年鑄造された高純度の金貨がその名の発祥。貨幣に刻印された銘の最後の字 ducat に拠る。ヴェネツィアやフィレンツェから北方へ広まり、ハンガリアやボヘミアでも鑄造されるようになった。たとえばブラーク(=ブラハ)近郊の金鉱山オイレEileの金で作った「オイレンドウカートン」Eilendukaten. 十六世紀半ばには約三・四グラムの金が含まれていたらしい(慶長小判の金含有量は一五・一グラム強)。因みにヨーロッパ初の金貨は一二五二年フィレンツェ共和国で鑄造された「フィオリノ」fiorino(総重量約三・五四グラム。金の含有比率は不明)。これがドイツ語圏でグルデン金貨 Goldgulden と後に称される貨幣。
- (149)(148) 車裂きの死刑 der Armsindertod des Gerädertwerdens. 「車裂きの刑」に関してはDSB一二二注参照。
免罪符売りのテッツェル Tezzel der Abblätkamer. ドミニコ派修道士ヨーハン・テッツェル(一四六〇—一五一九)。一四八九年ライプツィヒのドミニコ派聖パウロ修道院に入り、頻繁に不在であったにも関わらず終生同院に所属(修道士の「定住の義務」はどうしたのだろう)。一五〇四年ドイツ騎士団のために免罪符販売を開始。以後中断はあるが、ザクセン、南ドイツ、オーストリアで販売活動に従事。インスブルックで姦通罪の廉により死刑判決を受けたが、同地に滞在していたザクセン選帝侯フリードリヒが皇帝マクシミリアン一世に取り成して放免される。ザクセンに戻った彼は一五一七年以降マインツ大司教アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク(一五一四年就任)の依託によりハルバーシュタット司教区およびマクデブルク大司教区(アルブレヒトは一五二三年来マクデブルク大司教でもあった)で免罪符販売。この活動がヴェイッテンベルク大学聖堂の門にルターが九十五箇条の論題を貼り出す誘因となり、引いては宗教改革を開始させたとも言えよう。一五一八年教皇レオ十世によって神学博士号を授与される

- 彼には元来得業士元来得業士の資格しかなかったのだが——。一一五一年ベストで死去。「テッツェルの金櫃」Teufelkasten は免罪符販売の収益金を入れたものだったが、テッツェルはこの櫃に淨罪火で憐れな魂を苦しめている悪魔を描かせ、絵の上には「櫃の中でお金が鳴れば、魂が煉獄の火から跳び出る(あるいは「魂が天国へ飛んで行く」と記されていたとか。マインツ大司教の勢力範囲で頒布された免罪符売却金の半分はローマへ送られて聖ペテロ(サン・ピエトロ)大聖堂改築や対トルコ戦争の資金に、後の半分はマインツ大司教と個別の免罪符売りの懐に入ったらしい。
- オルターラー銀貨 Orsthaler. 四分の一ターラーの価値がある銀貨。
- (151) (150) 振り糸二つ zwei Zahlen Garn. 「二つ」の単位は分からない。糸の単位は普通「総か」。現代日本の一総は綿糸で七六八メートル、毛糸で五一二メートル。これらに比してずっと細く軽い日本の座繰り生糸の場合、一総(八二・三五グラム、一一三〇メートル)、所要時間は座繰り一六〇分+撚糸一三〇分+絞http://www2.pref.watate.jp/~hp2088/seika/h12/b33.pdf。これで見ると、休憩・食事時間を加算すれば、一総の綿糸を作るのは一日仕事である。亜麻糸、綿糸、毛糸でも一総が通常一日の生産量だったか。
- (152) 糸紡ぎ寄せ場(糸紡ぎ部屋) Spinnenkoppel (Spinstube). 中・近世のドイツの村落では、秋と冬の夜長、既婚、未婚の女性たちが一つの家の大きな部屋に集まって糸紡ぎに励むのが通例だった。こうすればお喋りや唄の交換ができるので、単調な作業もいくらか楽しくなるわけ。当然独身の若い男たちも楽器などを持ってやって来る。十九世紀には、風紀が乱れる、との理由で警察がたびたび禁止令を出したこともあるとか。
- (153) マリアの聖燭祭 Marie Lichter. 生後四十日のイエス・キリストが聖母マリアとナザレのヨセフによって産後の潔めの式を受けるためにエルサレムの神殿に連れて来られたことを記念して祝う。グレゴリオ暦で二月二日。古くからあった立春をことほぐ光の祭典と結び付いたものか。季節の変わり目ゆえ、聖燭祭に関するドイツの俚諺は多い。
- (154) 聖燭祭ならお昼には腸詰めをば食べなくちゃ。夜は紡ぐの忘れなくちゃ。Lichter muß man die Wurst bei Tag eß. 補足すれば「聖燭祭ならお昼には腸詰めをば食べなくちゃ、夜は紡ぐの忘れなくちゃ」Zu Lichter muß man die Wurst bei Tag essen, und bei Nacht das Spinnen vergessen. とでもなるろうか。聖燭祭ともなれば秋・冬の大切な貯蔵食糧であるソーセージもそろそろ食べきってしまうのもよ、そして秋・冬の夜なべ仕事の糸紡ぎもそろそろおしまいにすべきだ、と解釈すれば意味は通ろう。なお、中・近世のヨーロッパの貧民にはハム、ベーコン、ソーセージなどの加工肉は減多に口にできなかつたようだ。だから聖燭祭の昼食にソーセージというのは農村なら裕福な人人の場合であろう。
- (155) プラークの楽士 Prager Musikanten. 詩人ヴィルヘルム・ミュラー(一七九四—一八二七)の詩「プラークの楽士」「Ohnann Ludwig Wilhelm Müller: Der Prager Musikant」の第一節は以下の通り。「背中にや提琴提琴／手にや帽子／おれたちプラークの楽士た

- ち／＼キリスト教国遍く巡(びづ)べ」Mit der Friedel auf dem Rücken / mit dem Kappel in der Hand / ziehn wir Prager Musikanten / durch das weite Christenland & bis in Eutaynの脳裡にはこの物語詩があつたのだらう。
- (156) マリーエの糸、マリーエの絹 翔(は)ぶ 夏 Marienfäden, Marienseide, fliegender Sommer. 「糸遊」。晩秋や早春の晴天の日、蜘蛛が糸を吐きながら空中を浮遊すると、その糸が陽光を受けて輝く現象およびその糸。
- (157) アーレントゼー Arendsee. 町としてのアーレントゼーはアルトマルク地方北部＝現ザクセン＝アンハルト州北部にある。現人口七〇〇余。その北に広がるアーレント湖は楕円形で入江のない湖。五平方キロ以上の水面積はドイツの自然湖としては最大、深さはほぼ五〇メートルで北ドイツの湖では最深である。
- (158) ベルト海峡 die Belt. フェーマルン・ベルト海峡のことか。これはドイツ領フェーマルン島とデンマーク領ロラン島の間にある。あるいは大・小ベルト海峡を指すのかも知れない。
- (159) なんぢ古昔の世の道を行はんとするや、是あしき人の踐たりしものならずや。彼等は時いまだ至らざるに打絶れ、其根基は大水に押流されたり Wilst du der Welt Lauf achten, darinnen die Ungerechten gegangen sind? Die vergangen sind, ehe denn es Zeit war, und das Wasser hat ihren Grund weggeschwemmen. 旧約聖書ヨブ記二十二章十五—十六節。
- (160) 大外衣 Chormantel. 祝祭や葬儀の行列に参加する時、カトリックの聖職者が羽織る大きな外套。裾が極めて広いものがある。雨具にもなる。ミサの際に纏(き)う上祭服 Kaselとは異なる。
- (161) 皇帝ロタール Kaiser Lothar. ザクセン公(在位一〇六一—一〇六七)、ドイツ王(在位一一二五—一一三七)、神聖ローマ皇帝(在位一一三三—一一三七) ロタール三世(一〇七五—一一三七)。
- (162) オスターブルク Ostenburg. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク地方シュテントール郡の都市。現人口一万余。一二〇八年都市権を獲得。十三世紀ブランデンブルク辺境伯の支配下に入る。一四三六—一七八年ハンザ同盟の一員。三十年戦争中何度も略奪され、一六四四年荒廃した。
- (163) 樽を焦がし die Bottiche austrehnen. 酒類醸造・貯蔵用木樽(現代ではウイスキー貯蔵用のそれが特に有名)の内面を焦がして、一ミリ程度炭化させるのは醸造技術の一つ。新しい樽は必ずそうしなければならず、古くなった樽も活性化のため再度そうする。燃える燃料に底の無い樽を被せて、内面を焦がす。現代ではバーナーを用いもする。ただしこれはいずれも小規模な場合である。大規模な場合は口を開けた大きな炉の前に樽を置いて行うようだが、詳細は知らない。識者のご高教を俟つ。
- (164) 樹脂 Pech. これは醸造用樽のことゆえ樽の目塗り用の「樽樹脂」Falspech(かつては飲料を入れる樽やジョッキにも使われたが、現在は食品衛生法により使用は禁じられている由)であらう。英語の「ピッチ」pitchと同様ドイツ語「ペッチ」Pechには二つの

意味がある。すなわち、コールタール Kohlentear^{木タール} Holztaer などから揮発成分を蒸留した粘性の残り滓である「タール」と「樹脂」(これは特に南ドイツ、オーストリア)である。中世ドイツではこの二つの意味が混じり合っていて、ともするとどちらを指しているのか皆目不明。事典には「教会や王城の照明に使われる」とあるかと思つて——タールも樹脂も共に松明に染ませて火力と燃焼時間を増加させるので、この場合もどちらを指すのか不明——「包囲された都市や要塞の防禦戦で恐るべき武器として用いられた」——これは後述するやうにタールである——とある(『中世事典』Lexikon des Mittelalters, J. B. Metzler Verlag)。「不幸せ者」Pechvogel(直訳「ペッチ鳥」)は中世ドイツで木の枝に樹脂を塗つて小鳥を捕獲したことに由来する語彙だが、「不幸せ者」Pech haben(直訳「ペッチを持つ」)は都市市門や城門の上部に設けられた鼻の形の小さな出槽「ペッチの鼻」Pechhase から注がれる煮え滾つたタールで、突入を図る攻囲軍の将兵が死傷したことから出たのかも知れない。このやうに「ペッチ」にはもう一つ「不幸」「災厄」の意もある。この伝説でペヒシュタインは「ペッチ」を掛詞としてふざけている。

現代、切り花用花瓶など木製液体容器のコーティング(アウスペッチェン)auspechen)に用いられる「樽樹脂」は、唐檜属 Fichte(蝦夷松、針樅など)その他の針葉樹から採れる樹脂 Harz のこと。樹脂なので香りが良い。この色には二説ある。「グリムドイツ語辞典」では、樹脂は白ないし黄色」と記されている(樹脂の化石が琥珀だが、これは文字通り琥珀色が多い)が、十八世紀のドイツ語語彙に詳しい『アーテルンゲドイツ語辞典』Johann Christoph Adelung: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart, Leipzig 1774-86, 5 Bde. では、黒褐色」と記されている。新しい樹脂の色は前者、古い樹脂の色は後者と考えて良からう。しかし緑色の樹脂もある。いずれも粘着性の強い固体だが、一八〇—二〇〇度Cに加熱すればとろりとした液体になる。

醸造・貯蔵用木樽の内面を焦がすための着火剤にも「ペッチ」が用いられることがあつたらしい。タールも樹脂も極めて燃え易いから、着火剤としてはどちら都好適だが、タールは臭く、樹脂は芳香を発する上、コーティングには樹脂が用いられるので、着火剤としても持ち合わせの樽樹脂を使った、と考えるのが自然か。

なお、余談ではあるが、グリム兄弟編著『家庭と子どものための昔話集』(KHM)、ペヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(DMB)などに登場する「ペッチ」は、それが「ペッチのやうに黒い」pechschwarz なる文脈であるなら、タールと考える方が妥当か、と思う。因みに pechschwarz に当たるフランス語 poix noire の poix は「木タールピッチ(木材から得られたタールの蒸留残渣)」(樹脂、松脂は poix résine)である(『ロワイヤル仏和辞典』第二版、旺文社、二〇〇五)。同じく pechschwarz に当たるデンマーク語は bogsort^ビ beg は「ピッチ」である。beg に「樹脂」の意はない。

KHM、DMBなどの「ペッチ」がタールであるとすれば、中近東など今日の原油埋蔵地帯に古代から天然に産出した「ユダヤ

- のベツヒ」Judenepech = 「山のベツヒ」Bergpech、石炭を大量使用するようになった近世西欧でかなり身近なものになった「コールタール」のいずれでもなく、古代ローマの都市住民にあつては一般的で、中・近世以降はヨーロッパの都市住民にも台所の燃料として用いられるようになった木炭の製造過程、すなわち、木材の高温乾溜の過程で得られる、常温では粘稠な液体である「森のベツヒ」Waldpech、すなわち「木タール」であろう。この色は真つ黒、防水・防腐剤として木造船船時代、船板、索具などの塗料として用いられたし、現代でも木造ボートに使用されている。また、樹脂と混ぜて靴や樽に塗られもした。つまり、日常、人人の生活のそこそこ頻繁に見られたのである。
- (165) ドイツ Deutz. 現在ケルンの街区の一つ。
テューリンゲンのグラライヒェン伯爵が二人妻を持っていた伝説 die Sage von der Doppelhe der Grafen von Gleichen in Thüringen. 二人の妻を持ったグラライヒェン伯ルートヴィヒに纏わるテューリンゲンの伝説はDS五八一として語られ、またJ・K・A・ムゼーウス著／鈴木満訳『ドイツ人の民話』所収「メレクザーラ」Meleksala > Johann Karl August Müsüus: *Volksmärchen der Deutschen*. (邦訳所収。鈴木満訳『メレクザーラ ドイツ人の民話』、国書刊行会、平成十九年)の素材となっている。ベヒシュタインはムゼーウスと同じテューリンゲン人であり、この同郷の大先輩にすこぶる私淑していたところから、民話・伝説に素材を借りたその初期の小説集『テューリンゲンの民話』(一八二三)に収められている「ゼリンデー」Seinde > *Thüringische Volksmärchen*. In: Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen*. の枕に「メレクザーラ」の大団円が用いられている。邦訳。鈴木満訳「ゼリンデー」、『武蔵大学人文学会雑誌』第三十九巻第三号、二〇〇八年。
- (167) アウローゼン Aulosen. 現ザクセン＝アンハルト州シュテテンダール郡アーラントの一部。数世紀に亘りヤーゴウ一族の支配下にあつた。現人口二〇〇余。
- (168) ヤーゴウ一族のある殿 ein Herr von Jagow. ヤーゴウ一族はアルトマルクの古い、重要な貴族の家系。一二六八年文書に出、現代まで持続している。
- (169) 教皇の特宥 Dispensation des Papstes. Dispensation (法の適用の)緩和・免除)とはカトリック教において特定の場合に教皇・司教などの意志により教会法の力を一時停止すること。あるいはその旨を記した免除状。ここではもちろん同時に二人の妻を持つことの特認可。
- (170) 洗足木曜日 Gründonnerstag. 聖木曜日。受難週(復活祭直前の一週間)の五日目。キリスト教会は、この日イエスが十二使徒と共に晩餐を摂ったことを記念する。イエスは食事中立って使徒たちの足を洗った(新約聖書ヨハネ伝十三章三十七節)という。「洗足木曜日」と呼ばれる所以である。受難週は四旬節最後の週であり、四旬節はカトリック教会、聖公会、ルター派教会、正教会共に

に大齋(食事制限)を守るのが(少なくともかつては)建前。すなわち獣肉・鳥肉、卵、乳製品は禁じられ、野菜や魚で簡素な食事を(食)する。食事も控える(充分食べてよいのは一食のみ。後の二回は僅かに)。

(171) 豌豆と干鱈 Erbsen und Stockfisch. 豌豆は完熟したえんどう豆の莢を取り去り乾燥させたもの。干鱈とは、カーベリヤウ Kabeljau・レンク Leng・シエルフイッシュ Schellfisch といった鱈の類を内蔵と頭を取り、開きにして塩で漬け、かつ数箇月干したもの(因みに日本の棒鱈——干鱈ともいう——は真鱈を三枚におろし、塩を振らず、北国の厳冬期に一、二箇月程度天日干しにする)。豌豆も干鱈も調理前に水で戻す——後者は塩出しも充分にする——必要があることはいうまでもない。

(172) 大ガルトツ Groß-Gartz. 現ザクセン＝アンハルト州シュテンダール郡ツエーレントールの一部。現人口七〇〇余。エアフルト大聖堂所在 im Dome zu Erfurt. エアフルトはテューリンゲン最大で、経済的に最も重要な都市。現テューリンゲン州都。夥しい教会と修道院を有していたため、中世には「テューリンゲンのローマ」Thüringisches Romとの異名を附けられたが、

一五二二年新教に改宗。しかしながら、中・近世を通じて遠隔のメインツ大司教の支配を脱することはできなかった。この都市の象徴は大聖堂広場に並んで聳える大聖堂と聖セウエルス教云で、その景観の複合効果は一種独特な美しさである。しかし、J・K・A・ムゼーウス「メレクザール」によれば、二人妻を持ったグライヒェン伯爵エルンストとその妻たちの奥津城は、大聖堂ではなく旧市街西側の小高いペテロの御山なる聖ペテロ教会にある由。いわく「かの地の山の上には彼らの墓碑がまだ見られるが、これはこの高貴な寝台仲間の姿を生きている時と同様刻んだ一基の石である。右側には賞讃すべき叡智の象徴として手に一枚の鏡を持つ伯爵夫人オッティーリア、左側には王冠で飾られたサラセン女性、そして中央にはその紋章——獅子に似た豹——付き盾に凭れた伯爵である(鈴木満訳)。

(175) タンガームユンデ Tangermünde. 現ザクセン＝アンハルト州シュテンダール郡南部にあるエルベ河畔の小都市。

(174) 牡鹿 Eich. 体長二四〇—三二〇センチ。肩高一四〇—二三〇センチ。体重二〇〇—八二五キロ。鹿科最大種。牡の成獣は鏡のような平たい角を持つ。角は巨大で二〇センチ以上に達することもある。ユーラシア大陸北部、北米北部に棲息。

結びに一言。

DSB二九〇「ヴェッターブルク」に出て来る、往昔の騎士物語から引用した、という古いドイツ語の一部が分からなかったので、ヨーロッパ文化学科新田春夫特任教授にまたまた伺った。新田教授は春休みを利用してドイツ

で、ご研究中だったにも関わらず、メールでただちにご回答くださった。新田さん、いつもまことにありがとうございます。